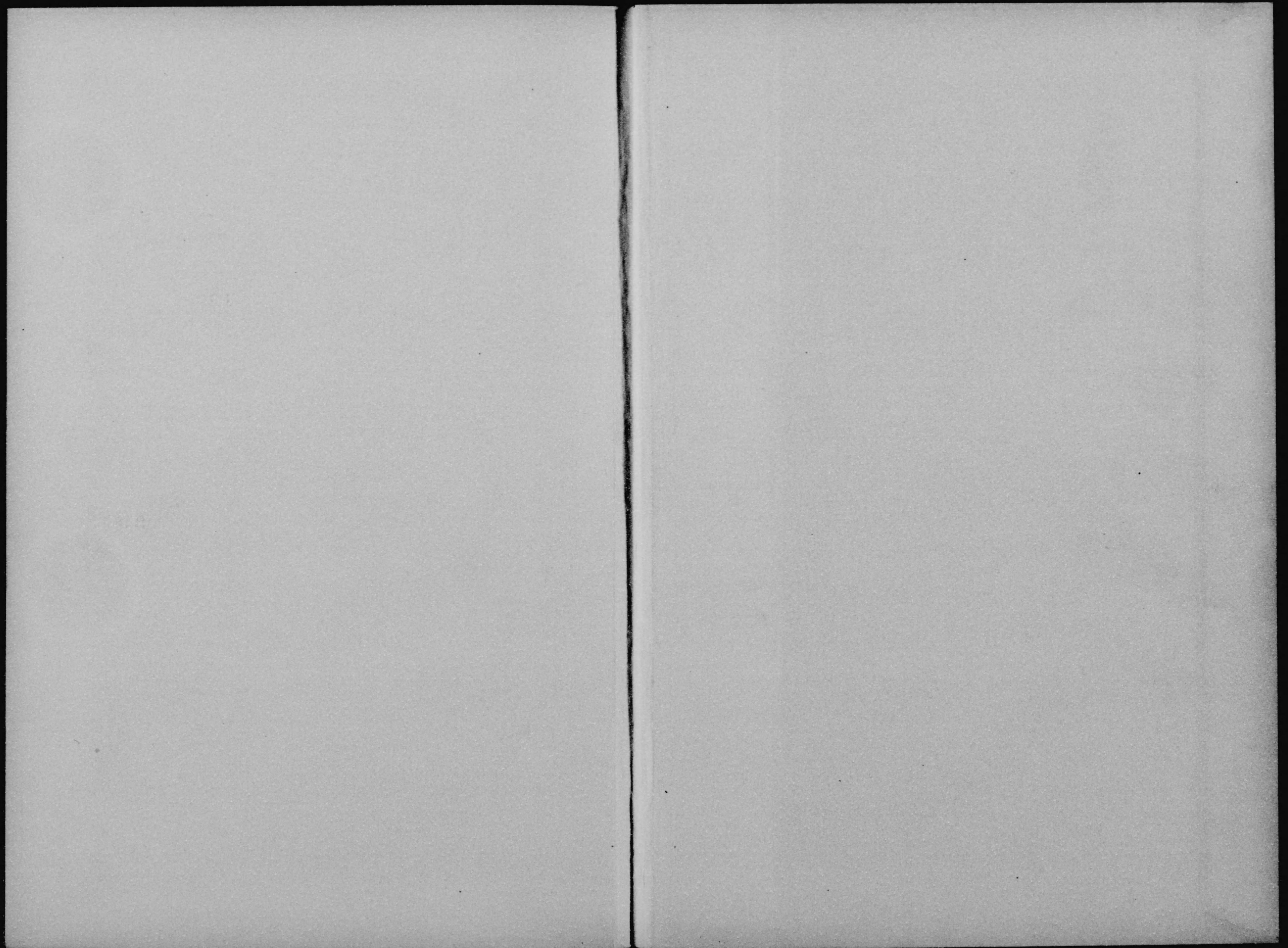
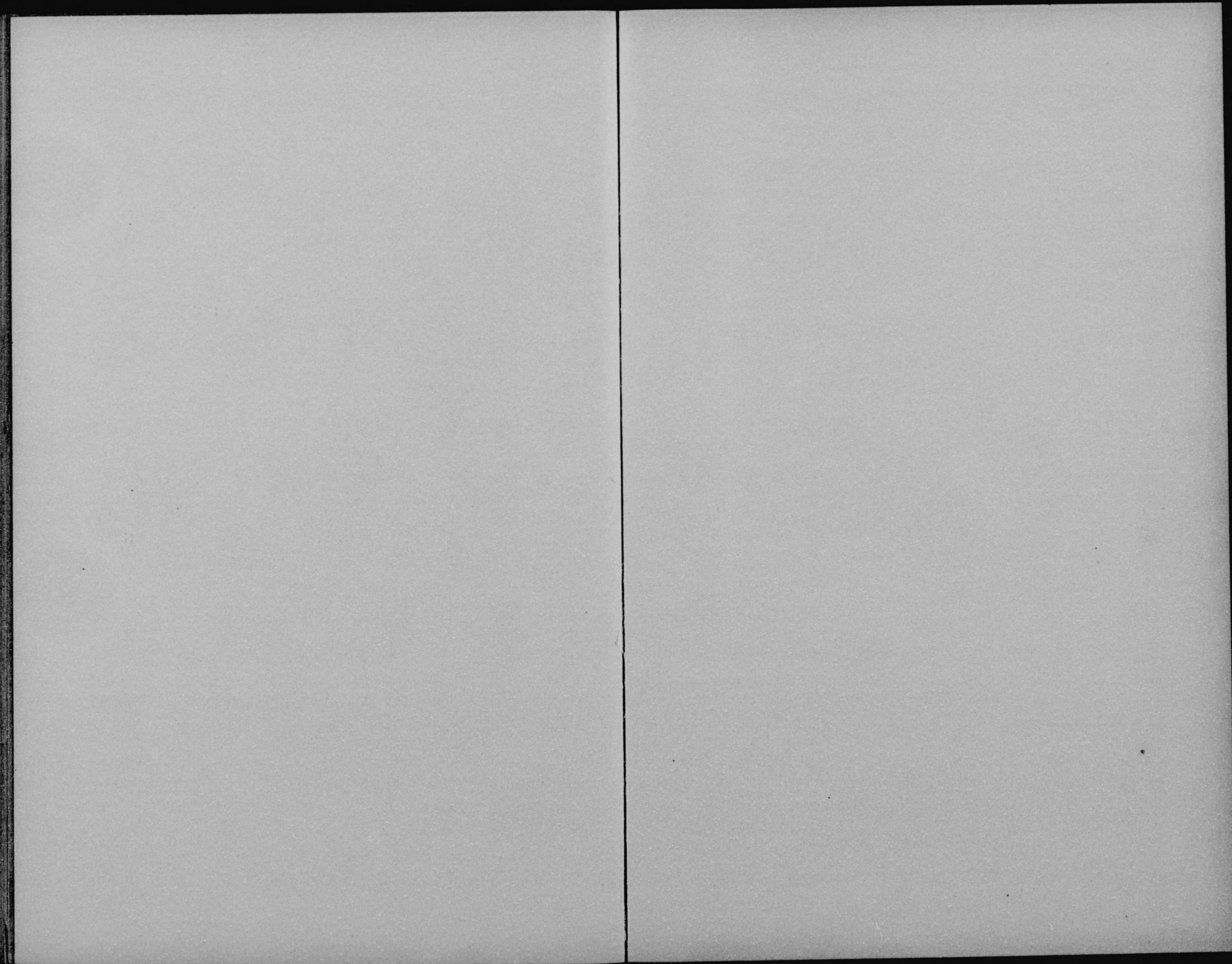
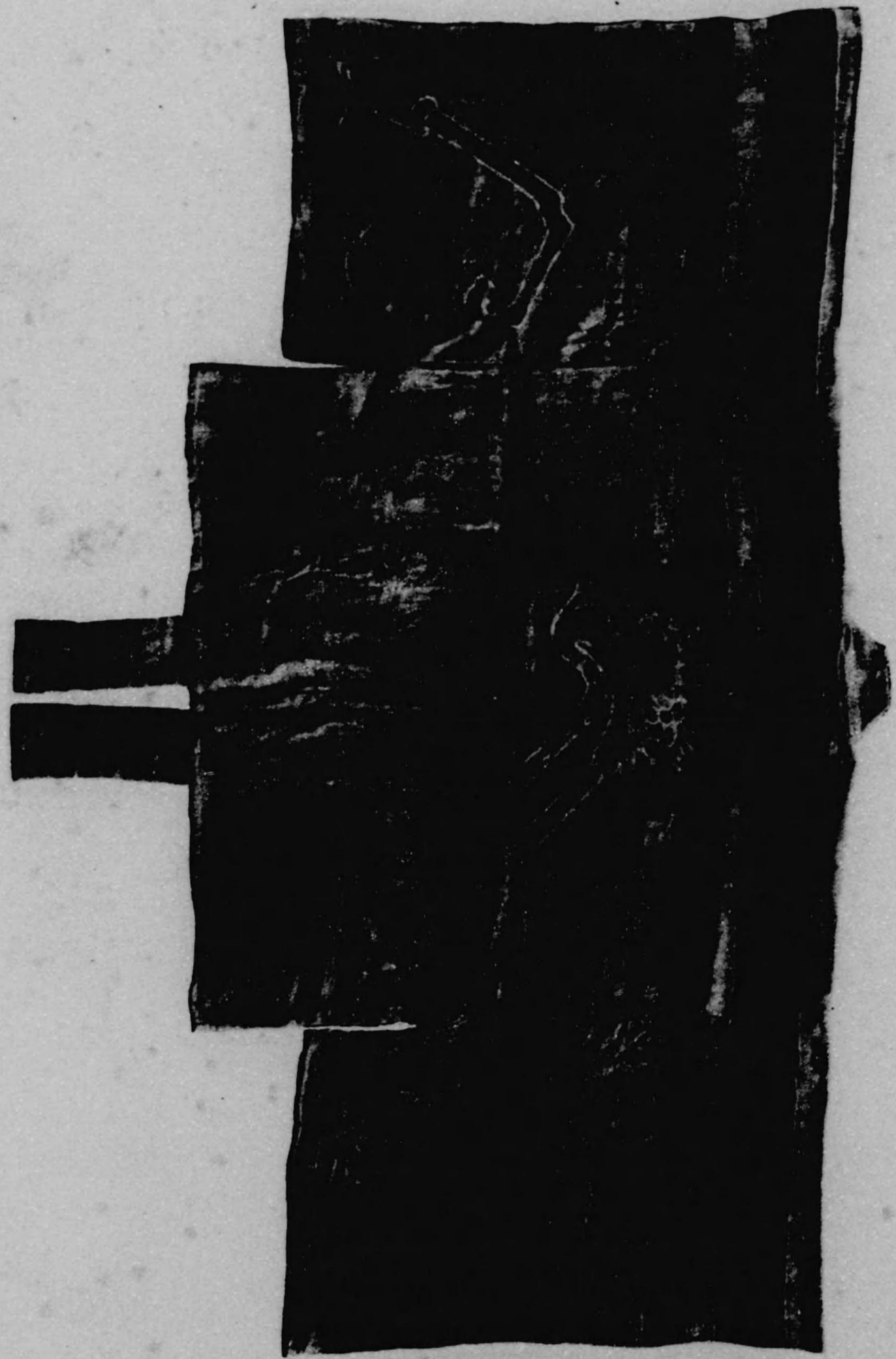


385.2  
H353A  
0





圖版第一 ゆはぎの一種(古戸)



後編 目次

一 神

神樂の存在..... 一

・花祭りとの關係..... 三

三種の神樂..... 四

祭りの基本..... 五

安政二年が最後..... 七

神樂に關係の土地..... 七

神樂屋敷..... 八

神樂林..... 九

神樂の開祖..... 一〇

行事の梗概..... 一〇

神樂の傳承者..... 一一

神樂次第口傳書..... 一一

目次..... 一

行事の内容……………二

次第の解説……………四五

第一日の行事……………六七

第二日……………六七

白山に就いて……………九七

第二日の行事……………九七

次第説明の後に……………一三三

祭文 歌謡……………一三八

おりぬのおそび……………二一八

わかこのしめ……………二二四

若子の注連……………二二五

若子のしめ……………二四一

神樂申付……………二四六

子種ひろひ……………二四九

木魂招の事……………二五五

橋 拜見……………二五八

四目之本戒之次第……………二六三

## 二 御神樂

二七一

各種の形式……………二七三

式の御神樂……………二七三

大谷御神樂……………二九一

熊野三社の祭り……………二九九

しめのはやし……………三〇三

清めの御湯……………三〇三

御戸帳開き……………三〇三

天狗 祭り……………三〇三

式の御神樂……………三〇四

てんでの舞……………三〇四

惣氏子の舞……………三〇五

伊勢の花の舞……………三〇五

「げんど」の舞……………三〇五

産衣引き……………三〇六

どんづく……………三〇八

目次……………三

日次	一八八
鬼神	一八九
兄弟鬼	一九〇
れぎ	一九一
はなうり	一九二
女郎曲	一九三
的張り	一九七

三田 樂

田樂の分布	一九九
各種の形式	二〇一
西浦田樂	二〇六
祭りに與る者	二〇九
行事と種目	二二三
假面の種類	二二七
行事開始より當日迄の次第	二三二
祭祀當日の行事	二三四
晝の「おこなひ」	二三四

夜の「おこなひ」	二三九
地能三十三番	二三五
「ばね能」十二番	二四六
歌謡	二五六
うるまひ	二五六
高きこ	二六一
しんたい	二六六
梅花	二六八
くわんのんのこぼらうらく	二六九
やしまだんのうら	二七一
くらま天ぐん	二七四
山姥	二七七
しよじよ	二八三
のゝみや	二八五
さなひめ	二九三
辨慶	二九六
「おきな」由來	二九九
黒倉田樂	三三〇

目次	五
----	---

目次

田樂の現状……………三二〇

田樂種目……………三二三

三面に就いて……………三二二

七社明神由来……………三二四

田峰田樂一部の次第

歌話

神歌(かみうた)……………三二六

十千まつり……………三二八

水見……………三二九

さかさきやう……………三三〇

田打……………三三〇

代ならし……………三三一

芽づらとり……………三三一

よなどう……………三三二

鳥追ひ……………三三七

柴刈り……………三三九

田植……………三四二

田植歌……………三五三

翁面申……………三五四

黒澤田樂を中心として

黒澤田樂……………三五七

寺野田樂……………三五八

其他の土地……………三六九

さんぞろ祭り……………三六〇

ひよどり……………三八〇

曾川田樂……………三八〇

河内田樂……………三八三

足込田樂……………三八三

古戸田樂……………三八七

亡滅せる事實……………三八七

行事の實際……………三九七

歌謡と詞章……………四〇一

四學……………四〇二

目次……………七



ちやうせいてん ..... 四一九

一 あんじよう ..... 四二五

二 あんじよう ..... 四三〇

いづみしきぶ ..... 四三三

櫻太郎へんかう ..... 四三七

せんだのじやう ..... 四四二

いまいち ..... 四四七

みよしうた ..... 四四八

ひかりどふ ..... 四四九

てんぐるま ..... 四五〇

せんまんさい ..... 四五〇

おきな詞章 ..... 四五二

さんば詞章 ..... 四五五

四 地狂言雜記

地狂言全盛地 ..... 五二一

狂言村と狂言系 ..... 五三三

奉納三番叟 ..... 五三九

狂言舞臺と御假屋の位置 ..... 五五一

盆踊りと盆狂言 ..... 五五九

塚處と氏神と ..... 五六〇

神樂組 ..... 五九二

五 山村手記

花の木 ..... 六〇三

濱射場其他 ..... 六〇五

屋敷名 ..... 六一三

狩祭り ..... 六一七

神の木 ..... 六二二

「しやち」と七人塚 ..... 六二五

折柴の塚 ..... 六三一

門ばやしと「みたま」祭り ..... 六三八

古真立の「みこ」の面 ..... 六四四

六 各種の記録

各種の記録……………六四九

巫女免許狀……………六四九

神道裁許狀……………六五〇

設樂舞山緒書……………六五一

せんみやう……………六五八

田峰田樂役割帳……………六六三

田峰田樂次第序……………六六六

大土公神之祭文……………六六七

大土公神祭文……………六九三

十二尊祭禮翁物語の事……………七〇六

翁口傳……………七二四

黒倉田樂翁語り口傳……………七三〇

神樂覺……………七三五

折意の遊……………七三八

御神樂覺の事……………七三九

御神樂申付……………七三三

牛頭天王烏渡り……………七三七

糸綿のこと……………七四三

四日神樂次第……………七四七

殿樂踊り歌謠……………七五〇

後記……………七六九

折口信夫跋……………七八七

問題索引……………八三三

圖版目次

圖版第一 ゆはぎの一種(古戸)……………口繪……………六

圖版第二 神樂屋敷と古戸の部落……………六

圖版第三 神樂傳法書……………三

圖版第四 神下し行列と御神樂の面……………一六

圖版第五 西浦の部落……………一〇八

圖版第六 西浦田樂……………三三

圖版第七 黒倉田樂の面……………三三

圖版第八 段戸山と折立の部落……………三六

圖版第九 古戸田樂の面(一)……………三〇

圖版第一〇 古戸田樂の面(二)……………三〇

圖版第一一 古戸田樂の面(三)……………三〇

圖版第一二 古戸田樂の面(四)……………三〇

圖版第一三 念佛踊り……………三六

圖版第一四 獅子舞……………三九

圖版第一五 松飾りと餅花……………三六

圖版第一六 墓地と「はざ」……………三〇

圖版第一七 さかきの舞動き(前編補遺)……………三九

挿圖目次

第一圖 坂字場に於ける神樂屋敷……………	九	第一六圖 神樂(新野)……………	二〇五
第二圖 坂字場神樂屋敷に於ける「みるめ」の墓……………	一一	第一七圖 八幡の舞(新野)……………	二〇八
第三圖 竹内吉郎次氏……………	一九	第一八圖 薬師の面(西浦)……………	二一八
第四圖 上黒川に於ける神樂屋敷の跡……………	一九	第一九圖 「しづめ」の面(西浦)……………	二一九
第五圖 古戸「神樂次第」挿繪……………	二二	第二〇圖 舞庭と「まこや」(西浦)……………	二二五
第六圖 白山の想像圖……………	二五	第二一圖 樂頭さだめ(西浦)……………	二二八
第七圖 上黒川に保存せる龍頭……………	二九	第二二圖 墨塗りに用ゐる御器(西浦)……………	二三九
第八圖 木澤に於ける舞臺と社殿の位置……………	二七	第二三圖 別當屋敷の「おと、木」(西浦)……………	二三三
第九圖 大谷熊野神社と舞庭の位置……………	二八〇	第二四圖 地固め(西浦)……………	二三六
第一〇圖 白と杵(大谷御神樂)……………	二八三	第二五圖 楢ひき(西浦)……………	二三九
第一一圖 御神樂の舞(古戸)……………	二八五	第二六圖 水口とり(西浦)……………	二四一
第一二圖 的張りの的(古戸)……………	二八四	第二七圖 つゞみ(西浦)……………	二四六
第一三圖 御神樂の鐘(古戸)……………	二八六	第二八圖 ぶち(西浦)……………	二五二
第一四圖 「さくら」(新野)……………	二八三	第二九圖 牛若の舞(西浦)……………	二五四
第一五圖 「さくら」と鼓(新野)……………	二八三	第三〇圖 黒倉田樂舞臺……………	二八一

第三一圖 河原石(田峰)……………	三三九	第四八圖 狂言舞臺(本郷町)……………	三三三
第三二圖 舞庭(折立)……………	三六二	第四九圖 狂言舞臺(長篠村横山)……………	三三七
第三三圖 庭燎(折立)……………	三六三	第五〇圖 狂言舞臺(東郷村出澤)……………	三三七
第三四圖 不動の面(折立)……………	三六五	第五一圖 犬と傘鉾(門谷狂言)……………	三六〇
第三五圖 殿舞の動き(折立)……………	三六六	第五二圖 盆踊り(長篠村横山)……………	三六〇
第三六圖 さいばらひの面(折立)……………	三九	第五三圖 風來寺下の舞臺跡……………	三七〇
第三七圖 笹竹政十氏(古戸)……………	三八九	第五四圖 盆踊り花籠(只持)……………	三七九
第三八圖 さくら(古戸)……………	三九一	第五五圖 盆踊りの團扇(本郷町三ッ瀬)……………	三八二
第三九圖 銅鍬子(古戸)……………	三九一	第五六圖 田口町和市に於ける觀音堂……………	三八七
第四〇圖 ゆばぎ(古戸)……………	三九二	第五七圖 栗代の石佛……………	三八九
第四一圖 やす(古戸)……………	三九九	第五八圖 大入に於ける氏神の注連……………	六二六
第四二圖 さいほう(新野)……………	三九九	第五九圖 五穀の種(古戸)……………	六二〇
第四三圖 おんべ(古戸)……………	四〇〇	第六〇圖 おほくはがら(小林)……………	六二二
第四四圖 しづめ(古戸)……………	四〇〇	六一圖 くはがらと五穀の種(小林)……………	六二二
第四五圖 和尚の衣を着た佐々木氏(古戸)……………	四二〇	六二圖 しかとさこ(小林)……………	六三三
第四六圖 門谷狂言の傳承者と猿面……………	四三三	六三圖 山の神祭りの幣(富山村)……………	六三三
第四七圖 田峰觀音舞臺……………	四四〇	六四圖 こへい餅(足込)……………	六三六

挿圖目次

挿圖目次

第六五圖 はちじやう……………三九  
第六六圖 やすの一種……………六四  
第六十圖 古真立のみこの面……………六四

一  
神

樂

## 神樂の存在

### 花祭りとの關係

花祭りの次第は之迄に略ぼ要を盡したが、現在各所に行はれて居た花祭りには、其源流であり根幹と考へられるものが、別に地を同じくして存在したのである。之が七年目を期し、五ヶ村或は六ヶ村の團體に據つて行はれて居た神樂である。神樂は一に大神樂（おほかぐら）とも言うて、其次第形式に於て、花祭りとは密接な關係があり、花祭りは實に神樂の一分脈で、之を簡略し拔萃した觀があり、傳承に於ても又之を認めて居る。従つて花祭りに於ては、已に不明に歸した次第等の、神樂に據つて初めて意義の闡明するものがある。神樂の存在は花祭りの事實を究明する上に於ても、實に貴重なものであつた。一方花祭りの次第が、各所一律を缺いて居た一面には、此神樂の記憶の強弱が大いに影響して居たのである。此事實は近世で直接神樂に交渉を有たなかつた土地も同じである。

## 三種の神樂

花祭りを一に花神樂と稱した事は已に述べた處であるが、之に對して、別に神樂の一分脈と考へらるゝものに、前にも引合ひに出した御神樂（みかぐら）がある。御神樂は一に「しきのみかぐら」とも言ひ、花祭りの行はれて居た地方に、今も並存して居て、時には花祭りの一部に加へられて居た場合もある。以上の事實から「かぐら」の名を以て呼ばれて居た行事が、同一地域に、略ぼ三種存在した事になる。即ち

花祭り（花神樂）——御神樂——神樂

である。此三種の行事は、名稱が甚だ似通つて居た如く、内容も又共通せる點が多かつたのであるが、さう言うて、何れか一ツに還元さるべき性質でもないから、各別個のものとして觀察するより他ない。此事は神樂の由來を説いたと思はれる、神樂申付（かぐらまうしづけ）なる祭文にも區別して居た事實がある。唯之等を比較した場合、祭祀の對照觀念に各差等があつた。例へば村の氏神又は或特定の神社の祭祀とする意識は、三種の中御神樂が最も濃厚で、花祭りが之に亞いたのである。此點で階梯を設けると

御神樂——花祭り（花神樂）——神樂

の順序になつて、神樂が最も此意識に遠かつた感がある。

## 祭りの基本

御神樂又は花祭りに比較すると、神樂は其次第の大規模な點、神事の嚴肅な程度から、一方を例祭とするに對して、之を大祭とする如き態度があつた事は事實で、一般傳承の上からも、花祭りは神樂の次第を窺したものと云ひ、御神樂は更に花祭りの一部分とする説もあるが、之は形式上の問題で、根本の思想は別であつたらしい。従つて例祭に對する大祭の意味は、村々の神社を對照とする時は、極めて意義が薄弱である。仍つて神樂は定在の神社の祭りとする觀念から、脱却して考ふべきものと思はれる。従つてその事實は祭りの一ツの基本として存在したとも言へる。已に御神樂なり花祭りを有つて居る土地としては、少し極端な言分ではあるが、一面祭祀の競技とも、鍛鍊とも言ふべき意識の現はれもあつたと解すべき節がある。

安政二年が最後

神樂の次第は、非常に大規模で、之に與る者も五ヶ村或は六ヶ村の團體であつた事は前に述べた通りで、之には多大の費用と人員を要した上に、神事は想像も及ばぬ嚴重を極めたのである。例へば其費用に於ても、昔から米百俵金百兩薪百間と稱した一事でも、其規模は想像されるのである。土地は山深く人は少く、經濟状態も極度に貧弱であつた地に、斯様な行事が繰返されて居た事は、寧ろ不思議とする他ない。此一面の事實の影響に據るか、本來七年目毎に繰返される譯であつたものが、安政二年今の豊根村下黒川で行はれたものを最後として、遂に中絶の運命を辿つた。安政二年の前は、弘化四年同じ上黒川、其前は天保十一年振草村古戸であつた。七年目を以て通算すると、此間に一年の開きがあるが、其理由は何に據るか究め難い。古戸の前が豊根村坂宇場(さかうば)であつたから、之を年次から繰ると、天保五年に當るが、之又正確な年次を肯定する材料は無い。

坂宇場の前は下津具で、今も祭りの行はれた跡に白山(しらやま)と稱して祠が祭つて居るが、その以前は、關係の土地を一巡して、下黒川であつたか否かも之又判らないのである。唯各所に保存された口傳書は、他の例から推しても、多く祭祀の度に作られたと思ふ節があるから、之に據つて判断すると、現在上黒川に保存された役割帳には文政五年十一月の文字があり、同



(大正十五年十一月黒川作)



(昭和二年一月黒川作)

上・中央高所にあるが神樂屋敷  
其上段杉の立てるは「みるめ」の祠(古戸)  
下・古戸字下古戸

圖版第二 神樂屋敷と古戸の部落



じ下黒川の次第書には正徳二年十一月、古戸の口傳書には元祿七年十一月のものがあるから、之等が其度に作製されたとする、それぞれの年次に行はれつゝあつたものと考へられる。

斯うした一方には、本來神樂には關係のなかつたと思はるゝ御殿村月などに、祭りの行はれた痕跡もあるのである。

#### 神樂に關係の土地

前言うた如く、近世では七年目毎に地を更へて行はれて居たのであるが、之には一定の區域があつた。現在北設樂郡内二十ヶ所の花祭りの中、神樂に直接關係を有つて居たのは、前記上下黒川、坂宇場、古戸、下津具の舊五ヶ村で、古真立三澤等も時に關與したといふが、何等の根據はないから、關與したとすれば恐らくそれ以前か、或は何等か特別の事情の伏在が思はれるのである。而して其他の地方は、全く關係は無かつたかと言ふに現在の資料では、何とも證明出來ぬのである。従つて他の土地に、別個の團體が存在したか否かも不明である。

自分は嘗て六十一年目を期し執行されたとの説を耳にした事もあるから、或は其事實の立證さるべき根據はないかと、いろ／＼聞訊したが、判然せぬ。然し近世の神樂には關係のなかつ

た筈の御殿村中設樂に、元祿年間の神樂口傳の書類の存在した事實等から判断すると、之が行はれた地は前記五ヶ村のみに限られて居なかつた事だけは考へられる。斯うした事實の一方に、祭りの團體が、招聘に據る移動も考へる必要がある。祈願に據つて出張祭祀に應ずる風は、花祭りにもあつたのである。

神樂屋敷

神樂は現在に於ては、已に廢絶した行事であるが、之が存在を、如實に物語る事例は、各所に在る神樂屋敷(かぐらやしき)である。神樂屋敷一に神樂宿ともいひ、嘗て祭事の行はれた屋敷を指すもので、花祭りに於ける花宿と意義同じであるが、花祭りの花宿が、逐年移動した事實に對して、之は特定のものであつたとの説がある。従つて神樂宿は、嘗て神々降臨の地として不淨を戒め、一方地内には其主神とも考へられた「みるめさま」と稱する神を祀る事である。「みるめさま」は一に見目明神又見目の王子ともいひ、祭祀の主神と考へられて居た事は別に述べた。其他重要な儀式の行はれた加持場(かじば)白山(しらやま)等の跡には、目印の石を置き、或は注連を張り、只管冒瀆を怖れて居る。加持場、白山等は、屋敷の關係上、現在は多く畑に

なつて居たが、然も月經中の婦女の入る事を固く禁じて居た事實もある。今日一般に神樂屋敷

と呼ばれて居るものは、上下黒川、坂宇場、古戸等に在る。

其他の土地は、神樂屋敷の名を用ゐた事は未だ聞かぬが、地内に「みるめさま」を祀つてあるものは、嘗て神樂の行はれた跡との説もある。神樂も又時に據つて、必ずしも人家とのみは限られて居なかつたのである。

神樂屋敷は、果して言傳への如く、村々で特定のものであつたか。之が同一屋敷で二回以上行はれた事實が果して存在したか否かも立證する材料は無い。何分七年目の行事で、假に關係



第一圖 坂宇場に於ける神樂屋敷

五ヶ村を循環したとすれば、三十五年目に一巡した譯であるから、單に傳承のみを以てしては、之を究める事は不可能である。而して安政二年最後に行はれたものは、下黒川の氏神津島神社の境内であつた。

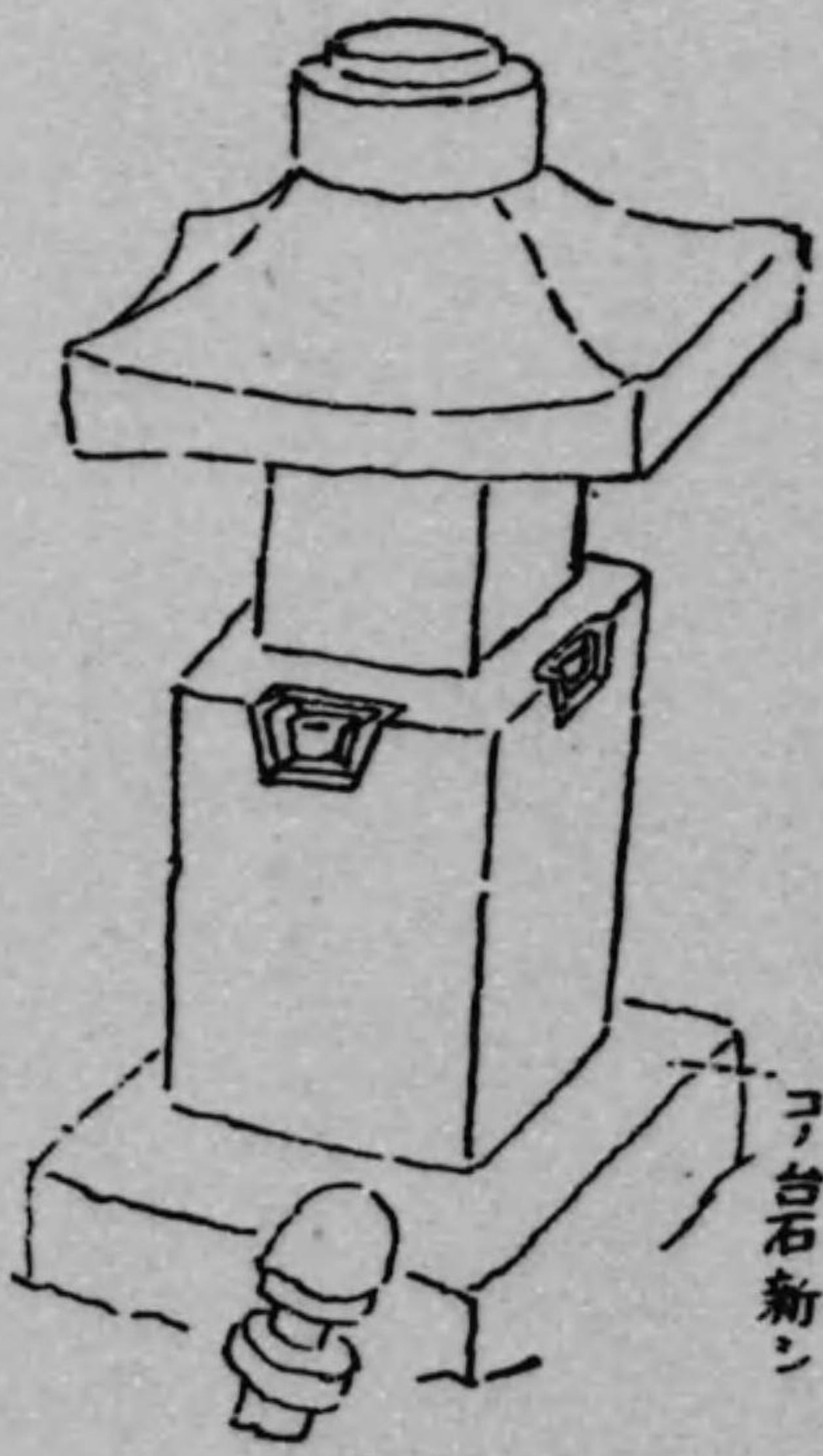
### 神樂林

神樂屋敷の名と共に、神樂の名残りとして聯想されるものは、神樂林(かぐらばやし)である。言傳へに據ると、祭費捻出の爲に、各村に此山林あり、祭事の都度之を伐採費用に充當したといふ。然し又一説には、安政二年最後の神樂の際、多額の寄捨金の所分法として、後の爲に各村共同で殖林したもので、現在豊根村坂宇場地内のものがそれであるといふ。二説何れとも定め兼ねるが、坂宇場の神樂林は先年伐採したが、之は明かに坂宇場の共有林であり、古くは古戸(ふつと)等にも、別に神樂林があつたとも言ふから、前説が稍々當を得て居た譯である。

### 神樂の開祖

此地方一般の言傳へに、神樂の開祖を三人の神人とする説がある。即ち坂宇場の「みるめ」三

澤宇山内の龍王、古戸の「ひじり」である。坂宇場の「みるめ」は、同所の神樂屋敷村松林藏方の屋敷前に祀つてあるものと、別に同所の氏神脇に、現在の別所街道の上手にあるものと二ヶ所あり、何れがそれに當るとも判然せぬが、言傳へに據ると、昔「みるめ」なる者が、各地に神樂(又は花祭り)を傳へ、此地に至つて終焉を遂げたもので、其跡に祠を立て祀つたものと言ふ。



第二圖 坂宇場神樂屋敷に於ける「みるめ」の墓

たとの事である。斯うした事實に對する解釋は、何れともとれるのである。

次は山内の龍王であるが、之は現在三澤宇山内の鍵取り屋敷の裏山に祀られてあつて、一に「しづめ」とも言ひ、之又祭祀の主要神であつた事は、花祭りの條に繰返した通りである。

今一ツ古戸の「ひじり」は、同所の白山権現の奥の院として祀られてあり、神樂次第中の聖の

舞は、その本體とする玉を捧げて舞つたのであるが、之又重要であつた事は、一般言傳へにも、此舞ひが加はらぬ限り、祭りが意義を爲さぬと謂ふ。其事實に關聯しての説であるが、祭祀關係の土地間では、祭祀の度に、古戸が部落の比較的大きかつた關係から、舞ひ等も大部分を占有するので、他の土地でそれを嫌つて、古戸を除外せんと策した事は再々であるが、聖の舞が動まらぬ爲、遂に實現の事がなかつたと謂ふ。

以上の傳承を根據として、一般に神樂の中心神と考へて居た「きるめ」「みるめ」「しづめ」の三神と對比すると、其間に何等かの脈絡も考へられるのである。

### 行事の梗概

祭事は中絶以來已に七十餘年を経過して居り、其次第狀況を復元して考へる事の能はぬのは遺憾であるが、幸に二三の土地に保存されて居た次第の順序書を、一方故老の見聞傳承、神樂宿の跡等と對照して、之を花祭りの事實から類推して、其次第は或點迄想像する事が出来るが、勿論多くの疑點が存在した事は止むを得ぬ。

祭事次第は、前にも言うた通り概括して之を花祭りの規模の一層大なるものと言ふ事が出

来る。唯異なる點は個々の行事が遙かに多く且複雑であつた事と、別に加持場、白山(しらやま)等が設けられ、之を中心とする儀式のあつた事である。而して祭祀は、之又第一と第二の二ツの次第に區別されて居て、第一は神樂宿即ち舞戸を中心とする行事で、之に略ぼ一晝夜を要したのである。引續いて第二の次第に移り、或種の儀式を除く他は、第一と同様の事が繰返され、之に一晝夜乃至一晝夜半を費したのである。即ち第一と第二と、二個の祭祀の對立であつた。之を花祭りの場合に對比すると、第一の次第は「かたなだて」即ち投揃ひに、第二は本樂(ほんがく)又は「みやならし」と言うたものに當嵌めて考へられるが、勿論單純に之を斷定する事は出来ぬ。其間には多くの意義の錯綜があつたのである。尙神樂の場合は、自分の寡聞のせい、花祭りに於ける如く第一第二の祭祀に、各名稱のあつた事を聞かぬから、以下總て、花祭りに於けると同じく、第一日第二日の祭祀の稱を用ゐる事とする。

以上の如く、祭祀は前後三晝夜に亙つて、殆ど休なく續いたのであるが、一方之に前後の行事を通算すると、三十餘日を要したのである。即ち最初に先づ「かうぬし祭り」をして、各村それぞれ稽古に取掛つたのは、三十日前で、關係者殊に舞ひに當る青少年は、一定の宿舍に籠つて、嚴格な精進と訓督を受けたので、此訓督に當る長を部屋頭(へやがしら)と稱し、特に舞ひ

に堪能で、一方故實作法にも通じて居た。近世では、上黒川宇津川の山三郎、古戸の右門助等が、部屋頭として噂に残つて居る。

神樂の傳承者

神樂の關係者で現存せるものは殆ど無い。のみならず、之を單なる傍觀者の立場から、目撃した者も寔に寥々たるもので、現在では幾かに三四を數へるに過ぎぬ。其他事實の目撃者から、一部分にもせよ注意して傳聞せる者も亦稀であつた。之等一部の人々の見聞は、今日となつては、事實を究明する上に、實に貴重の存在と言はねばならぬ。仍つて之が説明に入る前に、之等傳承者の存在を擧げて置く事は、其人々に對する禮義であり、兼て記録の責任から言つても當然の順序である。現在各所に散在せる口傳書の類が、本來の性質上、兎角抽象的の記述に偏して居たに對して、傳承者の言が、總て實感に立脚した事實の反影であつた事は、意義深いものがあつた。

自分が今日迄に邂逅する事の出來た實見者を訪問の順序から列記すると左の人々がある。

一 島山常六氏 下津具村北方(きたがた)

二 田邊長松氏 豊根村坂字場

三 石田龍平氏 豊根村川字連

四 村松せん女 下津具村柿の澤字連

五 夏目伊録氏 同 能知

以上の五氏を數へるに過ぎぬ。尙村松せん、夏目伊録の兩氏は、訪問の順から言ふと、前記の人々より前であるが、神樂の實見者たる事を未だ知らなかつたのである。以上は勿論安政二年下黒川に於ける實見者で、それ以前、上黒川に於ける際を知る者は一人も無いのである。

之に對して、一方實見者では無いが、神樂の狀況を、當時にあつて直接目撃者又は關係者から傳聞して居た人々には、左の諸氏がある。之は實見者ではなかつたが、事實に對し興味を有つて居た關係もあつてか、其説く處は實見者に比し比較的全般に亙つて居た觀がある。

一 竹内吉郎次氏 振草村古戸

二 高木倉三郎氏 上津具村油戸

三 荒川こと女 豊根村下黒川

四 熊谷紋次氏 同 上黒川

以上の四氏で、勿論断片的事實の傳承者は他にも多くあつた事を附加へて置く。何分時代が

少しく遅かつた憾があつて、之以外にも、尙思はざる土地に隠れた傳承者が存在したかも知れぬが、遂に思ひ及ばぬものである。それにしても大正十五年初度の採訪の際、神樂の傳承者は皆無と傳へられた後に、之等の人々に邂逅出來た事は寔に幸と言はねばならぬ。

神樂の實見者の第一の、畠山常六氏は、下津具村字北方(きたがた)の農家の生れで、昭和二年八月自分が同地の夏目一平氏の紹介で訪ふた時は八十七歳で、屋敷脇の隠居屋(いんきよや)に起居して居た。何分高齢の事で、勞働は已に不可能との事であつたが、尙座敷の上で草履を作つて居た。意識言語共に明晰で當時の状況を思ひ出しつゝ、問ひに答へてくれた。下黒川に神樂の行はれたのは同氏十五歳の折で、二日目から三日に掛けて見物して居る。氏の家は下津具の花祭りの「みやうど」屋敷であつた爲か、生來の舞好きから、見物に出かけたものであつた。然しその折の神樂の關係者ではなかつた上に、當時恰も居宅が類焼に遇つた直後で、未だ假譜請も出來て居なかつたとの事で、多少精神上の不安もあり、約半日の見物で立歸つたとの事である。さうした事情から一部分断片的事實を記憶せるに過ぎぬと謙遜して居るが、其談話には、他の一般の臆説に比して遙かに精彩に富んだものがあつた。氏が目撃したのは、祭祀の大半が終つた後、即ち第二日の祭祀の、恰も白山(しらやま)に於ける淨土入りから、多くの鬼が舞ふ

前後であつた。多數の揉返す群集に隔てられて、白山内の状況等は充分觀察する事は出來なかつたと言ふが、淨土入りの白衣の人々が、笠を持ち花の杖(御串共)を突いて、橋が、りを進んでゆく光景や、白山の外観等を記憶に止めて居た一方、群集が怖ろしい白山内の光景を口々に物語る聲をまのあたり聽いて居る。

因に同氏は、自分が訪れた年の翌昭和三年四月に逝去した。

第二の實見者は、豊根村坂字猪古里(いのし、ごり)の田邊長松氏である。氏は神樂の直接關係者としては唯一の生存者である。下黒川の神樂は同氏十三歳の折で、第一日に花の舞の中の「ごんすごりやう」の内の盆の手を舞つて居る。其談に據ると、第二日も前日同様舞ふ豫定で滞在して居たが、他の組に約束を奪はれ、遂に沙汰止みになつたといふ。花の舞三ツ舞四ツ舞等は、各土地間に劇甚な競争があつたのである。同氏は前記畠山氏より二歳の後輩であつたが、關係者の一人として行事の一部に参加した事と、神樂の執行されて居た間滞在した等の關係から、其記憶も全般に互つて居て、一段と明瞭である。氏が當時の雜沓せる状況に就いて語る處に據ると、行事を見んと熱狂せる群集が四周に溢れ、舞戸から十數間離れた位置にあつた社殿一部の帳屋(てうや)は、舞ひを見んとして上つた群集の爲に、建物に劇しく地震の

如く揺れたといふ如き、其印象の一端である。氏は現在(昭和五年)八十八歳の高齢であるが、尙矍鑠たるものである。

實見者の第三石田龍平氏は、前言うた畠山氏と同年代で、やはり十五歳の折に見物して居る。氏は界限で最も名高い獵師であつただけに、花祭り神樂等には興味が薄く、其記憶も他の實見者に比して劣るものがあつたが、白山の構造等に就いては注意が行届いて居る。自分が遇つたのは前記田邊氏と同月の昭和三年十二月で、村松正夫氏の紹介であつた。

實見者の第四村松せん女は、下津具村柿の澤宇連(かきのそれ)の花祭りの「さかき」屋敷の生れであつた。下黒川に神樂の行はれた當時は九歳で、母親の里方である下黒川に客となつて居て、毎日見物したと言つて居るが、何分幼年の事で、其記憶も臆げではある、然し断片的な事實を何彼と記憶して居る。殊に場内の光景、白山と橋が、りの位置等、其他祭祀の最中川を隔てた山の峯に松火が幾つとなく現はれ、天狗が來たとて、場内騒然とした中で、鐵砲が續けざまに放たれた事實等を、子供らしい恐怖心から詳細に記憶して居る。因に同女は土地でも記憶のよいで評判で、往時の村の事實又は昔話等も數限りなく傳へて居る。

實見者の第五の夏目伊録氏は、當時六歳の幼年でその記憶も殆ど辿るべくも無いのであるが、

同家の祖母が恰も白山の淨土入りをするに就いて、それに随つて祭場へ出向いた事で意義が深かつた。記憶としては、前記村松せん女の物語つて居る、天狗出現の騷擾の際の山の峯の松火と、鐵砲を放つた事實位のものである。前記村松夏目の二氏は、前にも言つた通り他の人々より以前に邂逅して居たのであるが、神樂を實見せる事は本人も語らず、自分も又氣附かずに居たのが、後に至つて知つたのである。



第三圖 竹内吉郎次氏

實見者ではなかつたが、神樂の状況を直接實見者から傳聞し又注意深く次第等を聞傳へて居た人々は、之又極めて尠く前に掲げた四氏位のものである。其内の第一振草村古戸の竹内吉郎次氏は、昭和三年十二月七十六歳を以て逝去したが、自分が同氏を訪ふたのは大正十五年の十一月で、以來再度の訪問に各種の談話を聴く事が出來た。氏は年配は未だ若かつたが、故老から傳聞せる事實を傳へて居た點に於ては他に比類なかつた。自分が最初神樂の大體の輪廓を知る事を得たのも實は氏の賜であつた。花祭りにも神樂にも何の關係も有たぬ屋敷の生れであつたが、不思議に斯うした事象に注意を拂つて居た事は、その性格にも據るであらうが、妻女が上黒川神樂屋敷の出生であつた事も又一面

の理由であつたらしい。謙讓寡言な性格の持主で自から進んで語る風の事なく、問はるれば答へるといふ型の人で、傳承者としての最も尊敬すべき一人と信じて居る。

次には上津具村油戸(ゆと)の高木倉三郎氏がある、同氏は昭和四年八月九十七歳を以て逝去したが、此地方唯一の高齢者であつた。自分が氏を訪ふたのは昭和二年八月であつたが、恰も屋敷の土間に籐を敷いて草履を作つて居た。神樂の有力な傳承者の一人で、天保十一年古戸に於ける神樂、弘化四年上黒川に於ける状況、同じく下黒川に於ける事實等を、それぞれ記憶して、其他神樂の起原等に就いても故老の説を聞傳へて居た。殊に他の傳承者が何れも白山の淨土入り等に詳しかつたに對して、生れ子生れ清まり等に就いての事實を聞傳へて居た。唯同氏は高齢の爲か其語る處が時に餘りに詳しく、恰も實見せるかの如くであつたが、果して實見せるものか、或は傳聞か、其點判斷に苦しむものがあつた。仍つて其談話を綜合すると、實見の經驗は無かつたらしいが、一方神樂の執行された前後人心の興奮せる状況や、前程の準備等の事實を目撃して居る。神樂の行はれた土地は、何れも米に恵まれなかつたのであるが、一に百兩百俵と言はれた其百俵の米は、西谷に當る納庫(なぐら)から供給した事を同氏の言に據つて初めて知つた、連日駄馬に著けて山道を運搬したのである。因に納庫は附近に於ける唯一の米の産地だつたのである。

傳承者の第三は下黒川字小造(こつくり)の荒川幸雄氏の祖母こと女で、自分が遇つたのは昭和三年の一月で、當時恰も九十一歳と言つたが、爐邊にあつて孫の守をして居た。未だ健在で居る事と信するが、之又附近で評判の記憶のよい女性であつた。下黒川に於ける神樂の當時は十九歳で、婦人だけに思慮も相當長けて居たのであるが、何分新婚の當時で、始終居宅内に在つた爲に、遂ひ實況は一瞥だもしなかつたと言ふ。然し其家は祭場とは僅に數町の距離にあつたので、目撃者又關係者が次々に訪れて供給した談話を興味深く聽いて居た、従つて同女が傳へた處は、直接祭事よりも、四圍の状況で、男子の氣付かぬ細密な點に及んで居る。例へば祭場である神社境内の舞戸から、街道傍の鳥居の位置へ掛けて百綱(もづな)が引渡され、一般の參會者で、群集に隔てられて近寄れぬ人々が、一々寄捨金を白紙に包んで之に結び下げる、それが瞬く間に結び目が一ぱいになり、重量で地上に垂れ下る。之を關係者が一方から解いて吠に納れて廻る、之が前後三日の間、絶ゆる事なく續いたといふ如き節である。

因に茲に言ふ百綱は、花祭りの「つじがため」即ち神樂の場合でいふと、四方門を打つた地點から舞戸に引渡されたもので、一に善の綱とも言ひ、白木綿を裂いて束ねたもので、舞戸に近



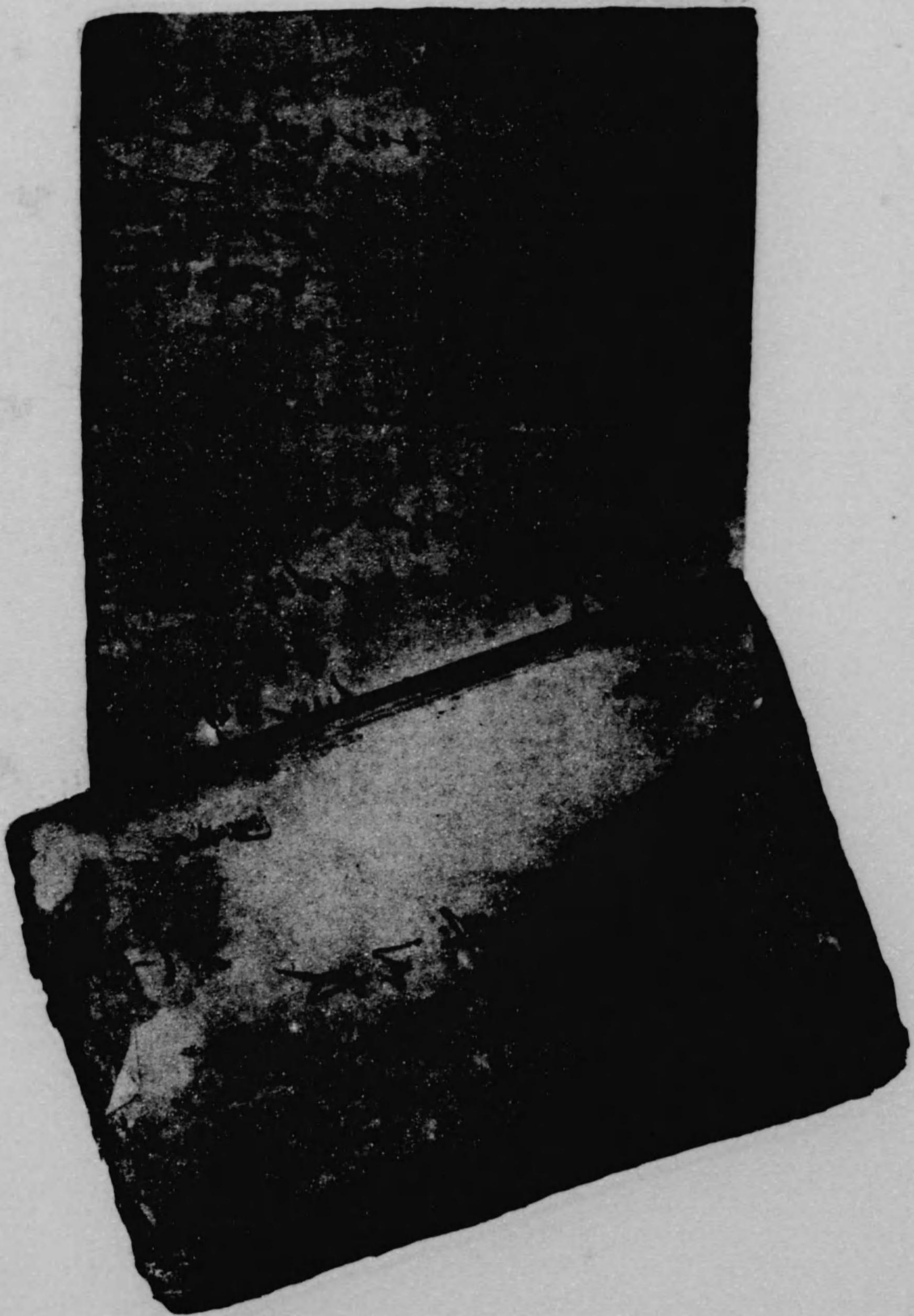
づく事の出来ぬ婦女子又は忌服の者が、賽錢を之に結び下げたのである。

次には上黒川神樂屋敷の熊谷紋治氏、氏も又年配が若かつたので實見者ではなかつたが、居宅が神樂屋敷であつて、行事が弘化四年に行はれて居た関係もあり、祭場の配置設備等に就いての事實を多く聞傳へて居た。其他断片的ではあるが、故老から聞いた儘に状況等も辨へて居たのである。

神樂次第口傳書

神樂口傳書は、傳承者と共に神樂次第を知る上に於て重要なものであるが、之も悉く亡失せりと傳へられて居たが、現在では左の六ヶ所に各種の記録が保存されて居る。

- 一 下津具村北方 禰宜屋敷村松家
- 二 振草村古戸 禰宜屋敷佐々木充爾家
- 三 豊根村上黒川 禰宜屋敷村松正夫家
- 四 同 下黒川 禰宜屋敷清川家
- 五 同 古眞立 禰宜屋敷鈴木右一郎家
- 六 振草村中設樂 禰宜屋敷岡田清一家



神樂口傳書 (古戸佐々木充爾家蔵)

以上の他、豊根村山内振草村字下粟代、園村字御園等にも傳へて居るが、何れも前記六ヶ所に藏するもの、一部分又は大同小異のものであるから、茲には記載を漏した。

第一の下津具村北方の禰宜屋敷村松家は、下津具を通じての舊家で、代々の禰宜であり、神事舞太夫又勘太夫と稱した屋敷である。同家に保存された口傳書は總て三卷あり、何れも後に謄寫せるもので題箋はない。一卷は行事の順序次第を記し、以下部屋入り、生れ子、なかとばらひ等の唱文を記したもので、別に花祭り舞ひ次第なる一冊が追綴してある。

次の一卷は、前卷とは聯絡なく、別に遍屋入の次第、中人(なかうど)の事「つわりもの」等山尋ねから生れ子の次第中の唱文を記したものであるが、前卷の同一記載に比して一層粗笨である。其他「わかごのしめ」「こたま、ねき」橋の拜見の三種の祭文がある。

別の一卷は、之は神樂大事として、九字五印反閉湯立て等の秘傳を録したものである。尙第一の卷の末尾に左の如き記載がある。

文政十二年十月吉日

三州設樂郡下津具村北方麓

村松亘寫之

若筆見苦しく候得共永享拾貳庚未年市兵衛持主古本いたみ多く不堪見候間望にまかせ寫之申候 以上

因に市兵衛は同家の俗稱で、神事舞太夫又勘太夫と言つた一方市兵衛を代々名乗つたのである。斯の市兵衛の稱は、此地方の他の例から推して行事に關係を持つ名であつた。第二の振草村古戸の佐々木充爾家は、現在は屋敷は他に移つて居るが、古くからの禰宜屋敷で、以前は關根を名乗り、宮太夫又は宮太郎と稱したもので、先祖は美濃から流浪して來た長袖と言つて居る。同家に傳へられて居た口傳書には、左の如きものがある。

- 一 神樂次第 年次不詳
- 二 神樂覺 元祿七年十一月
- 三 申付花の次第 安永八年己亥十一月二十日
- 四 花の次第本花 弘化二年己酉月二十日
- 五 神樂役割帳 天保十一年十一月
- 六 橋の拜見 年次不詳

以上の内三と四は花の次第ともある通り、花祭りとも又共通のものである。

一番の神樂次第は、行事の順序、神勸請神上げ、其他唱へ言式作法の口傳を記述せるもので、別に末尾に白山(しらやま)の飾付けと考へられる繪が一枚添えてある。西の内紙を綴つた大冊で、年次の記載はないが、其體裁から判斷して、次の神樂覺と同時代のものと考えられる。

二番の神樂覺は、神樂次第に比較すると、横綴の小形本で、懷中用らしく甚しく損傷して居るが、之は第一の神樂次第が多く儀式の順序等を記したに對して、部分的に重要行事の唱文祭文を記したものである。以上二冊は共に片假名平假名の混り書で、甚しく難解のものである。

三番の花の次第本花(ほんげ)は、一に「花のほんげ」と言ひ、白山の淨土入りの祭文詞章を記せるもので、花祭りの場合振草系の各地では今も使用して居るのである。

四番の申付花の次第も、やはり祭文詞章で、之又花祭りに使用して居る。神樂の場合では、花の舞の折に唱へたもの、やうである。

五番の神樂役割帳は、之又横綴の粗末なものであるが、天保十一年十一月古戸に神樂の行はれた際の記録である。本書は役割帳と言ひ條、實は行事の順序を記したもので、三四の個所に擔當の村名が記してあるに過ぎぬ、寧ろ次第順序を記したものととして貴重である。

六番の橋の拜見は、白山の淨土入りに於ける橋が、りの由來を説いた祭文である。口傳書の第三豊根村上黒川の村松正夫方のものは左の三種である。

- 一 神樂覺 天保三年五月
- 二 神樂役割帳 文政五年十一月

神樂の存在

三 神樂大事

元治戊丑正月

神樂覺は次第順序は無く、生れ子の次第即ち山たづねから服忌令迄の唱文と、別に「こだままねき」「わかごのしめ」等の祭文を記せるものである。

二番の神樂役割帳は、自分は原本に接して居た譯でなく、折口信夫さんの筆寫せるものを借覽せるものであるが、之又古戸に於ける役割帳と同じく、役割帳と言ふより寧ろ次第書として貴重である。奥書の文政五年は、同所に神樂の行はれた事實も想像されるのである。

三番の神樂大事は、半紙綴りの小形本で、祝詞を初め反閉九字五印等の祕法を記せるもので、末尾に左の記載がある。

權大僧都阿闍梨大越家法印滿藏院

寛文三年之書ヲ見分カタキ故今般是寫者也

主 村松助太夫

元治戊丑正月吉日

因に茲にある法印滿藏院は、同輪藏院と共に一に花祭りの開祖と傳へられて居るもので、其後裔は今豊根村古真立字田鹿(たしか)にあり、古真立の幣取り守谷長一郎氏がそれである。而

して輪藏院の後裔も又同所に存在したのである。

口傳書の第四は、下黒川の禰宜屋敷清川家に保存されたもので、之又折口さんの筆寫を借覽せるものであるが、之は嘗て自分も一見した事がある。横卷仕立で表題に「四目神樂の次第」とあり、行事の順序を記してある。

口傳書の第五は古真立の鍵取り屋敷鈴木右一郎家に保存された數種で、左の如きものがある。

- 一 神樂手引順達の次第 一冊 明治五年申正月吉日 田鹿 鈴木喜代平書
- 二 神樂子種拾遺萬覺 一冊
- 三 四目之本戒の次第 一冊 萬延二年
- 四 山尋ね若子のしめ 一冊
- 五 牛頭天王島渡 一冊
- 六 大土公祭文 一冊
- 七 神樂申付祭文 一冊
- 八 湯立の事 一冊 萬延二年

以上の他に折居の遊びの唱へを初め、二三祭文を記せるものがある。前掲の内、第一の神樂手引順達の次第は、行事の次第順序を記し、下に簡單ではあるが行事に對する記註を加へたもの

で、口傳書を通じて最も貴重のものである。他の口傳書が、何れも祭文の詞章と、山たづね次第以下、生れ子の次第を一樣に記して、多く他に及んで居ないのに對して、本口傳書が簡單とはいへ大部分の行事に互つて、記載を試みたのは、感謝に値するもので、恐らく本書が無かつたら、神樂の次第は、永久に概念すらも得られない物が多かつたであらう。然も之が、神樂中絶後の明治五年に至つて筆録されて居た事は、筆者の意圖を充分の感謝を以て忖度したのである。其他三の「四目の本戒の次第」第五の牛頭天王島渡りは、共に長編の祭文であるが、其中後者は神樂との關係は明かでない。第六の大土公祭文も又長編のものである。

口傳書の第六は、御殿村大字中設樂の福宜屋敷岡田清一方に保存されたもので、各種の祭文を記したものである。

- 一 大土公祭文 元祿十三年辰十月吉日
- 二 大土公寶祭文 元祿十三庚辰年
- 三 伊勢ノ祭文 文化乙丑歲桃浪日
- 四 釜の神祭文 文化八年
- 五 湯の大事(横卷)
- 六 御神樂申付 寛保貳壬戌年九月吉日

以上の中大土公寶祭文は、前記古真立に保存されたとは又別種のものである。其他釜の神祭文、御神樂申付等は、他の口傳書のもが兎角中斷し又は明瞭を缺くに對して、首尾の整つたものである。而して本口傳書は一方花祭りにも使用された事實があるから、別に花祭り口傳中に引用して置いた。

#### 行事の内容

神樂の行事次第は、前記下津具口傳書中の神樂伴付、古真立の神樂順達次第、上下黒川の次第書、古戸の役割帳等に據つて知る事が出来るが、之等を比較すると、個々の行事に各相違があり、其順序に於ても、何れが正しいかを疑ふが、兎も角も之に據つて、行事次第は知る事が出来る。而して、行事順序の異なるのは、花祭りの事實から類推して確然たる規範は神樂に於ても已に無かつたと解される。其上口傳書毎に、行事の取扱にも差別があり、例へば一方では一ツの行事と考へたものを、他方では二三に區別したこと、或は記録の性質上、餘りに當然として記載しなかつた等のものもあるらしい。

三者の中で、古戸の役割帳は、天保十一年同所に行はれた際の記録と判つて居るだけに、最

も實在性の強いものである。仍つて先づ之を最初に擧げ、一方下津具のものと對比して見る。而して古真立のものは、次第毎に記註があるから、之を其次に掲げ、假に正本として説明に入る事とする。尙上部の數字は、比較の便宜上加へたもので、其他は總て原文の儘で、尙原文の脇の文字は、判讀の便の爲に假に加へたものである。

行事順序

古戸

- 一 四方門
- 二 へ屋入棟
- 三 むな祭
- 四 瀧おり
- 五 たかね祭
- 六 惣注連下しまひと
- 七 舞士をはる事
- 八 切目王子
- 九 おり立稜

下津具

- 一 しめおろし
- 二 いちのはらい
- 三 かたなだて
- 四 きるめのをうじ
- 五 しほうもん
- 六 へやいれ
- 七 えとうまつり
- 八 たきおり
- 九 たかねまつり

- 一〇 惣かい迎
- 一一 天を打つ事樂
- 一二 かくの舞
- 一三 とうごはやし
- 一四 しめおろし
- 一五 しき三ばん下上古
- 一六 地がため下上古
- 一七 一の舞
- 一八 花の舞
- 一九 山見
- 二〇 三ツ舞
- 二一 湯立
- 二二 神鬼
- 二三 釜あらひ。おりいの遊
- 二四 ねぎ
- 二五 みこ
- 二六 おきな

神樂の存在

- 一〇 さうおしめおろし
- 一一 まいどをはる
- 一二 おりたちあすび
- 一三 さうかいむかい
- 一四 てんをうつこと
- 一五 がくのまひ
- 一六 とうごばやし
- 一七 しき三ばん
- 一八 じがためじゆん
- 一九 じゆのまひ
- 二〇 いちのまひ
- 二一 ひところあすび
- 二二 ごんすごりやう
- 二三 おりたちのあすび
- 二四 はなのまひ
- 二五 みつまひ
- 二六 かまあらひ

- 二七 山をたづぬる
- 二八 なかうど
- 二九 つくり物
- 三〇 生子事
- 三一 たきしめの事
- 三二 にはしめの次第
- 三三 おんどくしやう
- 三四 かうかづら渡し牛王渡
- 三五 かうわたし
- 三六 若子のしめ
- 三七 へんばい並しめ引
- 三八 土公神祭
- 三九 中手拂
- 四〇 四ツ舞
- 四一 おに
- 四二 しし

次の日

- 二七 おんゆたて
- 二八 よあすび。のうあり
- 二九 やまをたつべき
- 三〇 やまをまつること
- 三一 なこうどのこと
- 三二 つはりもの
- 三三 うまれこのこと。うぶゆ
- 三四 たきしめのしだい
- 三五 にはしめのしだい
- 三六 ぶつきりやう
- 三七 おんどくしやうぶ
- 三八 しきのごわうわたし
- 三九 わかごのしめ
- 四〇 へんばい。どくうやすめ土公
- 四一 そうおしめとる
- 四二 しめきりこし

- 四三 大行じくわんじん
- 四四 しら山へんばい
- 四五 土公祭
- 四六 しめのほんかい

次の夜

- 四七 さなおり
- 四八 おり立拂
- 四九 惣かい迎
- 五〇 天を打
- 五一 がくの舞
- 五二 しき三番
- 五三 地がため
- 五四 市の舞
- 五五 旦那舞
- 五六 花の舞
- 五七 山見
- 五八 三ツ舞

- 四三 だんなにゆをつかはすことなかくてはらひか
- 四四 なかててんはらひ
- 四五 よつまひのこと
- 四六 ししのまひのこと
- 四七 だいきやうじんくわんじやう
- 四八 しらやまをつくる
- 四九 たつ合十二疋土公
- 五〇 へんばいどくうをまつる
- 五一 しめのほんかい
- 五二 さなをり
- 五三 おりたちばらひ
- 五四 さうかいむかい
- 五五 てんをうつこと
- 五六 がくのまひ
- 五七 しきさんばん
- 五八 しがため

- 五九 神
- 六〇 釜あらひ
- 六一 ねぎ
- 六二 みこ
- 六三 おきな
- 六四 ひじりの舞 古戸
- 六五 山お立る
- 六六 山お祭る
- 六七 山おたづねる
- 六八 山の賣買
- 六九 すいしやく
- 七〇 かうかづら。笠そへ渡す
- 七一 橋拜見
- 七二 じようど入
- 七三 おに
- 七四 しゝ
- 七五 よなぶね

- 五九 いちのまひ
- 六〇 ひとところあすび
- 六一 だんなのまひ
- 六二 ごんすごりやう
- 六三 おりいのあすび
- 六四 花の舞
- 六五 三ツ舞 ゆばやし
- 六六 いばやしにこぎ
- 六七 のうをすべし。みこ。ねぎ。おきな
- 六八 ひじりの舞
- 六九 やまをたつべき
- 七〇 やまをまつること
- 七一 やまをたづねること
- 七二 やまをうりかいのこと
- 七三 いとしめをひらくこと
- 七四 わかごのしめ
- 七五 しきのごわうわたし

- 七六 おぼろけ
- 七七 こだま
- 七八 こていの遊 魚
- 七九 いをつり みるめ
- 八〇 見目の遊
- 八一 四ツ舞
- 八二 ひゝなおろし
- 八三 大行じかいり遊
- 八四 おん山がりの事
- 八五 いづな立

- 七六 すいしやくのあすび
- 七七 へやいれのこと
- 七八 はしのはいけん
- 七九 じやうどいれ
- 八〇 しよくだい。ちやとう
- 八一 おにをだすべきこと
- 八二 じやうどにあをかける
- 八三 しゆつけをよぶこと
- 八四 うちしきののゝいつたん 布
- 八五 しゝをだしやまをわる
- 八六 やまをひくこと
- 八七 よなぶねをこぐこと
- 八八 おぼろけのまつり
- 八九 こたまをまつること
- 九〇 こていのあすび 魚
- 九一 ゆをうをつること
- 九二 みるめのまつり



以上

- 九三 ひいなおろし
- 九四 だいきやうじかいらあすび
- 九五 おんやまがり
- 九六 いづなだて
- 八七 せんぼう

以上

此次第で、古戸が下津具に比して番数が少いのは、次第を行はなかつたのでなく、記載を忘つたと見るべきである。尙古戸次第の内、所々に古、上、下、津具等の文字があるのは、役割帳の性質から擔當の村名を現はしたものである。

次に古真立の順序は次の如くである。

- (一) 一 へつゝみ清め ○七日前に湯立をして神樂宿を清める
- (二) 一 しめ下し ○七日前に神樂宿にしめを張る事
- (三) 一 壹の祓 ○三日前に禰宜等集りて祓をよみ神樂宿を清む
- (四) 一 かたな立 ○三日前に禰宜等集り神樂の御幣切草を切初む
- (五) 一 御かいほがい ○諸神之御神酒を上ること
- (六) 一 ゑ宮祭 ○當所の産神宮々郷主を祭ること
- (七) 一 四方門 ○四方の札を立山に四方門を打天狗を防ぐこと。山には幾重も門を打つ也

- (八) 一 瀧折 ○禰宜御用人瀧にてこりをとる
- (九) 一 高根祭 ○梵天を上げ高神を祭ること。下に御幣廿一本立神酒供物を上げ祭
- (十) 一 棟祭 ○神樂宿の屋根へ御幣を二本立。扇子と麻と錢と三品掛けて祭ること
- (一一) 一 舞臺を張る事 ○神樂宿に注連を張り五方へ旗を立竹輪を立。びやつかいを立飾舞戸を飾る
- (一二) 一 部屋入り ○御幣を以て五方を拜み部屋へ入ること
- (一三) 一 神座渡り ○御幣を以て出神座にて神歌。以て出たる御幣を四本釜戸に立納る也
- (一四) 一 天を打事 ○御神酒と供物を持禰宜舞戸とあまへ登り兩所にて五方へ投進ること
- (一五) 一 きる目の王子 ○神座にて神ひろいないたし。きるめの王子を言事なり
- (一六) 一 つしの祭 ○御供へを諸神へと附獻す
- (一七) 一 山立 ○神の枝を五方の角へ立る
- (一八) 一 島祭り ○餅を五方へ投こと
- (一九) 一 しめ下し ○東方南方西北方中央五方へ向て言
- (二〇) 一 なりもの ○餅を五方へ投る事
- (二一) 一 座直り ○禰宜御用人神座へ集り揃うこと
- (二二) 一 折立祓 ○禰宜御用人誠心經讀み諸神を清め神樂の式を始む
- (二三) 一 相かいほがい ○禰宜御用人諸神御神酒上げ獻す
- (二四) 一 舞戸四方門 ○禰宜三人立行ふこと

神樂の存在

- (二五) 一 樂の舞 ○太鼓の棒を以て舞ふ
- (二六) 一 式三番
- (二七) 一 どののはやし
- (二八) 一 こぎ ○釜戸を作る事
- (二九) 一 旦那の舞 ○三人宛立て三度舞ふ。舞下しのやうに舞ふ
- (三〇) 一 地がため ○一人づゝ立三度舞
- (三一) 一 ずんの舞 ○山見鬼を言也
- (三二) 一 ひとくらあそび ○竹輪鈴扇子を持ち一人づゝ立三度舞
- (三三) 一 登の舞 ○花の舞。なしきとゆとうを持って舞
- (三四) 一 花の舞 ○改ることに。へんばいをふむ
- (三五) 一 こんすごりやう ○釜戸殿をよみ火を伏す
- (三六) 一 三ツ舞 ○六人立て舞
- (三七) 一 神鬼
- (三八) 一 湯の大事
- (三九) 一 湯立
- (四〇) 一 旦那に湯をつかはすこと ○桶にて湯を更ること
- (四一) 一 舞おろし

- (四二) 一 折居のあそび ○鈴と扇子を持舞
- (四三) 一 湯さかいの事 ○御用人おみきを呑む
- (四四) 一 生清りの事 ○御用人扇子を持ていふ
- (四五) 一 山たづねのこと
- (四六) 一 中人の事
- (四七) 一 おつわり物のこと
- (四八) 一 生子の産湯を引く事
- (四九) 一 産しめを開く事 ○御産生の事
- (五〇) 一 ぶつきりやう ○にはしめ。井戸しめ。瀧しめ
- (五一) 一 惣しめ開く事 ○生子には赤きかづら。清りには青きかづら
- (五二) 一 かうかづら渡し ○みしでの御幣を持たせ産神の加持三度かける。きよまりには薬師観音のたから
- (五三) 一 しきの牛王渡し を持たせて亦産神の加持三度かける
- (五四) 一 わかごのしめ ○扇子を持手をたゝいて言
- (五五) 一 しめ切越の事 ○神子の立願四度を一度にすますこと
- (五六) 一 山立
- (五七) 一 島祭

神樂の存在

- (五八) 一 メ下し
  - (五九) 一 なりもの
  - (六〇) 一 しづめのへんばい
  - (六一) 一 かりこりやう
  - (六二) 一 土公祭
  - (六三) 一 なかてはらひ
  - (六四) 一 翁
  - (六五) 一 湯ばやし
  - (六六) 一 ひの禰宜
  - (六七) 一 能をすべし
  - (六八) 一 四ツ舞
  - (六九) 一 朝鬼
  - (七〇) 一 獅子舞
  - (七一) 一 社護神の舞
  - (七二) 一 白山を作ること
  - (七三) 一 山相續の事
- 次の日の事
- 土公祭するなり
  - ひいなをわろして御山がりをしてしづめの山をとること
  - 之はあとさきになり申候。しづめの時すること
  - 禰宜と商人とせい蔵と三人出る
  - 笹葉を持三人立て舞
  - 山を祭木綿を張り梵天を立清め勸請すること

- (七四) 一 しらやまにて山立
  - (七五) 一 しま祭り
  - (七六) 一 メ下し
  - (七七) 一 なりもの
  - (七八) 一 白山へんばい
  - (七九) 一 四目の本戒を讀む事
  - (八〇) 一 土公祭りの事
  - (八一) 一 大行神勸請の事
  - (八二) 一 へ屋入
  - (八三) 一 神座渡り
  - (八四) 一 座直り
  - (八五) 一 折立祓
  - (八六) 一 さうかいほがひ
  - (八七) 一 樂の舞
  - (八八) 一 式三番
  - (八九) 一 とうのはやし
  - (九〇) 一 こぎ
- 神樂の存在
- 禰の枝を四方の角へ立る
  - 帯に扇子に鏡にぜんの綱と右四品にて拵舞戸で勸請する也
  - 御幣を持へ屋入の事
  - 御幣を持神座へ出ること御幣を釜戸へ立る
  - 禰宜御用人神座へ集ること
  - 禰宜御用人被心經心讀み神を清むるなり
  - 諸神へ御神酒を獻すること
  - 太鼓のぼら舞
  - 釜を作り立ること

- (九一) 一 旦那の舞
  - (九二) 一 地がため
  - (九三) 一 すんの舞
  - (九四) 一 ひとくらひ
  - (九五) 一 壹の舞
  - (九六) 一 花の舞
  - (九七) 一 こんすごりやう
  - (九八) 一 三ツ舞
  - (九九) 一 禰鬼
  - (一〇〇) 一 すいしやくのあすび
  - (一〇一) 一 湯の大事
  - (一〇二) 一 湯立
  - (一〇三) 一 旦那にゆをつかはす事
  - (一〇四) 一 舞おろし
  - (一〇五) 一 折居の遊び
  - (一〇六) 一 湯ざかい
  - (一〇七) 一 翁
- 三人立三度舞
- 壺人つゝ立て舞ふ
- 山見鬼の事橋場にて鬼を改る事あり
- 改事。へんばい
- 三人御幣を持舞をして後二人の善悪をさんげするなり
- 釜戸のぼらひ
- 六人
- 鈴と扇子を持言
- 御用人御神酒を呑む事

- (二〇八) 一 湯ばやし
  - (二〇九) 一 ひの禰宜
  - (二一〇) 一 能をすべし
  - (二一一) 一 聖の舞
  - (二一二) 一 四ツ舞
  - (二一三) 一 子種招き
  - (二一四) 一 糸綿かけ
  - (二一五) 一 をぼろけ
  - (二一六) 一 見目のあすび
  - (二一七) 一 こでの遊び
  - (二一八) 一 山をたづねる事
  - (二一九) 一 山をうりかふ事
  - (二二〇) 一 扇子笠
  - (二二一) 一 浄土入のこと
  - (二二二) 一 橋の拜見
  - (二二三) 一 食だい茶湯を持白山へ行事
  - (二二四) 一 しらやまに繪を掛出家を置く事
- 御幣を持四五人立言也
- 扇子を持て言
- ますのしりにろうそくを五本立それを持五方へ向い言ふ事
- 一人は酒を持一人は盃。酒をつぎ五方へ投進して言事
- 太鼓の上に新ごもを敷きその上に登り下で大ぜいして言也
- 之は只扇子笠浄土入の山をたづねるがよろしいと言
- 之は扇子笠浄土入の山をうりかいたしましやうと言
- 白と赤とまぜたるかつらを渡し金山の加持を三度かけて扇子を笠にかぶる
- 白いかづらを渡し大峰山上の加持を三度かけてこげ笠をかぶり杖を渡す也
- 御幣を持との附と分郡を言い其後に橋の拜見をいふ

- (二二五) 一 五色の鬼白山へ行梵天を切落す
- (二二六) 一 獅子出で山を割事 ○東の口より西の方へぬけ南の口より北へぬけてかへる
- (二二七) 一 山を引事 ○白山を片附てかへる事
- (二二八) 一 よなふねをこぐ事 ○橋枕にした俵をしい兩くちへ扇子を一本宛あて赤一本くちにくわへてふねをこぐまねをする事
- (二二九) 一 しやごじの舞 ○笹の葉を持三人で舞
- (二三〇) 一 魚釣の事 ○三人出でじやけこと言也。青黄赤白黒五色の淵を釣也
- (二三一) 一 山立
- (二三二) 一 島祭
- (二三三) 一 メ下し
- (二三四) 一 なりもの
- (二三五) 一 しづめへんばい
- (二三六) 一 土公祭り
- (二三七) 一 ひいなおろし ○〆繩をほどき飾をとりがつら言て。次に御山がりをする也
- (二三八) 一 おん山がり ○竹輪〆繩をとり集め納る事也
- (二三九) 一 だいじやうぼん返りあすび ○紙を破り五方へ差上る事
- (二四〇) 一 みさき立 ○太刀を抜て悪魔を拂出すこと

(二四一) 一 火伏をする事  
 (二四二) 一 せんぼうをよむ事

右百四十二番の次第は、下に記した記註で略ぼ想像されるものもあるが、別に自分が知つて居る範圍で説明を補ふ事とする。

### 次第の解説

#### 第一日の行事

神樂の次第は、花祭りと共に通のものが多く、面形を初め、祭具等總て花祭りの物と共用であつた。而して次第は、關係村間で協議し、特種のもの、外、役割りを決めたのである。それで之が説明は、總て花祭りの事實に根據を置いて、そこから發足する。仍つて隨所に花祭りの同一とする用語がある。或は之は事實の説明上不穩當に互る懼がないでもない。然しありてい言へば、當然花祭りと同一と解せられるもので、然も詳細の事實は、實見せぬ限り判らぬものであつた。此事を豫め斷つて置く。

かうぬし(神主)祭り 此行事は、前記何れの次第書にも漏れて居たが、稽古に著手前と後に、関係者一同が、それぞれの土地の「かうぬし」なる神の祭りをしたのである。

註 「かうぬし」は何れの村にも祀られてあつて、それに就いての傳説は一定せぬが、多くの場合法印の如き者といひ、一に「ながそで」を祀るといふ。「ながそで」は長袖である。古戸の「かうぬし」は、現今の佐々木氏の先祖で、美濃から流浪して来た兄弟と云うて居る。それで現在でも、毎年陰曆七月十日を「かうぬし念佛」と稱し、祠の在る宇倉平(くらんだひら)地内に土地を所有する者が祭りを行ひ、夜は念佛會があつた。尙此事から盆踊りの場合に例を求めると、現在此地方で一般に行つて居るぢれんぶつ(地念佛)といふものが之に近い、即ち盆踊りの前に一旦氏神に集り、念佛を上げて稽古に取掛るのである。日時は一定せぬが、七月に入れば行ふものとし、先づ氏神の道を作り取掛つたのである。

一 へつゝの清め 竈清めで記註にもあるが、大體花祭りの「へつゝの清め」と同一であるらしい。次の第二番しめ下しは「しめおろし」で、竈清めをして「しめおろし」をしたもので、之も花祭りに準じて考へて宜らしい。

三 臺の敷 之は記註にもある通り神樂宿の祓ひで、花祭りの場合で言ふと、振草系月等で行つて居る「うちきよめ」に當るものかと思ふが、神樂宿の清めは別にあるから何とも言はれぬ。

四 かたな立 花祭りの刀立てと同一で、祭具に用ゐる幣帛の類を切る式である。

五 御かいほがい 「おんかいほがひ」と言ひ別に「おんかいむかひ」とも言ふ、下黒川等の次第では「切目の王子御かいほがい」とあり、又單に「かいほがひ」とも言ふ。此行事は、他の下津具古戸の次第書には見當らぬが、然し古戸の神樂次第書には記されてあるから、行はれて居たと見るべきである。「おんかいほがひ」の「ほがひ」は祝ひで、花祭りの場合では「ほがひ」「むかひ」は同一の行事になつて居て、祭り又は勸請の意に考へられて居たから、後に「むかひ」と訛つたものらしい。「おんかいむかひ」の稱呼は、西浦田樂等にも用ゐられて居て、祭りの前の神下しと祝宴を兼ねた行事である。又花祭りの場合でも「おん」を除いて「かいほがい」「けいむかい」とするものは、やはり神下しの意であつたから、此場合の「おん」は敬稱で「神ほがい」であつたらしい。而して次第書の記註にも、諸神に御神酒を上る事として居る。一方古戸の口傳書には、此行事の條に左の如く記して居る。

カヒホガヒ

東方東大神太郎王子ノ御

モカ、ラセタマエソウロヌ八丈小金山ライシ

ホウシノカイタレト天下ツテヤラタツトヲガマレソウロエノ南無四目ノ八代金剛

次第の解説

四七

ウジヲシメ八代金剛童子

以下南西北中央同ジ

之に據つて考へると、以上の唱へ言をしながら、五方の神々を勧請したものと解せられる。

註 「御かいほがひ」は花祭りの場合では、後の「さうかいほがひ」と混交して居たやうである。花祭りでは「さうかいほがひ」は、「さうかいむかひ」と言つて居て、別に「さうけい——」又「さうかみ——」とも言つて居るが、同一の行事と考へて居るものを、振草系の足込、中在家等では、頭の「さうけい」を除いて、單に「けいむかひ」又「かいほがひ」と言つて居る。此「けい」又は「かい」が、單純に「さうけい」又は「さうかい」の變形とは考へられぬ。之は元々別であつたものが、偶々形式が似通つて居た事から、同一と考へるに至つたのではないかと思ふ。即ち盃を各の前に置いて、中の酒を紙絲を以て體に漉ぎながら神名を唱へる事は同一である。それで次第書記註にある諸神に御神酒を上ると言ふのは、神前に供へ置く意ではない事だけは判る。尙此事に就ては、後の「さうかいほがひ」の條に併せ言ふ事とする。

六 五穀祭 「るぐうまつり」で、別に「あくうまつり」とも言ふ。花祭り(振草系)で行事の終りに行ひ、「げくう」又「ごくう祭り」と言ひ、「ごくう」から五穀を連想して、五穀祭りと云うて居るものが之であつたらしい。一方下津具の次第書には、此次第が無く、別に「るとうまつり」があるが、或は之に當るかと思ふ。古戸の口傳書には、行事作法を左の如く記して居る。

一 エクウヲ祭事

護身法 九字 御見目觀上 三禮四色 禮拜 レイハイイシユ 日本國中大小ノ神祇ヲクワンジ

ヤウ奉申

ゴゼン十二ゼン 膳 御瓶子 ランヘイジ十二

サング十三ツ、ミ 包 其中ニゼニ二十二文又十三文 ソノ神々にヨツテツ、ムベシ 本々ニ

ハヌノ十三反イル 入用 布

本文の中、ゴゼンは飯の事、サングは語としては散供であるが一般に洗米を言ふ。尙此口傳に據ると見目勸請の如くにも考へられ、前の「おんかいほがひ」が、切目の王子勸請を中心とするに對して、注意を惹くが、勸請の場合の用語のみを以て、直にその神を對照とするとは斷せられぬ。

更に次第書の記註には、當産神、宮々、郷主を祭るとある。茲に郷主とあるのは、口傳書の他の場合から判斷して「かうぬし」と解せられるから、前後次第の關係から見て、稽古の始めと終りに行ふ「かうぬし祭り」の後の次第でないかと思はれる。一方前言うた花祭りの場合では、行事最後の神返し式の二ツと考へられて居て、太鼓の上に板を置き棚を作り、其上に祓饌供

物を置き、禰宜「みやうど」が立つて五方を拜し、それぞれ唱へ言をなし、最後に其棚を供物諸共覆へす事は、已に花祭りの條に述べた通りである。

七 四方門 「しはうもん」といふ。一に四方門を打つとも四方立ともいふ。次第書の記註を見ると、四方の札を立、山に四方門を打、天狗を防ぐこと、山には幾重にも門を打つ也とある。此場合は神樂宿を中心とした四方門の意で、山と言ふのは、屋敷の周圍と考へられる。之を花祭りの場合で考へると、一に「かどじめ」と言うて居るつじがため(辻固め)が、元意義を同じくしたかと思ふ。

八 瀧祈 「たき下り」で、花祭りの場合の瀧ばらひと同一行事らしい事は、花祭りに於ても瀧ばらひを瀧下りと言うて居る。尙第九番高根祭りも、之又花祭りの高嶺祭りと同一と解せられる。

一〇 禰祭 「むなまつり」で、花祭りの天の祭りと同一である。

一一 舞臺を張る事 舞臺は舞戸で、即ち之が飾付けで、總て花祭りと同一であつたらしいが、神樂の場合は、入口の兩側に別にたつ(龍頭)を飾つたのである。

一二 都屋入り 花祭りの場合では、一に神入りと言ひ、諸神勸請と考へられて居る。神樂の場

合も意義は同一であるが、次第の順序は遙かに秩序があつたと見え、下津具口傳書には左の如き唱へ言があり、即ち殿附(とのづけ)の次第である。

東方ひがしは薬師の淨土の御すいしやくの御本地と請じ殿附候ぞ

以下南方觀音西方阿彌陀北方釋迦中央大日如來と、それぞれの方向に向つて、同一の文句を繰返す。次に見目(みるめ)の王子の唱へがある。

東方ひがしは見目の王子の御本地の

鎮守の御輿と請じ殿附

黄金の坪へと請じけるこそうれしけれ

以下南北中央と同様に繰返し、次に

昔は目にも見えさせ給へが

中程は名にもかゝらせ給へが

今當代ではほうしのかいだれと

天下らせ給へて

まゐりのけごしやご



あらたつとと拜ませ給へ候ぞ

之も五方に繰返し、次に左の如き詞がある。

部屋入りいりよせまいか部屋いりよせまいか

あつばれ又四郎又四郎に

お渡し申す。請取申た

註 花祭りの場合で言うと、見目の王子の唱への後に、諸神諸佛の稱へがあつたので、一に「神ひろい」とも言つたのである。最後の、部屋入云々の詞は、一種の神託とも解せられるが、何の事か判らぬ。之と類似した詞は後の第百十六番「見目のあすび」にもあつて、それには、又四郎又四郎が、又四き又四郎ともなつて居る。

一三 神座渡り 部屋入りが済んで、神々が神座へ渡る式で、花祭りの場合神入りから、神ひろいの間に行はれて居る神座渡りに當るらしい。

一四 天を打事 「てんをうつ」といひ、四方門に對して、天を打つとも言ふ。禰宜の行事で花祭りと同じである。

一五 きる目の王子 切目の王子の勸請で、花祭りに同一の行事がある。

一六 つしの餅 記註には御供へ(餅)を諸神へ附獻すとあるが、古戸の口傳書には左の如き記載がある。

掛錢 一貫  
ツシノカケセニ イツクワン二百文 ナクバ百二十文  
餅 モチ本々ニハ 三百六十 又ハ百二十 又七十五

とある。或は天の祭りの一種かとも考へられる。而して下津具古戸共に、次第書には一個の獨立した行事としては見當らぬ。

一七 山立 一八 鳥舞 一九 しめ下し 二〇 なりもの 以上は花祭りの場合に行うて居るものと同一であるらしい。

註 此四ツの行事は、連続したものであつた事は、花祭りの條にも言つた。神樂の次第には、前後を通じて之が四回ある(又は五回)即ち第一日の祭祀に二回、第二日に二回である。而して「山たづね」の前にあつたとすれば、合せて五回となるのである。第十番のものは其最初のものであるが、後の三回は何れも「しづめ」の反閉の前程となつて居たのである。花祭りの「しづめ」祭りでは、此事に就いて「しづめ」の神は餘りに森嚴にして、民家には請じ難き故、先づ其處に山立てをなし、青山(あなやま)に還元するものといふ。この傳承をそのまま當嵌めれば、其處を特別に靈域化する過程とも考へられる。仍つて此場合は、神座又は舞戸に對する過程的行事であるらしい。

二一 座直り 次第書記註には、禰宜「みやうど」神座に揃ふ事とあるから、之迄で一先づ前程となる儀式が了つて、いよ／＼舞戸の次第に取掛る意かと思はれる。然し花祭りの場合、下黒川等に行はれて居る座直りは一種の祝宴であつた。

二二 折立鼓 「おりたちのはらひ」といふ。座直りが済んで、禰宜「みやうど」が祓眞經を讀みいよ／＼神樂の式が開始される。花祭りでは、之に概當する場合を「はなをひらく」とも言うて居る。

二三 相かいほがい 「さうかいほがひ」である。記註には、禰宜「みやうど」諸神御神酒を上げ獻すとある。花祭りの「さうかいむかひ」(振草系古戸等)が之に當る。随つて次第も又同一と解せられる。

花祭りの「さうかいむかひ」は、別に「さうかみむかへ」「さうげむかへ」とも言ひ、禰宜「みやうど」一同が神座(かんざ)に鼎座して、各々盃を前に置き、紙漉の尖に酒を浸し、唱へ言の調子に合せて、之を左右の胸にかけ、或は開扇を膝の上に置き、之に酒を移しながら、「おりゐで花の。ごすごりやう。女郎の瓢で。稚兒の盃まゐらす。まゐらすには。みぐちなる。お、みきこしめせ玉の明神」と唱へた事は、已に言うた通りである。而して切目の王子勸請と、諸

神勸請と、三者略ぼ同様の繰返しであつたのは、元一ツの形式が他に流用されたもので、偶々「さうかいほかひ」が、他の式と同様あらゆる神名を稱へながら、然も明確な對照の神がなかつた爲に「ほがひ」が「むかへ」「さうかひ」は「さうかみ」となり、前の諸神勸請より一段廣義の、惣神迎へとして、やはり神々を迎へる式と考へるやうになつたらしい。斯の明確な對照の神がなかつた事は、反つて此行事の元を考へる鍵であつたかも知れぬ。さうして一方前に「おんかいほがひ」の條に言うた如く、形式が似て居た處から、單に「かいむかひ」「けいむかひ」の稱を用ゐて、此方は何の事か意味も譯らぬ儘行つて居た場合もある。此過程を考へると何處迄變つてゆくか知れたものでない。それとは逆に「さうかい」の元の姿を考へて見ると、或は「さうけい」は「さあけ」で、即ち「さけほがひ」あたりであつたかも知れぬ。尙「さうかいほがひ」の場合、各人の前に、盃と共に汲物膳を置く事が、やはり古戸の口傳書にある。

二四 舞戸四方門 記註には禰宜三人立て、舞戸に於て行ふとある。四方門の文字から判断すると、舞戸に於て、前に在つた四方門を打つ式と同一の儀式があつたとも解せられるが判然せぬ。

二五 樂の舞 二六 式三番(しきさんば) 二七 どうのはやし 以上花祭りの同名の行事に同じと解せら

れる。

二八 こぎ 記註には竈を作ること、あるが、「こぎ」は別に「こぎひろひ」ともいひ、竈を作る過程を、其材料に依つて「うたぐら」に取つてゆく、之は已に花祭りに説明せる處である。

二九 旦那の舞 之は下津具古戸共に、次第書には、第二日にのみあつて、第一日には無い。記註には三人宛三回に舞下しの如く舞ふとある。舞下しは花祭りでは(三澤下黒川)湯立ての後にある舞ひである。一部の言傳へでは、「じゆんの舞」のこと、も言ふが、「じゆんの舞」は後に別にある處を見るとそれも疑はしい。唯下津具古戸の次第で見ると、第一日が「じゆんの舞」第二日が旦那の舞となつて居るから、やはり別の次第であつたと思はれる。

三〇 地がため 地固めの舞で、以下第三十九番の湯立て迄は、花祭りの次第と變りは無い。唯神樂の場合は、第三十二番の「やまみ」の舞ひを「ひとくらあそび」と言ひ、別に「ひところ」又は「ひとくらひ」とも言うたのである。

尙之に據ると「やまみ」には別に稱呼があつたらしい、「ひとくら」又「ひところ」の稱に就ては由來は何とも判らぬが、段嶺村字田峯(だみね)には、「ひとくらひさま」又は「ひとくわんぼう」とも言ふ神があり、山の神の如きものとも言うて居る。尙第二日には、橋がかりに於て之を検

る式即ち問答の事があつた事は、後の次第に譲る。

四〇 旦那に湯まつかはすこと 次第書の記註には桶にて湯を更へること、あるのみであるが、下津具の口傳書にある湯立ての次第に據つて判断すると、「つかはすこと」とあるのは、沐浴に近い行事を言ふものらしい。而して此場合の旦那であるが、之は他の場合から推して、現在も尙名残りを止めて居る、村々の一の旦那二の旦那等いふ、其者を指したとも考へられる。

四一 舞おろし 舞おろしは、花祭りの次第では大入系三澤と下黒川にあつて、湯立ての後六人乃至四人の者が「ゆたぶさ」の笹の葉を持つて舞ふ事があるから、之と同一と考へられる。

四二 折居のあそび 「おりゐのあそび」と言ふ。記註には扇と鈴を持つて舞ふとあるが、之には別に祝詞の形式を具へた唱へ言があつた點から推して、舞ひの間に、その唱へがあつたかと思ふ。唱へ言は後の祭文歌謠の條に譲る。

四三 湯さかいの事 記註には「みやうど」御神酒を呑む事とあるが、之以上知る事は出来ぬ。又下黒川の次第書を見ると、別に能ありとある。能の文字は「のう」と讀む事は他の次第書からも判断される。而して、口傳書を通じて能の文字を充てた場合は、「ねぎ」「みこ」「おきな」の場面を言ふやうであるが、此時それがあつたか否かは断定出来ぬ。尙下津具古戸等の次第書には、

此行事は無い。おそらく書漏したであらう。

四四 生濟りの事 「うまれきよまり」である。記註にある御用人（註みやうど）扇子を持ていふとあるだけでは、何等想像を運ぶ事は出来ぬが、一方「うまれきよまり」は、古真立（こまたて）の花祭り次第を初め、大川内（おほかうち）の次第、其他大谷の御神樂にもあるから、それに準じた儀式と考へられる。

各所の次第に據ると、此式に遇ふ者を竈の前に立たせ、湯を頭上に灌ぎながら、之が由來を説く「うたぐら」がある、即ち灌頂の式である。然し神樂の場合は其前に尙過程となる行事があつたか、尙此場合「言ふ」とあるのは、單に姓名を読み上げる事か次の山たづねか判らない。

斯く神樂の行はれて居た地方を中心にして、「うまれきよまり」なる傳承が意識の上にあつた。「みやうど」の資格を繼ぐ式とも、又氏子となる過程とも考へられて居たが、更にそれを發足點として、特別の意義も考へられて來た。生れた儘即ち此世に生を享けただけでは、未だ眞の人としての資格に缺けて居る、即ち未だ神の子でなかつた。仍つて十三歳に達した曉に、神の子たるべく新に生れ代つて來る。其境界を示す式が此「うまれきよまり」だつたのである。斯うした傳承の一方には、小兒の無事成長を冀ふ意味で——大危に遇つた場合にも——其小兒を神の

子即ち氏子にする、又は其儀式の行はれて居た土地の氏神の氏子にするとの立願を爲したのである。

斯うした事實の一方には、新に生れた者に對して、別に「うまれこ」の式があつた。此事は後の次第に言ふから其項に譲るとするが、此式の一層普遍的であつたものが、村々の氏神に於て、御神樂（みかぐら）に行はれて居たまとはり（的張）の行事で、一に誕生とも言ひ宮參りの式であつた。的張りは普通男子に對する稱呼で、女子の場合は別に名があつたらしいが不明である。

神樂の場合では「うまれこ」即ち誕生式と「うまれきよまり」の式に遇つた者は、將來尙二度の大願を果さねばならぬ。仍ち神の子となつた者は、生涯に四度の大事があつた譯で、之を四度の大願と言つた。第一が「うまれこ」即ち誕生の式、第二が「うまれきよまり」で元服の古い形とも考へられるもの、第三が「あふぎがさ」第四が「じやうどいり」である。而して「うまれこ」が二歳、「きよまり」が十三歳、「あふぎがさ」は不明であるが、最後の「じやうどいり」は六十一歳の本卦還りであつた。此四度の儀式即ち大願を果した者が、神の子として完全な過程を踏んだ譯で、初めて佛説の所謂淨土に入る事が出来る。而して此大願に入つた者を「かご」と言つたので、「うまれこ」の式は「かご」に入る最初のものであつた。「かご」は別に「かんど」とも「かぐらご」と

も言うて、神子又は神樂子の意味と考へられて居た。

尙下津具古戸の次第書には「うまれきよまり」の事が無いが、之は「山たづね」の中に含まれて居たと考へられる。

四五 山たづねのこと 之には次第書に記註は無いが、次の「うまれこ」の次第に對する前程で、その爲の山を尋ねるものであつた。この場合の「うまれこ」は「うまれきよまり」の場合も含む。此式は舞戸に筵を敷いて行はれたらしい。二者掛合の「うたことば」ともいふべきものがあつて、多分に劇的要素を持つたものだつたらしい。山たづねの詞は次の如きものであつた。

阿之より山をたづぬべし

歌伊勢の國にもあさま山とて山も立て候が

天照大神の御知行のおん山なれば

これにも思ひよりも候はづ

駿河の國にも富士の山とて山も立て候が

富士淺間の御知行のおん山なれば

これにも思ひよりも候はづ

紀の國にも熊野の山とて山も立て候が

熊野三社の御知行のおん山なれば

これにもおもひよりも候はづ

遠州にも秋葉山とて山も立て候が

秋葉三尺坊の御知行のおん山なれば

これにも思ひよりも候はづ

三河には鳳來寺とて山も立て候が

薬師如來の御知行のおん山なれば

これにも思ひよりも候はづ

此ところ當所にもおん山も立て候が

處は當所氏大神の御知行のおん山なれば

これにも思ひよりも候はづ

此ところにもおん山も立て候が

此山と申するは

山の高さが唐天竺へ

かむりの餘る程なる山にて候

山の廣さは外ヶ濱迄

かむりの餘る程なる山にて候

以上は詞章が整つて居た點から假に古戸の古傳書にあるものを選んだ。下津具古眞立等の口傳書には幾分の相違があり、山の唱への順序名稱等も一二異つて居る。尙最後の「此ところにもおん山も立て候が」以下は、尋ぬる山を發見して其山に就て言うて居る譯である。

此場合對照となる山は總て假定であつて、舞戸の四隅に立つた櫛の裡を言ふらしいが之は寧ろ、舞戸を中心にした全部を指す方が、意義が立つて居る。即ち神樂宿内を、一ツの山と假定した方が、傳承感とびつたり合ふ心地があるのである。唯神樂宿内に於ては、山立てが幾度も繰返される爲に、此概念を却つて稀薄にする感があるが、之は重要な式を行ふ度に、一々式場を改める意味の、用意周到さとも見られる。此傳承の現はれは、下津具古戸等の次第書で見ると、山たづねの前に、別に今一度山立ての事が繰返されて居る。即ち山立てを終つて、「山が立つてさうらうしく」と述べ「とよのへつゐに千代の御山が立つて候」と言うて、次に山たづね

に入るのである。千代の御山は、即ち舞戸の裡であつた。さうして更に想像を進めると、後に言ふ白山(しらやま)に對立するとも考へられる。

以上で、兎も角山を發見した譯であるから、續いて次の次第に入る。各所の口傳書が共通に、之より話の分と前書してゐた點から考へると、話の分とあるのは、談話の形式即ち詞であつて、歌謠とは別である事の注意である。以下詞と前書したものは、總て其意である。

詞さらば山を見出しましたで

この山に主(註ぬし)があるかないか

此處に岩のようなものがある

此岩に一首の歌を掛けて見ませづ

此詞に據つて、行事の經過は略ぼ想像されるのである。次には歌になり三度宛繰返す

苔衣著たる岩だにさむげなに

きぬき(?)衣の苔のいはだに

之で歌をかけた譯である。尙花祭りの場合から類推して、斯うした歌の唱へは、總て拍子入りである。

次に再び詞になる。

詞すこし岩が動いたような

此時山の主として、別に一人が「ゆはぎ」を被つて一方に蹲つて居たとも言ふが、断定する迄の根拠がない。

次に詞

もう一首掛けて見ませづ

引續き次の歌を唱へる。

苔衣著たる岩だにさむげなに

きぬぬ(?)岩は風をいとふらん

此時山の主即ち岩に向つて問ひかける歌は、各所の口傳書で異つて居て、例へば古真立では「岩の苔岩のそとばの苔衣、きぬぬ岩の苔となるらん」で、之を前後繰返して居るに對して、下津具では「苔衣きたる岩だにさむしさに」とあるだけである。

前後二回の歌を掛ると、初めて山の主が應へる詞がある。

詞さん候さん候

山てふ山にて主なき山が候か

道てふ道にて主なき道が候か

川てふ川にて主なき川が候か

國てふ國にて主なき國が候か

森てふ森にて主なき森が候か

尙此山の主の詞も、各所異つて居て、下津具の口傳書では、山道川國森が、宮堂家川山となつて居た事は、口傳が口授の久しかつた事を示すと同時に、口傳書に據つて、別個の形式があつた事實を物語るものであつた。之で山の主の詞が終つて、次に山の賣買の詞に移るのである。

詞さらば山の主を見出しましたで

此山を値段をして買取ましょ

それから掛合になり

いくらばかりにお賣なさるよ

いくらばかりに買取なさるよ

千貫ばかりにお賣なされよ

千貫ばかりにお買なされよ

百貫ばかりにお賣なされよ

百貫ばかりにお買なされよ

以下十貫一貫百文と段々に下つて

十六文にもお賣なされよ

十六文にもお買なされよ

之で掛合ひが終り、山の値段が調つた譯で、次の詞がある。

いざさらば山の値段が出来ましたで

いざさらばおなかうど仕る

之で次の「なかうど」に移る。「なかうど」は次第四十六番中人の事とあるのがそれである。此場合山の値段が出来て、「なかうど」に移る過程は、前後の状況から考へて、山の値段が調つて、先づ之を買取つて、次の行事に移るものと解せられる。「なかうど」には媒約の意があつた事は、前後の次第から判断される。

此山の賣買に於て、下津具の口傳では、一節毎に「そのなかすぐりて千貫」或は百貫となつて居て、賣買の感じを一層深く出して居る。

尙古戸の別本口傳には、此特別に土公神祭りをなし、祭文を誦じる事がある。祭文は「寶ぞろひ」といひ、東南西北中央即ち五方の神々に、寶を數へ上るもので、次の如きものである。

東方大神太郎の王子

乘馬(註のりうま)にはさう千疋牛千疋

猪の皮千枚鹿の皮千枚にはとり千羽

數へてまゐらせさうらう

以下南方二郎王子西方三郎王子北方四郎王子中央五郎の姫宮と、同一の文句を繰返すのである。口傳書には此後に左の如き注意がある。

寶ゾロイ 内山ニ又ソトノ山ト 論義ニ誦ズベシ

之に據ると、論義に誦すべしとあるのは、祭文に對する注意と解せられるが、祭文の形式から見ると、充分酌取り難いものがある。仍つて之は、次に記してある山の賣買の掛合ひに互つてのものと解せられる。而して此場合の詞は、前に掲げたものとは大分形式が變つて居る。斯



うした形式も行はれて居たらしい。

あはれあれを買は、いな

千疋千駄で買は、いな

萬疋萬駄で買は、いな

千疋千駄もおしからじ

萬疋萬駄もおしからじ

さうなすりてさうらいば

千貫ばかりも候

百貫ばかりも候

之より十貫一貫百文と段々下つて

十六文賣とりたまへさうらいの

買取たまへさうらいの

尙茲で一言断つて置きたいのは、土公神祭りの事である。土公神祭りは、山立ての儀式があつた場合、「しづめ」の反閉の一方に必ず行はれて居た事は、前に述べた通りであるが、此場合

は、反閉の事は無いが、行はれたらしいのである。さうして祭文の詞章であるが、土公神寶祭文、又は大土公祭文として、別に中設樂(なかしたら)古真立の口傳書中に、遙に首尾の調つたものがある。それに比較すると、前記の詞章は、前半一部分に過ぎないから、或は後半を脱落せるものかと思ふ。

説明が大分煩雜に互つた嫌があるから、茲で第四十五番山たづねの次第を、各所の口傳書を綜合して要約して見る。最初神座なり舞戸なりに先づ山立てをして、それが終つて、「山立さうらうし〜、とよの竈脇(つづ)に千代の御山が立つて候」で山が出来たと假定する。それから山たづねの詞になつて、伊勢、熊野、三笠等と段々各所の山を尋ねて来て、最後に、此竈脇の山を見出す事となる。そこで先づ其山に主の有無をたしかめる段になり、先づ一個の岩を見立て、それに歌をかけ、どうやら應へがあつたらしいとあつて、今一度繰返すと、一方で山の主が「さん候〜」と應じて、山に主のある旨を告げる。其處でいよ〜主を見出した事となり、其主との間に、山の賣買を取結ぶ事となる。一種掛合の調子で、千貫百貫十貫と、最後に十六文迄糶つて、いよ〜山の値段が調つた事になり、山を買取る事となるのである。唯茲で問題となるのは、古戸口傳書の土公神寶ぞろひの誦へで、別に土公を祭る事があつたか否かである。

四六 中人の事 前の次第で山の賣買が終つて、「いざおなかうど仕る」で、之からその次第に入る。之にも左の如き詞がある。

之より東方ひがしを見てやれば

六十ばかりの尉殿が

水干装束立烏帽子被ぎして

立つたと仰せ候が

何が所望で立つたと申せば

戀風吹いては神風吹いては

つまが所望で立つたと申て候ぞ

之より西方にしを見てやれば

十七ばかりのよき美人が

紺地の錦の直垂をかつぎして

立つたと申て候が

何が所望で立つたと申せば

戀風吹いては神風吹いては

つまが所望で立つたと申て候ぞ

此唱へ言も、古真立の口傳書には、男女の順が逆になつて居る。次に歌がある。

つまとつまとを引合せ

さいはひするこそ目出度けれ

中人の事として、口傳書にあるのは、之だけであるが、事實は此間には何等かの行爲が伏在した事が想像される。言落したが、唱へ言は東西から更に南北に繰返す。

言傳へに據ると、此「なかうど」の次第の際、恰も舞戸には、面形を著けた、「ねぎ」と「みこ」それにお伴の爺婆等が舞つて居た。其事は下津具古戸の次第書を見ても肯かれる。即ち山たづねの前が、能をすべしとして、「ねぎ」「みこ」「おきな」を出す事となつて居る。此時「ねぎ」「みこ」が其儘舞戸の一方に舞つて居て、茲へ来て、「ねぎ」と「みこ」の手を把らせて、其場に籬を敷いて抱擁の事があつたと言ふ。之に似た事はお伴の行事として花祭りにも残つて居て、古真立の、「みこ」の舞ひの折に、お伴の爺婆が、随分あくどい真似をして見せる。此概念から「なかうど」の場面を想像すると、言傳へがはつきりして来る。唯唱へ言から判断すると、「みこ」

と「ねぎ」が兩方から現はれた如くに受取れるが、事實は其處迄行つて居なかつたらしい。而して、古戸の次第書の順序からゆくと、能をすべしといふ、「ねぎ」「みこ」の場面は全然別になつて居た事である。

四七 おつわり物のこと 之は古戸の次第書には「おつくりもの」とあつて、別であるが、古真立を初め各所の次第も又「おつわり」であるから、假に「おつわりもの」と定めて置く。前後の次第から考へると、「おつわりもの」の方が、事實に近いやうで、即ち惡道と考へられる。之には次の如き唱へ言がある。

おんつわり物をめうさんろ 召

おんつわり物をめうさんろ

東のかいどのつくづくし 貝津 土筆

西のかいどのつくづくし

ほしぞと思ふぞくをぞと思ふぞ 食

山の物にとつては

峯はしる子むじな岩の上づんとあがる子狐 猪

谷を  
たによろ走る子兎

ほろ、打つ雉の子

ほしぞと思ふぞくをぞと思ふぞ

川のものにとつては

すなはしるあいのい 鮎 魚

石をおこすこじか 河鹿

ほしぞと思ふぞくをぞと思ふぞ

海のものにとつては

あかたいにくろたい 赤鯛 黒鯛

ほしぞと思ふぞくをぞと思ふぞ

此詞は下津具古真立等で幾分相違する。尙古戸の口傳書別本には、之を「らはいもの」として即ち「らはいものを召さるげな云々」とある。

各所の口傳書を通じて、此次に京人（きやうびと）の事として、俗謠らしいものがある。前後の関係からは、意味を解し兼ねるが引續いての次第であつたらしい。

京人がはせるげで京人がはせるげで

背戸の板橋きりしと鳴りそろ

背戸の板橋が

京人がはせるげで京人がはせるげで

背戸のくるま戸がきりしと鳴りそろ

背戸のくるま戸が

尙京人が「はせるげで」を「来るげに」としたものもある。

京人の事の次が生子(うまれこ)の次第で、即ち誕生である。次の如き詞がある。

子うまづげにそろ。子うまづげにそろ

へその下が病めそろ

きり／＼と病めそろ

じようとこが病めそろ

きり／＼と病めそろ

じようとこが病めそろ

いがあこがあ ざんぷりと生れましてそろ

言傳へに據ると、此時禰宜の一人が、ざんぷりと生れましてそろと言うて、脇の下から子供を抱へ出した。或はお産の眞似をした者は「みやうど」の一人とも言ふ。此時誕生と假定されたのは、神子(かご)に入つた者で、前に言うた「うまれこ」と「うまれきよまり」の者であつた。さうして此式に遇ふ者を、次から次に、又生れましたで、抱へ出したといふ。此處で問題となるのは、神子(かご)に入る最初である誕生の者と、「きよまり」の式が同様であつたか否かである。

「うまれこ」は一に「うぶこ」とも言うた。さうして之には、口傳書の詞から想像して、模倣的な出産の次第があつたとも思はれるが、言傳へでは、脇の下から抱へ出したといふ以外に、何等知る事は出来ぬ。此事に就いて、嘗て自分の生れた村の氏神祭典に、餘興として、拜殿へ妊婦の装ひをして出て、懸て其處に蹲り産の眞似をした話を聞いた事がある。其時はわるふざけ位に考へて居たが、之等の事實から判断して、其間には一脈の通するものがあつた事を、今に至つて感ずる。

四八 生子に産湯を引く事 前の次第を享けて、生子(うまれこ)に産湯の式である。之にも詞がある。産湯をひきましょ

せんだが池から水を出し

まんだが池から湯を出し

あつきぬるきをうめ合せ

あづきざいらくくと(豆)小豆ざいらくやろ

豆ごいらくくと(豆)豆ごいらくやろ

洗ふたる御子は

智恵かしこくて神の子になる

續いて左の歌がある。之は拍子入りで、即ち「うたぐら」である。

人の子は湯でこそふとれ

神の子は

智恵かしこくて利生はやかれ

此處で生れた子の男女を見定める問答がある。例へば男子ならば

問 なんでござります

答 男でござります

問 男子ならば髪をそろへよ

歌 伊勢の國黄楊の櫛とはこれのこと

とほのわかごの

そろはぬ髪の髪をそろへ

智恵かしこくて神の子になる

又女子の場合は

問 なんでござります

答 女でござります

問 女子ならば鏡見せよみしよ

歌 鏡みる子は神の子で

智恵かしこくてすしやうながしと

尙前の生子の次第から推して、此産湯の式にも、何等かのしぐさがあつたと想像されぬでもないが、總て不明である。唯此場合思ひ合されるのは、前言うた如く富山村大谷の御神樂の「うまれきよまり」に、「一にうぶぎひき」式に遇ふ者を一人宛竈の前に立たせて、「うたぐら」で、

釜の湯を笹の葉で頭上に灌ぎかける式がある。歌は茲にあるものとは違ふが、意味は相通するものであつた。其事實から類推すると、少くもそれに類した、歌の意に添ふやうな場面が、展開されて居たとも考へられる。

四九 産しめを開く事 「うぶしめ」を開く事で、之も前に引續いての行事である。開くは、引くとか張る意である。

之よりうぶしめを開きましよ

の詞があつて、次の如き唱へ言がある。

ところは當所の氏大神のおん前にて

産血うぶちあら血はしらかして

げがし申たおんどくしやうには

かの御しめ開いてまいらせ候

以上は古戸口傳書のものであるが、別本には、ところは當所の氏大神の御前とあつて、「垂跡八大金剛御前」となつて居る。尙下津具の口傳書には、第一に伊勢天照大神の御前をいひ、第二に熊野三社をいひ、次にところは當所の氏大神を言うて居る。

五〇 ぶつきりやう御養生のこと 産しめを開く事から引續いての次第である。「ぶつきりやう」は服

忌令らしいが、御養生(おんどくしやう)は何の意か判らぬ。別に「おんどくしやうぶ」とも言ひ、

下黒川次第書には「御徳勝負」とある。先づ次の詞から始まる。

之よりぶつきりやういたしましよ

次いで左の如き唱へ言がある。

し、をばしるいとて

あれをも食ふべきものにてそろ

し、をばしるいとて

食うたるおんどくしやうに

かの御しめ開いてまゐらせそろ

さるをばさるいとて

あれをも食ふべきものにてそろ

さるをばさるいとて

食うたるおんどくしやうに

かの御しめ開いてまゐらせそろ

鳥鳥類をばちやうるいとて

あれをも食ふべきものにてそろ

鳥をばちやうるいとて

食うたるおんどくしやうに

かの御しめ開いてまゐらせ

魚魚類いををばぎよるいとて

あれをも食ふべきものにてそろ

いををばぎよるいとて

食うたるおんどくしやうに

かの御しめ開いてまゐらせ

尙下津具上黒川の口傳書には、次の如く幾分異つて居る。

………とて食ふべきものにて

食うたる昔がとのおんどくしやうぶに

かの御しめ開いてまゐらせそんろ

此唱へ言から判断すると、生子の服忌を解く爲の呪詞とも考へられ「おんどくしやう」は、其呪詞を唱へる事かとも思はれるが、判然せぬ。

五一 惣しめ開く事 惣しめは、庭しめ、井戸しめ、瀧しめで、前に引續いて唱へ言がある。

庭にはかのおしめ開いてまゐらせ

井戸にはかのおしめ開いてまゐらせ

瀧にはかのおしめ開いてまゐらせ

之で、生子の爲の注連をそれぞれ開いた譯で、第四十五番山たづねから引き續いた行事は終つた譯である。即ち第四十五番から第五十一番迄は、實は一續きの行事で、之を總括して「山たづね」とも「うまれきよまり」とも言うて居る。

尙下津具の口傳書には、惣おしめをひく事として、左の如き歌とも詞ともつかぬものがある。

じなのたけのよたけ

なかのふしがたかだたがだもとよりこそ(?)

なかによがあるもの

註 第四十五番山たづねから第五十一番迄の次第は、各所の口傳書が、共通に詞から唱へ言等を、克明に記して居る點から見ても、之を特に重要視して居た事は想像されるのである。

五二 かうかづら渡し 此處で前の「うまれこ」と「うまれきよまり」の者に「かうかづら」を渡すのである。「かうかづら」は紙で作つた鬘である。「うまれこ」「うまれきよまり」の者は、此「かうかづら」を被つて、次の牛王渡しで、願が了る即ち式が済んだ譯である。次第書の記註に「うまれこ」には赤きかづら「きよまり」には青きかづらとあるから、それぞれの色の紙で作つたものを渡されたのである。

尙此時唱へ言があつたらしく、下津具の口傳書には、かうかづらを渡すこと、して、次の記事がある。

額  
したいにあはりてしかかくかずら

神 稚兒  
かみのはか子にかくゆづる

五三 しきの牛王渡し 「かうかづら」を被つた「うまれこ」「うまれきよまり」の者は、それぞれの幣を渡される。之が即ち牛王の意であつたものか、或は牛王は別にあつたか、次第書の記註に據ると、「うまれこ」にはみしでの御幣を持たせ産神の加持三度、「きよまり」には薬師觀音の

たから(幣の事)を持たせ、亦産神の加持三度かけるとある。

五四 若子のしめ 「わかごのしめ」で、次第書の記註に、扇子を持手をた、いて言ふとあるのは、祭文の唱へを指したものでらしい。「わかごのしめ」なる長文の祭文がある。祭文の詞章は口傳書毎に、後半に甚だしい異同がある。假に古真立の物に就て梗概を言ふと、國王といふ長者夫婦が、小鳥の雛を育ぐむ態を見て、己れに世嗣の無き事を憂ひ、熊野權現に申し兒をすると、夢中に白髪の老翁が現はれ漸く一人の「こだね」を授かる。月満ちて生れたのは、實は思ひがけぬ蓮の蕾であつた。長者は怒つて、其蕾を前裁の池の中に捨てると、翌日其蕾から莖が立つて、蓮花の花が開き、中から花の如き稚兒が一人現はれ出た。長者は事の意外に嬉しさ極りなく、直に七人の神樂男を集めて、七日七夜打つはやいつの舞ひを舞はせたといふのであるが、末尾は不得要領に終つて居る。下津具上黒川古戸等の口傳書にあるものは、前半の筋は古真立と略ぼ同趣好であるが、後半は大分異つて居て、蓮花の中から現はれたのは稚兒ではなく五人の神樂男になつて、後は神樂の由來とも思はる、全然別趣のものに變つて居る。之に據ると「わかごのしめ」から、神樂由來と、引續いて謠はれたものか、或は逆に續けたとも考へられる。

他の祭文の場合、例へば花祭りの「はなのほんげん」の祭文を誦じる場合から類推して、此「わ



かごのしめ」の祭文の際に、別に舞戸に於て、稚兒(うまれきよまりの者など)の舞ひがあつたのでないかとも思はれる。

五五 四目切替の事 「しめきりこしのこと」で、次第書記註には、神子(かご)の立願四度を一度にすます事とあるから、或は正式に「うまれこ」から順序を踏まなかつた者が、特に祈願に據つて参加したものかとも考へられるが、何れとも判然せぬ。

五六 山立 此場合の山立ては、後の第六十番鎮祭、六十二番土公祭の前程で、第五十九番なりものの事迄、總て、花祭りの「しづめ」祭りと同一の過程と考へられる。

六一 かりごりやう 花祭りで「おんやまがり」といふ、次第書記註にもある通り、「ひいな」を下し、御山がり、即ち飾り物を取片付け、「しづめ」の反閉に立てた山立ての櫛等を片附けるので、下黒川の次第には、「おんやまがり」とある。

六三 中手舞 「なかけてばらひ」で、花祭りの「へほり禰宜」に當るらしい。

六四 舞 六五 湯ばやし 六六 ひの禰宜 以上は總て花祭りの場合と同一であつた。

六七 籠をすべし 之は記註に御子(みこ)を出す事とあるが、本來第六十六番のひの禰宜と「みこ」の出は同一場面であるが、ひの禰宜が前に出た爲に、斯く次第が區別されたものであらう。第

四十六番中人の條に言うた如く、下津具古戸の次第では、翁、湯ばやし、「しづめ」の反閉の順で共に山たづねの前である。

六八 四ツ舞 六九 朝見 七〇 獅子舞 以上花祭りの場合と同一である。

七一 社禰神の舞 「しやごじの舞」で、笹を持、三人で舞ふとあるが、舞の手に就ては何等知る事は出来ぬ。之には次の如き歌がある。

とおんと とやれと

ゆとんと とやれと

びぶせが玉とる それが玉よ

さ、の葉 さ、の葉

せんするげちは ざんぶりたや

日頃のげちは 笹できよまる

やんらごうや しやごじ大菩薩

おりゐて湯めす時の 湯かげは

湯本も見へす あそぶきみ

しやごうじの 舞やら  
あつたの宮の こうするらよ  
さする夜さぞ なかよかれ

歌詞の形式から言うと、大谷の御神樂に行はれて居た「ねぎ」の唱へに似て居て、一種の祝詞とも判断される。而して大谷の御神樂に於ては、竈の周囲で多數の者が押合ひ揉合つて唱へ言があつた。此場合も或は笹の葉を持つて、之を唱へながら舞つたものかとも思はれる。

以上「しやごじの舞」を以て、祭祀は一先づ終つた事になる。即ち「ひいなおろし」「しづめ」の反閉「やまがり」をして、朝鬼で當夜出た鬼が悉く出で、獅子舞がある等、總ての花祭りの終末と相似た過程である。然も茲には尙第二日の次第が後にあつた。仍つて之を花祭りと對比すると、「かたなだて」即ち第一日の祭祀に當嵌る。假にさうした事を考へぬとしても、花祭りの「かたなだて」を回顧して、あの埒もない稽古上げの夜の意味が、はつきりして來る心地がするのである。神樂の場合、三日三晩一續きとする如き傳承があつた爲に、前後二ツの祭祀を、各區別する名稱等も、忘られたものと思ふ。

## 第二日

第二日は、下津具古真立の次第書では、次の日の次第とあるが、古戸の次第書では、次の日と、次の夜とに區別して居る、之は何れにしても同じである。次の日即ち第一日の了つた翌日に、白山(しらやま)建設を中心にした行事があり、之が終つて、夜から舞ひを中心にした前日の次第を繰返したので、其間第一日第二日に據つて幾分次第の異なるものがあるが、それは白山を中心にした行事の加はつた爲である。従つて神樂宿即ち舞戸を中心にした行事は除かれたものもある。

仍つて第一日が神樂宿即ち舞戸を中心、第二日は白山が中心であつた事にもなるのである。そこで第二日の敘述に入る前に、その中心であつた白山に就いて、別に説明を試みるとする。第一日は花祭りの場合を總て根據にしたから別に不便を感じなかつたが、第二日には之を豫め言うて置かぬと、説明が煩はしくなる懼がある。

## 白山(しらやま)に就いて

神樂の大きな特色であり延いて其根本でもあつた白山に就いては、口傳書にも殆ど記す處が

ないから、傳承者又は實見者の見聞に據つて想像するより他に途は無い。説明の便宜から、初めに其形狀に就いて概念を言ふ事とする。「しらやま」と呼ばれたものは、一種方形を有つた建物であつた。高さ約三間乃至三間半、大さは之又二間乃至二間半四方で、屋根は無く、四壁は總て青柴を束ねて葺き圍ひ、之には無數の白幣が挿し飾つてあつた。而して略ぼ二尺程の高さに床があり、床の下は又青柴の束を敷き並べてあつた。即ち天井のみが明いた青柴で圍んだ蓋の無い箱の如きものであつた。而して四壁にはそれぞれ口があり、内部床の上には白木綿を敷いたのである。天井屋根の部分中央に梵天を飾り、之を中心にして、四方に青赤黄黒白の五色の布を張り渡す、之を一に五色の雲と言うた。別に十二個の龍(たつ)を飾り、それに神道(かみ、ち)善の綱等を添へる。之が白山の概念である。而して白山は、橋が、りを以て一方の舞戸に聯絡して居たのである。

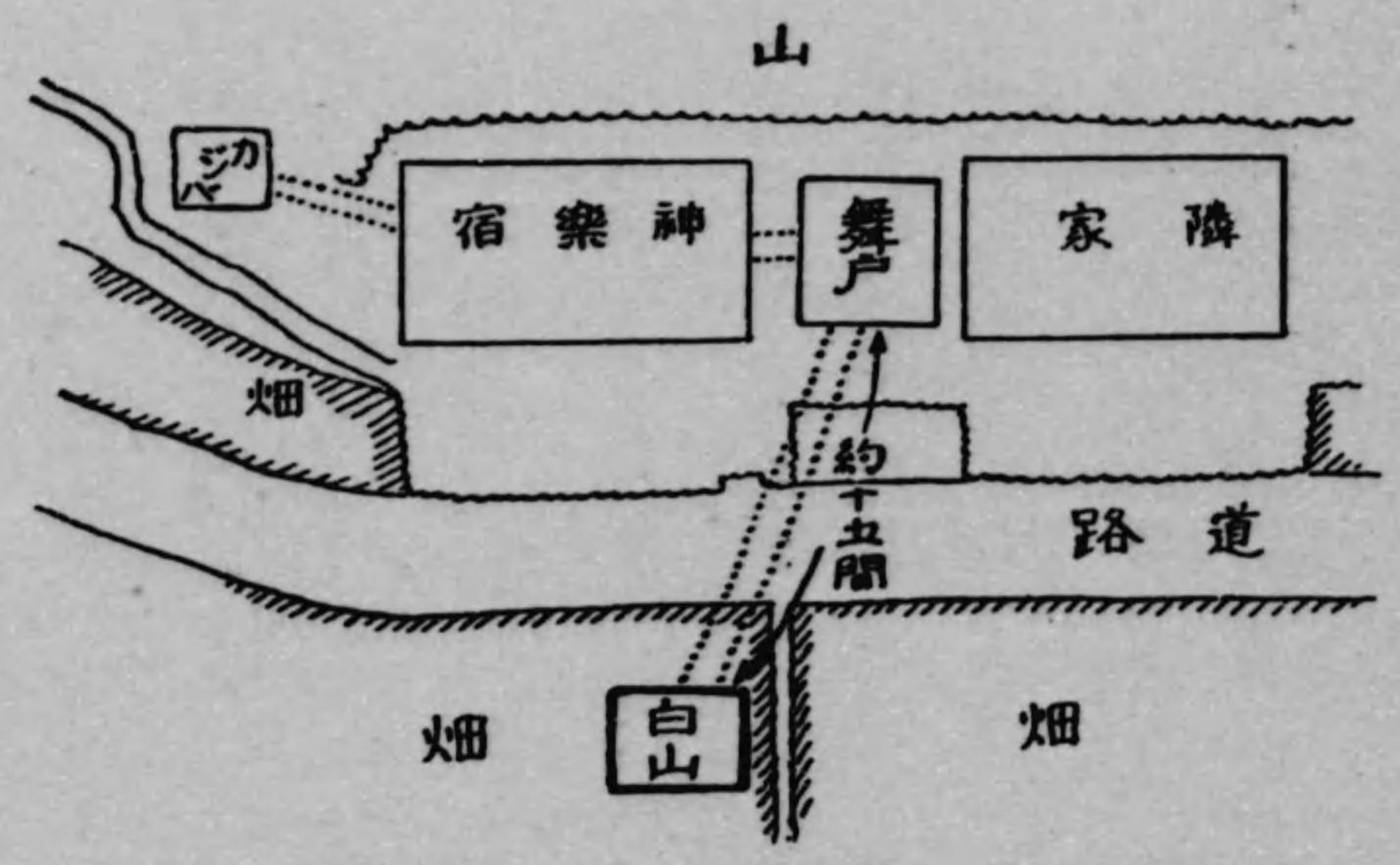
尙白山に就いては、部分的に異説もあるから事實を究明する上に於て、之を順次言ふ事とする。前説の概念は、未だ確定的のものではないのである。

白山の位置 白山の建立された位置即ち舞戸との關係は、之も諸説區々で必ずしも一樣でないが、一面から言ふと祭場の狀況に據つて、之に幾分の變更があり決定的なものでは無かつたら

しい。例へば舞戸から見て、何れの方位で何間の距離とする如き規範は無かつたと言へる。

第一に先づ、神樂の行はれた中で、最も新しい安政二年の事實に就いて見ると、舞戸から東南方に向つて三十間を隔てた畑中に設けられた。次に弘化四年上黒川字津川に行はれたものを、其神樂屋敷に就いて見ると、白山の跡には二個の石が目印として置かれてあるが、之を當時舞戸に充てられたと言ふ、隣家との間の明地から見ると、約十五六間西南方に當る。而して橋が、りは、舞戸から白山へ直接に及んだのである。

更に古戸の神樂屋敷に就いて見ると、同所の神樂屋敷は、俗に「わで屋敷」と言はれて居る程で、村内を一眸に見渡す程の高處で、急坂に石垣を設けた屋敷である。白山の立つた位置は、石垣下の畑であつた。同家は明治初年に類焼したて、其際石垣等も幾分改修されたといふから、當時の儘を、現在の状態から忖度する事は或は



第四圖 上黒川に於ける神樂屋敷の跡

當を得ぬが、舞戸との距離は、如何にしても十五間以上を隔つ事はない。而してその方位は西南に當る。

次に近世に行はれた四回の神樂の中、最も古い坂宇場の跡を見る。同所の神樂屋敷は、現在の別所街道の下手にある俗に下屋(しもや)と呼ばれる舊家である。同家は建築も古く、此地方としても代表的の建物であつた。それで當時の儘を現在の状態から想像する事が出来る。舞戸に充てられたのは屋敷の表庭で、現在も其處に、竈の築かれた跡に、一個の礎石が埋めてある。白山の跡は、其石を中心にして、東方に約三十間餘を隔てた桑畑中にあつて、やはり目印の石がある。而して橋が、りは、其間三十間の長きに渡つて居たか否か、それに就ては何等知る事は出来ぬ。(第一圖参照)

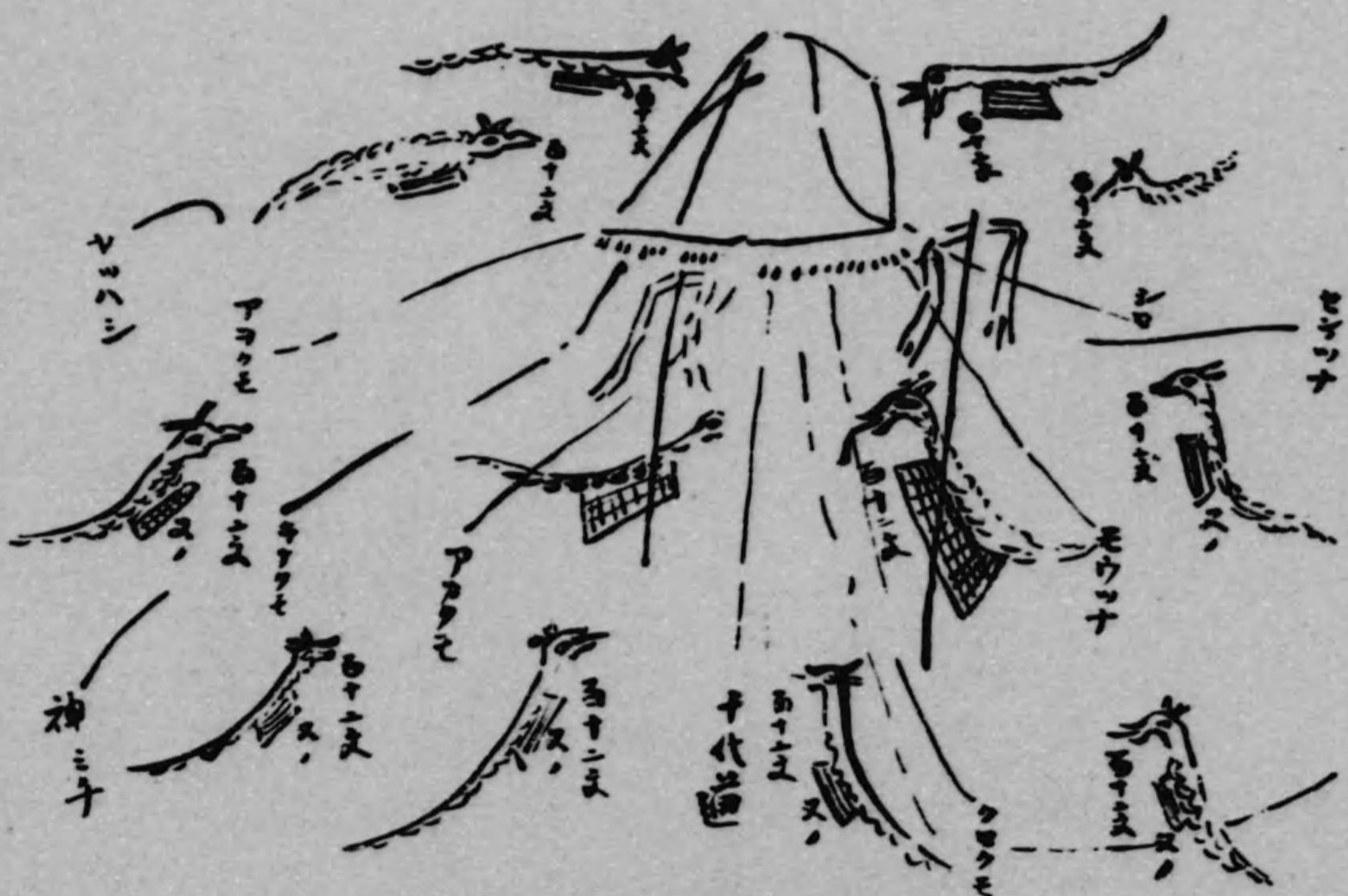
以上四ヶ所の位置から共通點を求めると、何れも舞戸から見て、低地に當つた事であるが、之は地勢上廣潤の地を選んだ結果とも解せられる。其他は格別位置に就いて注意を惹く程の事實は無かつた。

#### 形状と構造

白山の形状に就ては、前言つた概念以外には出ぬのであるが、之に異説もあるから、傳承のある儘を一通り言うて置く事とする。前説の概念では、白山に屋根即ち上部を被

覆するものは無いとするのであるが、一方に之を否定する説もあつた。其一ツは天保十一年古戸に行はれた際の印象として、一部に語り傳へられて居るもので、白木綿を張渡したと思はる、一個圓錐形の、恰も三角天幕の如きものとする説である。仍ち形状に於ても又前説を翻すものである。然し此説の出所を尋ねると、單なる想像が多分に加つて居たやうで、其説く處も茫漠として居た點から、一部の人々の空想が混じて居たとも考へられる。仍つて假に之を別の立場から考へて見ると、雪白の幣帛に埋もれた建物が、遽に畑中等に樹立された當時の状景を顧ふと、一方之が「やま」の名で呼ばれて居た聯想等から、一部事情に暗い者とか、或は少年婦女等の望見した記憶が後に語り繼がれて、さうした概念を生んだとも思はれぬ事は無い。

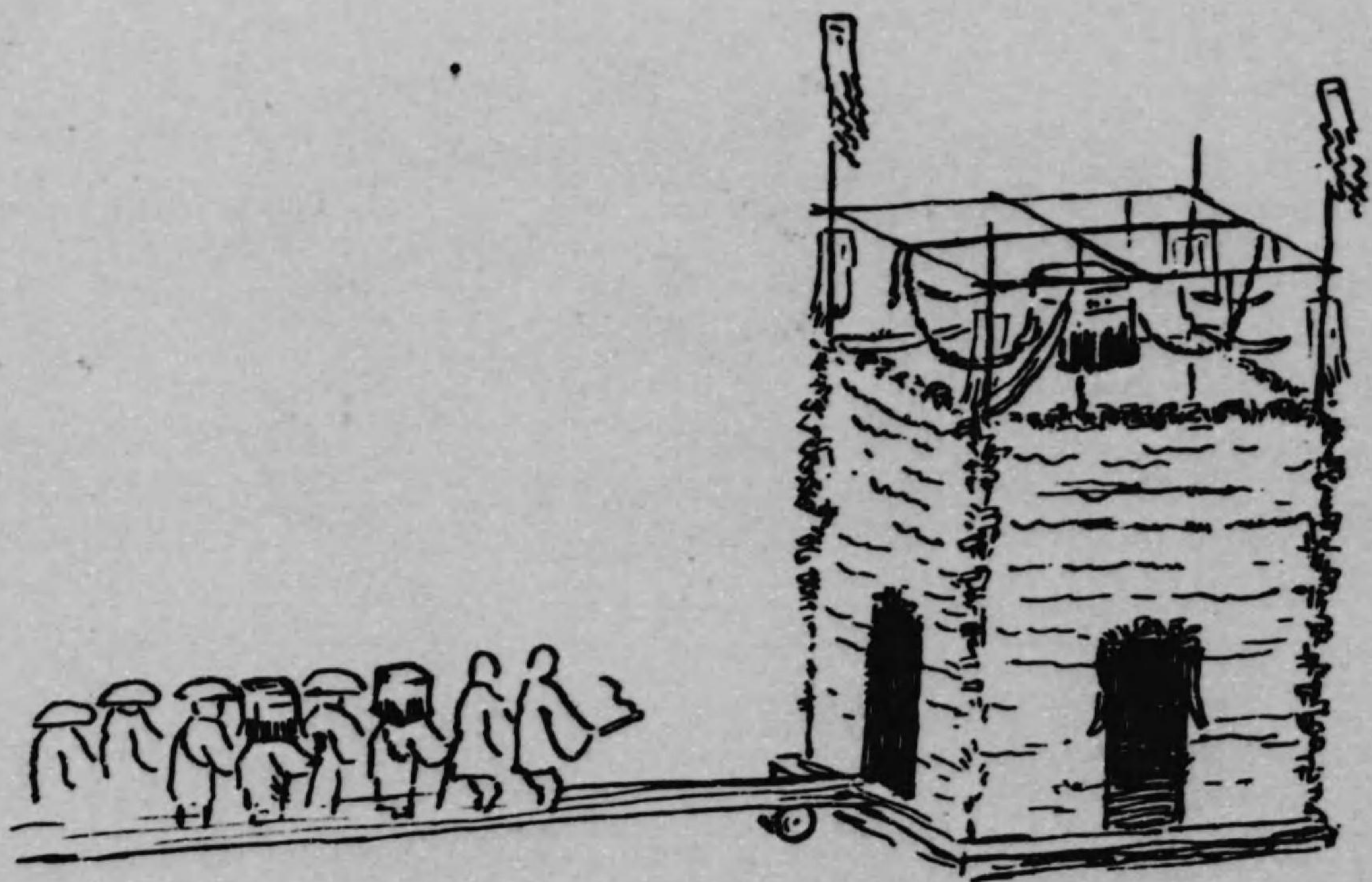
今一ツの異説は、白山が青柴で葺かれて居たとする説から、四壁と同様屋根も又同じやうに之を以て覆はれて居たとするのである。之も後に至れば根據の薄弱を思はせる説ではあつたが、自分も最初は此説を信じて居た。後に實見者の説を聴くに及んで、其概念は完全に覆つたのである。此説に就いて、實見者の一人である田邊長松氏は、屋根即ち上部は筒拔であつた事を明快に證言して居り、一方畠山常六氏も、斷言はして居らぬが、四ツ御堂の如き構造の、方形の四壁の角々に藁苞を當て、其處を中心に幣帛が挿並べられて、之は上端で止つて居た事を説い



第五圖 古戸「神樂次第」挿繪

て居る。其他の人々の説は此點を明かにせぬのは遺憾であるが、以上二氏の言から、少くも下黒川に於ける白山は、屋根に概當するものは無かつたと言へる。以上の理由から、白山に屋根のあつた説は、其製作が時に據つて省略又は變改のあつた事を前程とせぬ限り、根據は薄弱である。仍つて問題は、假に天井を筒拔として、屋根即ち上部を被覆したと一見感せしめた、何等かの紛らはしい装置があつたか否かである。

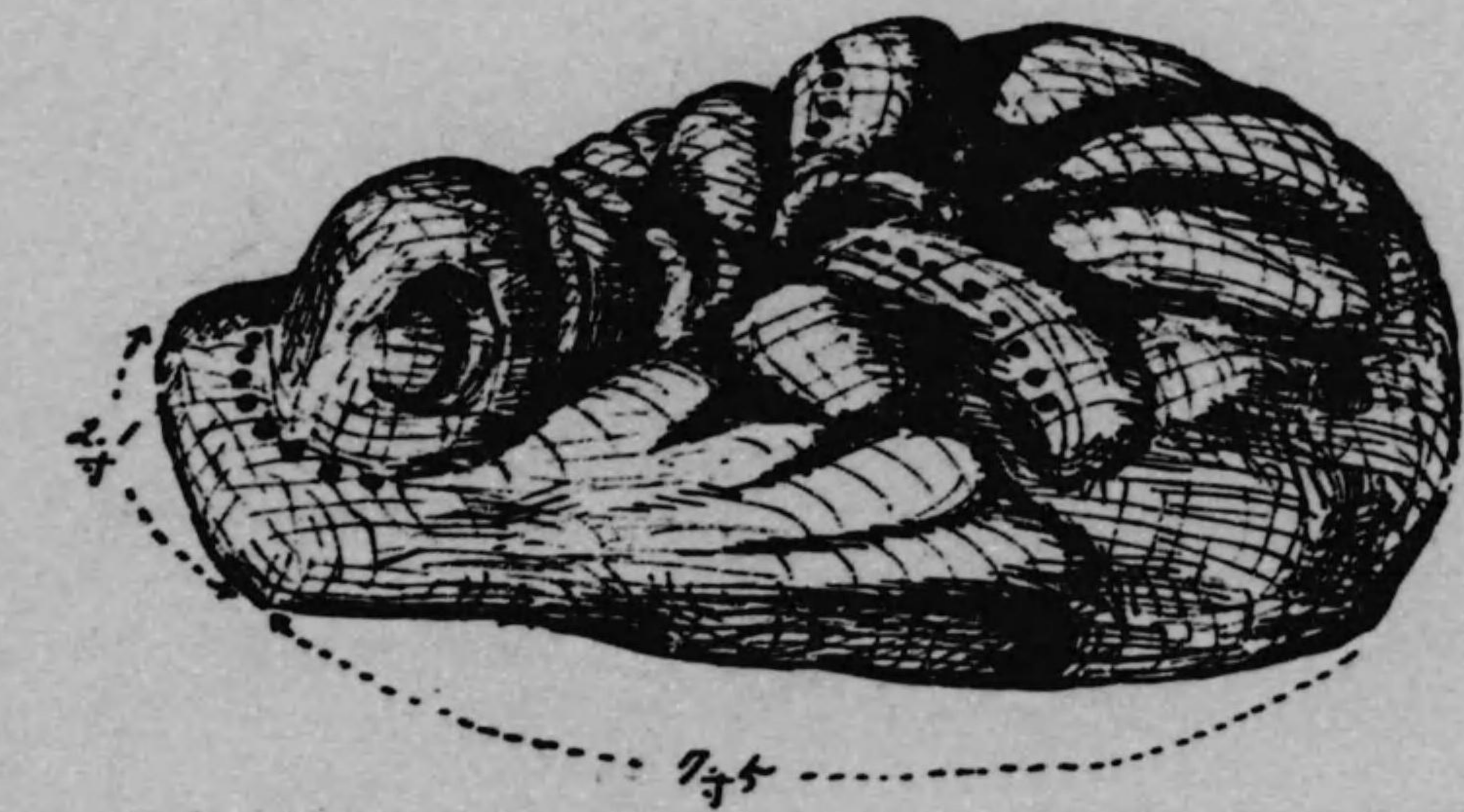
實は其事に就いて思ひ合される事實がある。それは前に口傳書の條にも一寸言うたが、現在古戸に保存して居る神樂次第(口傳書)の末尾に、何等の説明もなく描かれてある一枚の繪がある。(第五圖)多分全然繪心の無い人の手に成つたのであら



第六圖 白山の想像圖

う、如何にも拙い筆ではあるが、之が單なる惡戯書で無い事は一見して判る。自分は之を見た當時白山の説明圖ではないかと密かに思つたのであるが、何分省筆を極めて、形態としての想像がつかなくつた。況して其折は白山の概念も判つて居なかつた際であり、一二故老に摸寫を示して訊ねても判らなかつた。然るに其後白山に對する知識が追々得られるに及んで、上部に描かれた鳥の如きものは、實は十二疋の龍(たつ)を現はした事も判り、五色の雲も又白山に關聯せるとの自信を得たが、何としても形態の想像がつかぬ爲に、之を白山の説明とするには尙多くの疑念があつたのである。そこで別に想像を走らせて、或は之を舞戸の「びやつけ」を中心にした説明ではないかとも疑つ

て見た、舞戸に龍を飾る事は、神樂の場合には行はれたのである。五色の雲は神道の別稱かとも考へて見たが、然も神道は別に描かれてあり、其上前面の二本の大幣の如きものが説明出來ぬ。仍つて此想像も成立せぬ事となつた。處が偶然茲に言ふ白山の屋根即ち被覆の問題から、白山の上端一部の飾付けの説明でないかと思ひついた。即ち四方に之の壁を添へて見ると、初めて一個の形態が浮ぶのである。さう考へると總てが傳承にびたりと合致する、唯前面二個の幡の如き幣が不明であるが、之を白山上部の飾付けとする事は先づ誤は無いと信ずる。



第七圖 上黒川 熊谷紋治方に保存されたる龍頭

之に據つて見ると、天井は全くの筒抜けではない、二間乃至二間半四方の中に、之だけのものが屋根の如く飾られてあつた譯である。従つて屋根があつたとする説も、全然據り處が無い譯ではない、遠くから見れば、立派に屋根とも思はれたであらう。

尙此圖に據ると、中心に頭巾の如く描かれたものは、梵天で、即ち花祭りの「びやっけ」と同一のものであつた事は、傳承にも明かである。五色の雲の他に神道があり、其他八ッ橋、善の網、百網等、花祭りの舞戸の飾付けと同様のものが此處に在つた事は、總て肯かれると同時に、一方神樂宿内の舞戸の飾付けも又之であつた事が判るのである。

白山に就いては、一々細部の説明を避ける意味に於て、自分の得た概念に基いて、之が想像圖を描いて見た、誤つた點は何時でも訂正するに躊躇せぬ。(第六圖)

舞戸の關係と橋がかり 白山と舞戸の間は、橋が、りで聯絡して居た。此橋を無明(むみやう)の橋と言つた。一に經文の橋とも言ひ、一端は白山に通じて居たのである。橋の構造に就いては深く知る事を得ぬが、俵を積んで橋枕とし、板を並べて、上に白木綿が敷いてあつたらしい。尙下黒川坂宇場等の如く、白山と舞戸の間が、三十間以上も隔つて居た場合、其間總て橋であつたか否か、此點は明かでないが、下黒川に於ける際は、橋が、りの及ぶ處は、別であつたとの説がある。

淨土入りと觀音堂 下黒川に於ける神樂の橋がりは、白山とは別で、祭場であつた現在の津島神社境内の、觀音堂に向つて架つたと言ふ。即ち舞戸から觀音堂の床に及んだので、一般に白山

内の行事と考へられて居た浄土入りの次第は、此観音堂内に行はれたとの説がある。而し之は現在では唯一人の證言で、即ち前にも言うた田邊氏の説である。之に對して、同じ實見者の一人畠山氏は浄土入りの光景を目撃して居たといふが、何等其事に觸れて居らぬのは不思議である。此事に就いて自分は田邊氏にしても畠山氏にしても、初對面の印象から其人格を信じて居る。然も兩氏共に、記憶に無い事は明快に其事實を告げて、決して宜い加減な思ひ付などを説く人々ではない。従つて其一言一句も、微塵も疑を抱かうとせぬのであるが、何分片聞きの爲に、後になつて兎角兩氏の説に喰違ひを生ずる。それで出来る事なら、二人に對座を乞うて、當時の追懷談でもやつて頂けば、一層明瞭を得ると信ずるものであるが、何分九十歳近い老齡の上に、互に地を隔て、居たのみならず、且自分が田邊氏の存在を知つた昭和三年の暮には、畠山氏は已に此世の人でなかつたのである。

それで田邊氏の言ふ處が事實であつたとすれば、畠山氏の實見した白山に於ける浄土入りの次第は、観音堂であつた事になる。之を合理的に判斷すれば、下黒川に於ける場合は、何等かの理由があつて、観音堂が充てられ、随つてそれに伴ふ相當の装置もされてあつたのでなかつたか、さもなければ、浄土入りが行はれた場所が何處迄も白山で、田邊氏が舞戸の東南方三十

間餘の地點に設けられたといふのは、何かの誤———というては相濟まぬが、錯覺ではなかつたかの結果に至るのである。

實は此問題を究めようにも、もう何等の方法もない、下黒川に於ける實見者には、今一人石田龍平氏があつたが、同氏は前にも言うた如く、其印象は極めて稀薄であつて、強いて記憶を求めれば危険の憂がある。それで之はもうどうでも宜い、白山の事實は判つたとすればそれ迄であるが、自分が此點をくださしく言ふのは、白山と浄土入りの關係で、例へば観音堂を利用する如く、之を別にしても宜いと考へた理由が、傳承の上に嘗て行はれたか否かを知り度い迄である。

## 第二日の行事

以上で白山に就いて一通り述べた譯であるから、以下次第書に基いて、敘述を進める事とする。尙第二日の行事説明は、煩雜を避ける爲に、第一日と別趣のものに限り言ふ事とする。従つて、次第順序を豫め考慮に入れて置く事が必要であつた。

七二 白山を作る事 第二日最初の行事で、白山(しらやま)建設である。各種の言傳へを綜合し

て、第一日の次第が、前日から引續いて、二日目の朝、即ち午前九時前後に終るので、それから引續いて取掛つたと解せられる。

七三 山相續の事 次第書記註には、山を祭木綿を張梵天を立清め勸請すとあるから、前の後を享けた行事で、内部に白木綿を張り、中央に梵天を飾つたらしい。尙山相續の意味に就いては不明である。

七四 しらやまにて山立 此山立から以下「しめおろし」なりものと引續いて第七十八番白山へんばい迄の過程は、前に言つた舞戸の山立てと同一と考へられる。

七九 四目の本式を讀む事 之は「しめのほかひ」の祭文を誦む事で、山立てに引續いた「しめおろし」に關聯せる次第かと思ふ。祭文は長文のもので、注連の由來を述べたものである。

八〇 土公祭りの事 之も山立てから引續いたもので、「しづめ」の反閉の一方、同時に行はれたものである事は、已に述べた通りである。之迄の次第で、白山が初めて、聖なる場所としての意義を生じた譯である。仍つて第七十三番山相續の記註の、山を祭とあるのは、之迄の次第を含んで居たかと思ふ。

八一 大行神勸請の事 「だいきやうじん」勸請で、舞戸即ち神樂宿内の行事に移る。大行神は別に

「だいきやうじ」とも言ひ、古戸上下黒川等の口傳書には、大行じ又は大行事とあり、又「だいきやうばん」ともある。扱次第書の記註を見ると、帯に扇子に鏡に善の綱と、右四品にて拵へ舞戸で勸請するとあり、下黒川次第書には惠方に向つて掛るとある。之は他の口傳書にも最も重要な式として居るが、之以上詳細を知る事は出来ぬ。古戸口傳書には、大行じ願上(註勸請)として次の如く記して居る。

先護身法九字十字 次三禮色作法 次作法ヲワツテ 次佛現(?)之法大事 次神樂之法  
次願上ヲワツテエカウ神祇講式エカウ且誦ヘシ 次當所神祇一切諸佛諸神願上申奉右年入  
祈念 心ノマ、ヨクノ申入也  
一ヌノ一タン梵天願上ノカンシキニ入也 入用  
一香センマイ酒サンゴ拂十二文クモツモリ物スイモノ酒ランヘイシ 被錢 供物 盛 吸物  
一グ祈念ヲワツテ爰(?)大夫トシテ且トモニサカツキイタス 盃

とあり、禰宜の心得を記したものでらしい。本文脇註は假に加へたものである。尙花祭りの場合は、「だいきやうばん」又大將軍とも言ひ、勸請の事はなく、後の神返し(註勸請)の次第だけを行つて居る。(振草系)



九四 ひとくらひ 之は「やまみ」の別稱であることは、第一日の次第に述べた通りで、即ち「ひとくらあすび」であるが、此の場合は、次第書記註にもある如く、第一日とは趣が變つて居て、別に檢め即ち問答がある。大體花祭りの「さかき」の問答に據つて推測して宜いと思ふ。其詞は次の如きものである。

問 やい／＼汝はなんたら何物なれば

所は當所の氏大神

宮の稚兒(註わかご)舞遊ぶ神寶前の庭を

事ざんもしいなりをして通るとは

やまみ われらが事にて候か

問 なか／＼汝が事にて候

やまみ あたご山の犬天狗比叡の山の小天狗

峯々島々を渡るあらみさき

あら天狗とは吾等が事にて候が

千代のへつゝ脇に御代の御山が立つたと申で

山見物にまゐつて候

問 荒さうづ 山あらすすなら通れぬ

山あらすまいなら通さず

やまみ 山あらすまい山見物にていつて候

問 神妙 しんびやうに見物をしてまゐれ

此問答を、花祭りの「さかき」の問答の場合で判断すると、之より舞ひに掛るか、或は山見物のしぐさがあつて、後に舞ひに入つたものと考へられる。即ち問答は、「やまみ」が舞戸に出て來た最初の行事であつた事は、舞ひの順序からも考へられる。茲で花祭りの「やまみ」の舞ひを回顧して見ると、初め舞戸に下りて、竈を一巡してから、まさかり(鉞)を杖にして、靜かに第二回目を廻りながら、左顧右盼しつゝ進むのであるが、一般傳承では、之を山を見る「しぐさ」と言うて居る。單に山を見ると言ふだけで、何の山を見るのかその事はもう判らなくなつて居るが、問答の詞にもある通り千代の竈脇の御代の御山を見る「しぐさ」とすれば、どうやら意義が通るのである。仍つて「ひとくら」と呼んだ一方に、別に「やまみ」の名があつた理由だけは之で判るのである。

「やまみ」を、花祭りの場合別に山割りと言うて居る事は已に言うたが、その名稱の由来を、神樂の場合に、山を割る事があり、それから来たと言うて居る。「やまみ」が山を割る事は、自分には未だ判らぬが、花祭りの場合に「かまわり」の事があり、鉞を以て竈に片足掛けて釜を割る「しぐさ」があり口傳には山を割ると教へてゐるので、「かまわり」は實は山割りの意味から来たもので、解釋の變遷があつたものかとも思ふ。然し又一方には、「やまみ」が山を割るのは白山であるとの説もある。白山を割る事は、行事の最後に獅子が行ふ事となつて居て、「やまみ」が之を割る事も、白山との關係も、確に判らぬのである。唯次第書の記註に、橋場にて檢むとある事が、白山と「やまみ」を結びつける緒口のやうにも考へられる。橋場は橋の詰である。さうして橋が、りが、白山から舞戸に續いて居た事から考へて、問答の場面を想像すると、「やまみ」が白山から出て、橋が、りを渡つて舞戸に現はれ、其處で問答の事があつたものか、若しさうすると、問題になるのであるが、此點は明かでない。それで萬一「やまみ」が白山からでも出たとすると、一方山割りの稱も生きて來るのであるが、共に明確な根據はない。

一〇〇 すいしやくのあすび 「すいしやく」は垂迹とも考へられる。次第書記註には、三人御幣を持舞をして、後二人の善惡を懺悔すとあるが、之以上何等知る事は出来ぬ。

一一一 聖の舞 ひじりの舞で、之は記註にもある通り、古戸（ふつと）の役に限つた事で、他の土地には之を辨へた者はない。聖の舞は一に玉の舞ともいひ、古戸の白山権現に祀つてある玉を捧げて、禰宜が直面で舞ふのである。別に歌があるが、之は現在古戸の高嶺祭に行つて居るものと同一である。

一一三 子種招き こたね（蠶種）まねきで、別に「こたね招き」「こたねひろひ」ともいひ、蠶靈の由来を説いた祭文の誦へである。次第書記註には、御幣を持、四五人立て言ふとあるから、他の祭文の場合から推して、拍子入りで誦じたものと想像されるが、祭文の形式から判断すると、或は演藝的な「しぐさ」が一部行はれたかと思ふ。祭文の詞章は、上黒川古真立下津具古戸等、各口傳書にあるが、其内古真立を除く他の三ヶ所の方は、三四の語句を除く他は同一である。古真立のものも、元同一のものらしいが、傳承に新古があつたやうである。

一一四 糸綿かけ 次第書記註以外は何とも知り難い。扇子を持て言ふとあるが、之には、絲綿の由来を説いた祭文がある。（各種の記録欄参照）

一一五 おぼろけ 之は花祭りの場合に（振草系）神上げの一ツとして、唱へ言等も傳へて居る。然し次第書記註には、櫛の尻に蠟燭を五本立て、それを持五方に向つて言ふとあるから、東南

西北中央の順序に誦文をしたらしい。

一一六 見目のあすび 見目(みるめ)は切目(きるめ)と共に花祭り神樂に最重要な神と考へられて居る。神樂に於ては、特に見目を重要視した、之を中心に祭祀が行はれた事は、已述の通りである。次第書記註には、禰宜二人で、一人は酒壺を持、一人は盃を持つて、五方に向つて盃の酒を投進したとある。其折の唱へ言として、次の如き詞が口傳書にある。

みるめの王子が東方ひがしへ打向へ

あつばれ又四郎に又四郎に

預け申よあづかりまうす

一ばい三ばい

かいて見ては候なめて見ては候

斯く唱へつゝ、東西北中央と繰返したものと思はれる。

註 古戸口傳書に據ると、此唱へ言の「又四郎に又四郎に」を、「又四きに又四郎に」とある事は、前の部屋入りの條に言ふ通りで、其他淨土入り、花のほんげん等の祭文中にも此名がある。因に此地方の一般風習に、神佛に酒を獻する際は之を祠又は尊像等、對照に向つて投げつける。

一一七 こていのあすび 別に「こていのあすび」ともいふ。太鼓を伏せて新菰を敷き、其上に上つて、下で大勢して言ふと次第書記註にある。太鼓の上に上る者は、何人であつたか判然せぬ。其唱へ言は次の如きものである。

一 こていやれくく

ね呉座まゐらせうよ

こでうがまゐらせじや

誰がまゐらせず

二 こていやれくく

枕まゐらせうよ

こでうがまゐらせじや

誰がまゐらせず

三 こていやれくく

夜著まゐらせうよ

こでうがまゐらせじや

誰がまゐらせづ

四 こでいやれくく

禊まゐらせうよ

こでうがまゐらせじや

誰がまゐらせづ

五 こでいやれくく

矢をまゐらせうよ

こでうがまゐらせじや

誰がまゐらせづ

六 こでいやれくく

矢どこさせ

こでうがさ、せじや

誰がさ、せづ

一一八 山またづねる事

之は第一日の山たづねと、次第は同一であるが對照の觀念は別である。

即ち第一日の次第は、「うまれこ」及「うまれきよまり」の爲の、山たづねであつたが、此場合は、後の扇笠(あふぎがさ)と、淨土入りの爲のものである。「うまれこ」「うまれきよまり」を初め、人生四度の大願に、それぞれ山たづねがあつて、行事が其處を發足點として居た事は、注意すべき問題である。次の第百十九番山の賣買も、又連続せる行事であつた事は、已述の通りで、唯次第の取扱が異つた爲に、斯く變つたに過ぎぬ。

一一〇 扇笠 「あふぎがさ」で、人生四度の大願と考へられて居た中の一ツである。其年齢に就いては、更に知る事の出来ぬのは遺憾であるが、各種の言傳へから判断して、青年期ではない。相當年配に達した後で、四十歳前後であつたらしく考へられる節がある。次第書の記註には、白と赤と混せたる鬘を渡し、金山の加持三度かけて、扇子を笠に被るとある。鬘は「うまれこ」「うまれきよまり」にある「かうかづら」である。即ち「かうかづら」渡しがあつて、同時に扇を渡され之を被つたのである。一部の傳承には、扇笠を被つて舞ひがあつたとも言ふが、一方「かうかづら」渡しは、次の次第にある淨土入りのものと、同時に渡されたと言ふから、淨土入りに舞ひがあれば格別、さもない限り無かつたと解される。此點も又明瞭でなかつた。

一一一 淨土入ること

次第書記註には、白の鬘(かうかづら)を渡し、大峯山上の加持をかけて

こげ笠を被り杖を渡すとある。こげ笠は檜笠、杖は一端に五色の花を附けたもので、花祭りの「花そだて」に杖に突く物と形式は同じであつた。此時淨土入りの者は、男女共白装束で、以上の品々を神座から渡され身に著けたのである。さうして禰宜の先達で舞戸を巡り、松火を先に立て、橋が、りから白山に渡るのである。

此時白山(しらやま)の内部は、一種黄泉の世界と想定されたので、淨土入りは總て黄泉へ旅立の仕度であつた。年齢は六十一歳の本卦還りで、一般傳承にも、此式を果した者は、人生の最大幸福者と考へて居た。此次第で判る通り、前後三日に亙る神樂は、人生の誕生から終焉迄を、如實に演示したもので、一部の傳承にも、神樂は人生の一代を現はしたものであると云うて居る。

花のほんげんの舞文 次第書にはないが、此時「花のほんげん」又「花のほんげ」ともいふ祭文を唱へる事がある。花祭りの場合には(振草系)此祭文を「さかき」の出現の折か或は花の舞(稚兒の舞)の折に、神座で唱へて居る。祭文は非常に長文のもので、各口傳書を通じて語句に不明の個所が多いが、その梗概を言うて見ると、最初に淨土の由來から、天地の成立國土山川を説き、花の木の發端から由來、更に其花を根本とする祭りの由緒の尋常ならぬ事より、其次第に參會する者の利生を説き、その功力を得て無事淨土に到る過程を敘べたもので、最後に極樂淨土黄

金の曼荼羅堂にある又四き又四郎と申佛に、確かに渡した受取つたといふ點で結んで居る。(花祭り口傳書参照)

神樂の淨土入りと、花祭りの「花そだて宮渡り」は、次第形式から見ても、根本に一味通ずるものがある。而して「花そだて」の祭文は、又淨土入りに關聯すると考へられる節がある。其祭文は「花のさうごん」共、花を開く事ともいふ。振草系の「花そだて」に「ゆふた」を頭に頂き、花の御串を杖に突いて、舞戸を巡り懸て宮渡りをする状景は、それが淨土入りの記憶から來て居たものと考へて宜いと思ふ。而して祭文詞章の、開いた花を笠として、同じ蕾を手にかけて蓮の莖を杖に突き、はなの山で巡り逢ふといふ其はなの山は、即ち淨土であつた事は、傳承の上に認めて居る。而して花祭りの「花そだて」の次第は、神樂には無かつた。然し此事は「花そだて」が必しも花祭り特有のものといふ意味の反證ではなかつたやうである。

一三二 橋の舞見 之は橋祭りの祭文の誦へである。舞戸から白山への橋が、りは、之をむみよ(無明)の橋といひ、一に經文の橋とも言うた事は已に述べた。現世と黄泉を繋ぐ道と考へられて居たのである。それで罪業深い者は、此橋が渡れぬ——轉落すると信じられて居た。既に安政二年下黒川の神樂には、豫め此事を防ぐ意味で、關係者が橋の兩側に立つて、淨土入りの

者を次々に背を押へて送り込んだと言ふ。

橋の拜見の祭文は、「花のほんげん」の一部とも考へられ「橋譽め」とも言ふた。次第書記註には、御幣を持殿附(とのづけ)と分郡(ぶんこほり)を言ひ、其後に橋の拜見をいふとある。殿附は花祭りの條にも言ふた如く、一種の勸請ともいふべきもので、五方位に神々の存在を意識づける事、分郡は之又花祭りの「ねぎ」「みこ」の條に言ふた事で、一種の國覓めとも國分とも考へられるもので、現在の場所の地理的意識を表示する目的とも考へられるものである。「花のほんげん」の祭文の構成は、此殿附と分郡の唱へを具備するものとも解せられ、而して無明の橋の由來をも含んで居たから、橋の拜見に對して實は末尾の詞章は重複とも考へられる。

一二三 食だい茶湯を持白山へ行事 淨土入りの者が、無明の橋を渡つて、男は左、女は右の口から内部には入つて、定めの席に著くと、其處へ膳部が出て、飯と茶が供へられる。之が食だい茶湯である。飯を一に枕飯(もつさう飯ともいひ葬式の折死人に供へるもの)といひ、之を食べたのである。下黒川神樂の際は、飯は握飯になつて居て、箸が一本突差してあつたといふ。

一三四 白山に繪を掛出家を置く事 白山の内部に繪を掛けたらしい。此繪が何を描いた物であつたかは知る事は出来ない。下津具下黒川の次第書にも、淨土に繪を掛るとあるから、前後の状況

から想像が浮ばぬでもない。尙出家を置くとあるから別に僧侶が居たらしい。下津具の次第書にも出家を呼ぶこと、ある。「花のほんげん」祭文末尾の、黄金の曼茶羅堂にて、又四き又四郎と申佛に渡す云々の詞から判断すると、其僧侶が又四き又四郎なる者に當嵌めて考へられぬ事もない。

一二五 五色の鬼白山へ行梵天を切落す 淨土入りの者が、恰も枕飯の膳に著いた時刻と謂ふが、此時當夜出た多くの鬼が、白山の四方の口から鉞を持つて飛入り、淨土入りをした者の前後左右で舞つたと謂ふから、それに當るらしい。

五色の鬼が白山に入つて舞つた時刻は、諸説を総合すると朝のやうである。此時一方の舞戸は其儘にして、關係者は悉く白山を中心に集つたと解せられる。花祭りを出發點として考へると、恰も翌朝の四ッ鬼即ち朝鬼の舞で、茂吉鬼が槌を持つて「びやっけ」の中心に下つた「はちの巢」を拂ひ落す、所謂「びやっけ」拂ひの場面が想像に浮んで來る。而して五色鬼の次第が第一日の祭祀に無かつた事も注意を惹くのである。

因に淨土入りの者は、此時怖ろしさに心も空になつて、枕飯が咽喉に通らぬもあり、中には感激と恐怖が一緒になつて、嗚咽の聲が外迄漏れ聞えたと言ふ。

一二六 獅子出て山を割事 五色の鬼の舞ひで、淨土入りの次第は終つたらしい。次に獅子が出て、先づ東の口から飛入り西の口へ抜け、更に南から北と、×形に抜けて、之で白山を割つた事となり、式は終つたのである。

一二七 山を引事 白山を取片附ける式である。

一二八 よなふねまごころ事 次第書記註には、橋枕(無明の橋の)にした俵を脊負ひ、兩口に扇子を一本宛當て一本を口にして、船を漕ぐ真似をしたとあるが、之は再び舞戸に返つての式だったらしい。俵は次の唱へ言から推して、單に米俵の意味で、合理的に考へれば、兩端に當てた扇子は翼で、口に唾へたのは稻穂の意であつたかと思ふ。

京から来るおほどりご

何をくわいて持て来た

大きな稻穂くわいて持て来た

稻三把で靱が八石

ざいんこく

最後の「ざいんこく」は船を漕ぐ擬音であらう。

一三〇 魚釣の事 花祭りと同じである。

一三七 ひいなおろし 一三八 おん山がり 以上共に花祭りと同じである。

一三九 だいじやうぼん廻りあすび 之は第八十二番の大行神(だいきやうじん)の別名で、其神上げの式である。花祭りにもこれが行はれて居る。

一四〇 みさき立 之は花祭りの外道祓ひと同一らしい。

一四一 火伏をする事 一四二 轡法を讀む事 以上共に禰宜の行事である。

### 次第説明の後に

一

神樂の次第は、之が事實の存在でなかつた爲に、花祭りの如く實感に訴へて説明する事は出来なかつた。従つて敘述は兎角闡明を缺く憾があつて、茫漠雲を掴む如き場合と、時には煩瑣に堪へぬ迄微細の問題にも觸れる等、區々に流れた事は寔に遺憾に堪へぬのであるが、斯うした事象の性質上、又止むを得なかつた。もとく神樂とは本末の關係にあつた花祭りの事實を

根據として、傳承者の言と口傳書の記載から獲た事實に過ぎなかつた事と、一ツには實相の究められるものは、何處迄も明かにしようとする意圖と執着があつた爲に、斯の結果に至つたのである。然も尙多くの疑問を残さねばならなかつた事は、不本意に思ふが致方がない。

## 二

敘述に充分の用意がなかつたから、もう一遍繰返して自分の感想を言ふならば、次第を通じ最も注意を惹かれる事は、花祭りから見ると今一層、行事が演劇的要素に富んで居た事である。一個の神勸請に至る迄其意識が濃厚であつた事を感せしめる。自分は嘗て此地方の祭典に伴ふ地狂言(村芝居)の事實を蒐めた經驗があつて、此採訪の動機も、又其處から發足したものであつたが、村々の氏神祭りの狂言意識が、此處迄根を引いて居ようとは實は意外であつた。祭りの根本が、總て動作を基調とする——行爲の表現から出發する事が事實の上に段々遣つて居て、歌なり祭文は、其動作の説明であり補足の感が深かつた事は、恰も歌舞伎芝居の淨瑠璃を思はしめるものがある。

## 三

神樂の特色であり最も代表的であつたものは、何と云うても人生四度の大願と考へられて居た神子(かご)の次第である。中にも誕生の式と其終焉の過程が、斯く迄ありの儘に行はれて居た事は、如何に傳統の力とは言へ、之が僅々七十數年前の事實とは信じ難い程である。恐らく實際を観れば、尙多くの事實が発見されたと思ふ。其他の二回の儀式を併せて考へると、此行事を支持して居た土地全體が、一種固陋な宗教者の如き觀念を有つて居たとも考へられ、世の風潮とは没交渉と迄思はれる。例へば「うまれきよまり」の次第にしても、其背景をなして居た觀念は、淨土入りの所謂「じやうど」であつた事を、傳承にちやんと有つて居た。其意識を假に代つて言うて見れば、「じやうど」は地を異にした幽明の境地であり又靈魂の世界であつた。四季常春の花の世界で、一に花の山とも言つて居た。此花の山の存在を、如實に覺らしめる爲の演技が、神樂の最も鮮明な部分であり特色であつた。而して祭りそのものは、纏て神界即ち黄泉と現世を繋ぐ接壤點ともなるのである。

従つて之が分脈であり一部分であつた花祭りの所謂「はな」が、此花の山に關聯を有つて居た事は意識せざる意識とでも言はうか、何といふ事なしにお互が心の中に傳へて居たのである。

## 四

神樂に現はれた特長として、今一ツ擧げらるべきものは、祭祀の觀念に於て物質的意識の濃



厚な事であつた。柄にもなくえらい六かしい言葉になつたが、手取り早く言へば金銭の力が大に與つて居た事で、祭祀の動機觀念に貨幣が特別の位置を占めて居た事である。簡単に考へればかゝしい程當然の問題に聞えるかも知れぬが、何かしら古い形式が遺されて居たと信ずるだけそれが目立つのである。神々を對照とする時、供物として酒なり餅なりの、所謂幣物を必要としたと同様に、或はそれ以上之を必要としたのである。例へば一個の勸請にも、些々たる瀧ばらひの垢離を取る場合にも、第一に「はらひせん」として之を要求したのである。考へやうに據つては代價の形式で、一稱の取引行爲とも言ひ得る。従つて其對照の神々に據つて、額に差等のあつた事は當然で、之を餅の大小酒の多寡に比べて、金銭だけに甚だしく目につく。之は口傳書を播けば、直に諾はれる事である。さうして之が近世に及ぶに従つて、漸次形式化しつゝ、あつた傾向が見える。此地方で神樂の事實を表示する譬に、一に金百兩米百俵と言つたが、之は何も後の人々の發明語ではなく、來由は遙かに遠かつたらしい。

金銭即ち貨幣が祭祀に重要な位置を占めて居た一方に、口傳書を通じて注意を惹くのは木綿である。白木綿で一に「かんしき」又「かんしき木綿」とも言つた。之が總て御簀とも帳とも、又新菰ともなつて、重要な儀式毎に、淨化の對照として無くては叶はぬ物であつた。恐らく一回

の行事を通じて使用された額は夥しいものであつたらう。

## 五

今一ツは花祭りの傳播との關係である。花祭りが因と神樂の影響を受けて居た事は何れの方面からも證明されるのであるが、その次第は村々に據つて多少の異同があり、中には一二の村に限つてのみ行はれて居た行事がある。之は因と他の土地が忘却したものとのみ考へて居たが、さうとのみは決められぬ。即ち神樂の場合、擔當した役々に據つて、其土地のみが傳へて居た事實がある事だ、之は本來花祭りの條に言うべきであつたが、神樂の次第を通じて感じた事だから次に附加へて置く。それから今一ツ、之は神樂の次第が整つて居たから當然の譯であるが、個々の行事次第が、花祭りでは已に意義不明で、何の爲か全然宛も無かつた行事が、神樂の場合では前後の關係唱へ言等から、意義が自づから明かになつたものが尠くない。然しそれがあるからと言つて、以前の姿が其儘に置かれてあつたと言ふのではない。此事は一步退いて考へると、意義が判るといふのも實は概念の末であつた。勿論花祭りに比較すれば、一倍以前の姿が窺はれ、花祭りの事實が、神樂に糸を引いた崩れであつた事は充分觀取せられるが、それとて實は五十歩百歩のもので、渾沌として究めもつかぬ事は、更に一步迷路に入つたに過ぎ

ぬ感が深い。幸か不幸か安政二年を以て中絶した爲に、花祭りに對して幾分古い姿を残したとも思ふが、之が假に繼續されて居るとしたら、花祭りと同様の成長を遂げて居た事は、想像に餘るものがある。傳承の衣は何處迄いつても纏ひついて居て、貧しい譬だが恰も辣薤の皮の如く、一皮剥いても又昔の感を深くする迄であつた。

祭文歌謠

おりぬのあそび 古戸口傳書

- 1 うつたれほし
- 2 にしきの袋ときしより
- 3 むがのはつこへ立てしより
- 4 ながきかみをばせんのかな
- 5 みじかき髪をばはづなとし

- 6 かうくかうべさうのはやはせ
- 7 ちどのふりわけむねあたり
- 8 わたんのいたかたをばあそびまばと
- 9 こひながしましもうし
- 10 とうのわかごにまゐらんと
- 11 ぬのならぬかうべさらし
- 12 にかゝらぬくちをすゝぎ
- 13 ほうしからだあらはんじやうになをり
- 14 こまならぬちどのいさみなしもうし
- 15 しかならぬまるぶしつかまつり
- 16 いしのかどをふみならし
- 17 とうのれんげをさしあげて
- 18 百八ぼんのうのじゆすをもみならし
- 19 とうのわかごにまゐらんともうし、

20 をんやくそくはことかりそめともうすが  
 21 まちくまえたるこんやのこよひ  
 22 いにしへはていくとしたる  
 23 がくさやでありつれど  
 24 たまのまるやとみがきたて  
 25 しろかまをくろかまとみがきたて  
 26 くろかまをしろかまとみがきたて  
 27 あてにてびやつかいたまのはた  
 28 下にてはんじやうやえだたみ  
 29 中には十二のきぬひいな  
 30 ちみちもうづなやつはしきりかけもうし  
 31 こかねのつぼへしやうするこそうれしけれ  
 32 うれしとおぼしめす  
 33 かけるしゆじやうはを、けれど

34 はたすしゆじやうはまれなりし  
 35 こんやこよひまんざのごわうとしやうじ申  
 36 あるほどに年若水  
 37 かはり申さば  
 38 よきとりのうちきか春のたねおろしは  
 39 南方北方東方中央西方十方へうちまくたねは  
 40 ねにてふとくはにひろく  
 41 くきにてふとくほにおく  
 42 すんいなほはせまちにせんぞく  
 43 まちまんくぞく  
 44 いかづあはかづかりとるほの  
 45 りしやうほうへをあいさづけ  
 46 われ守らんとおぼしめす  
 47 ふゆのみくらのうち

- 48 おんよろこほんついでにて
- 49 こぞのにはにはことしのにはうちならべ
- 50 たはらゆひめをなべるほど
- 51 りしやうほうへをあいさづけ
- 52 われ守らんとおぼしめす
- 53 このやかたにさんめうこがひ
- 54 いとまいせんごくわたまいせんごく
- 55 かいとりのべとりくりとるほどの
- 56 りしやうほうへをあいさづけ
- 57 六月わたのじやうほん
- 58 九月九日いとのじやうほん
- 59 しも月あからがしもはきぬのじやうほん
- 60 かいとりのべとりくりとるほどの
- 61 りしやうほうへをあいさづけ

- 62 われまもらんとごせわかんかんニカとおぼしめす
- 63 ならびのがうにひこちやうも
- 64 かいびやうれきれいもはしか
- 65 はえるともうせば夕方風とあいしぞき
- 66 われまもらんと四月すいしやく八代ごわうはおぼしめす
- 67 なにごともあひちかひてとらせもうす
- 68 まただいさんねんちゆうないに
- 69 四月すいしやく八代まんざ
- 70 ごわうとしやうじ申ほどの
- 71 りしやうさづけわれ守らんと
- 72 ごせはかんごとをおぼしめす

附記 本祭文は別に古真立に傳へたものが一種ある外、他には見當らぬ。而して之には脇註は一切加へぬ事とした。

- 1 そも／＼ことも大國無量の粟散國と申て
- 2 山も五ツの御山立つて候いければ
- 3 檀特山の御山須彌山の御山日本山の御山
- 4 こくをうざんのおん山
- 5 日本吾朝にはゆはとやまと申て
- 6 五ツのおん山立つてさふらいければ
- 7 川も五ツながれ廣まりさふらいければ
- 8 ちすい川ちはら川ちぶた川あまの川
- 9 日本吾朝にては天龍川と申て
- 10 川も五ツながれひろまりさふらいければ
- 11 天竺五ツの天じくたつてさふらいければ
- 12 東天竺南天竺西天竺北天竺中天竺と申て

- 13 五ツの天竺たつてさふらいければ
- 14 長者も七人の長者とよばれて候いければ
- 15 七人の長者の其中にこくをう長者と申て有徳な長者
- 16 みいけが千町川原が千町田が千町三千町
- 17 みいけの中にこぼくが立つて候いければ
- 18 此木と申は四節をさとる木にて
- 19 春はめぐみ夏は花咲き
- 20 秋は實がなり四節をさとる木にて候いければ
- 21 春三月の比なるに
- 22 北の御前の月見花見に御出めされ候いければ
- 23 わすかばかりの鳥ばら鳥類などは
- 24 こくをくわへて家とさだめて
- 25 十二のかひこをかいそだて
- 26 十二の方へまはせ給へ候いければ

- 27 北の御前も御覽なされて
- 28 あるじの館へ御下向あつて
- 29 わづかばかりの鳥ばら鳥類さへも
- 30 斯のごとくに十二のかいこをかいてだて
- 31 十二が方へとまはせ給へ候いけるに
- 32 三國一に名を得申せしこくをう長者
- 33 みたまのなくてはかくてはゆかじと
- 34 湯垢離七度鹽垢離七度水垢離七度
- 35 三七二十一度の垢離をかけ
- 36 紀の國熊野三社権現の御前に
- 37 七日七夜も夜籠り召され候いければ
- 38 七日目の夜半の比なるに
- 39 紀の國熊野三社権現まくらがみに立たせ給ひて
- 40 六尺二寸の鐵の杖の三尺二寸になる程

- 41 三尺二寸の鐵のあしだの一尺二寸になる程
- 42 唐土天竺日本吾朝國をたづね巡り候いけるに
- 43 汝に與へるみたまは無きとて
- 44 はちすの花のつぼみしところを
- 45 左の袂へうつさせ候いければ
- 46 其時こくをう長者も夢さめ
- 47 かつばと起ふし七度の禮拜めされて
- 48 あるじの館へ御下向あつて
- 49 北の御前の左の袂へ移させ給ひ候いければ
- 50 五月目にて月の水が止りて
- 51 九月のくるしみ十月半と申に
- 52 御産の紐を解かせ給ひ候いければ
- 53 きさき達は錦のした、れ御座とさだめて
- 54 男子か女子かと取上げ拜ませ給ひ候いければ

- 55 男子の體にも候はず
- 56 女子の體にも候はず
- 57 はちすの花のつぼみしところを
- 58 もうけ召され候いければ
- 59 其時こくをう長者は
- 60 男子にても女子にても
- 61 みたまたべとは請ひ申たが
- 62 はちすの花のつぼみしところは請ひはせじとて
- 63 前なるみいけへいましめなされ候いければ
- 64 あけの日の夜半の比なるに
- 65 池のうちより蓮花が莖立ち
- 66 八ツのしでくちかつばと開いて
- 67 中にも五人の神樂をのこ
- 68 出できさせ給ひ候いければ

- 69 其時こくをう長者は
- 70 七日夜もごゆはひめされ候いければ
- 71 そもく天神七代地神五代の
- 72 御世のおん時きりうちふつては
- 73 なこく「し」脱字カとてつかまつり
- 74 夜と晝とのしやべつもなく
- 75 日本吾朝國は晝夜の間にらせ給ひ候いければ
- 76 その時大力王と申は
- 77 方便めぐりて七人のものしりそろへて
- 78 八卦うゑかたに占形易をもひかせ給ひ候いければ
- 79 これこそ天照大神二ツの月日を抱き
- 80 天の岩戸にこもらせ候いけれども
- 81 五人のかぐらをのこ七人の花のやをとめ
- 82 十二人のけごしやご岩戸の御前にて

- 83 白張はくちやう白装束にて舞はせ給はゞ
- 84 夜と晝とのしやべつも出来させ給ふと
- 85 占ひめされ候いければ
- 86 大力王と申は方便めぐりて
- 87 五人のかぐらをのこ七人の花のやをとめ
- 88 十二人のけごしやご
- 89 白張白装束にて岩戸の御前にては
- 90 伊勢の御神樂には熊野の湯立と申て
- 91 じやうなる太鼓を打ならし
- 92 じやうなる笛を吹きならし
- 93 八ツ目の鈴をふりならし
- 94 七日七夜もひちにちひちよも
- 95 舞はせ給ひ候いければ
- 96 其時神もやらおもしろやとおぼしめされて

- 97 石の戸をも細目にあけて御覽なされ候いければ
- 98 其時日本吾朝國にも
- 99 月日の光ありくと
- 100 夜と晝とのしやべつも出来させ給ひ候いければ
- 101 其時大力王と申は岩戸へ飛入り
- 102 石の扉を引みしり虚空へ投げさせ給ひ候いければ
- 103 片戸は信濃の國戸隠におちつき
- 104 戸隠権現とゆははれ給ふも
- 105 かのおんゆはれにて候なり
- 106 片戸はひたちにおち付二の宮権現と
- 107 ゆは、れ給ふもかのおんゆはれにて候
- 108 大力王と申は今に末世に
- 109 ひたちそうの大明神と
- 110 ゆは、れ給ふもかのおんゆはれにて候なり



111 天の岩戸の御前にしゆしやうな拜みものは  
 112 いでき立おなだれ候  
 113 ふるきものには山姥やまおじより外には候はぬ  
 114 山おちおん立よつて拜ませ候いければ  
 115 これ程しゆしやうな拜みものを  
 116 おがみたしるしがなきとて  
 117 白きまつげ三筋ぬいて  
 118 虚空へ投げさせ給ひ候いければ  
 119 岩戸山へおちつき三本の櫛と變じ給へば  
 120 今日今夜の櫛と申も  
 121 かのおんゆはれにて候  
 122 山姥も立よつておがませ候へば  
 123 これ程殊勝な拜みものを拜みたるしるしがなきとて  
 124 白き白髪を三筋ぬいて

125 虚空へ投げさせ給へば  
 126 信濃國中伊奈に落付  
 127 麻からむしと變じ申て  
 128 今日今夜のみようど達の  
 129 麻のゆはぎと申ものかんのおんゆはれにて候なり

附記 本詞章は前にも言つた通り、中途から別個のものとなつて居る。尙上黒川の口傳書にあるものも之と略ぼ同一である。

若子の注連 古戸口傳書

1 そもく昔は長者も七人の長者も  
 2 すみえておなだれ候  
 3 七人の長者の中にもこくをう長者と申は  
 4 うとくな長者でおなだれ候

- 5 こくをう長者のおんまへには
- 6 川原が千町御池が千町田が千町三千町
- 7 のほきの表にこぼくの榎一本
- 8 すみえておなだれ候
- 9 春三月になり申せば鳥ばら鳥類
- 10 木を食ひて上りて家と定めて
- 11 十二のかひこを産みそだて
- 12 十二がはうへとまいらせ給ふ
- 13 こくをう長者の北の御前は
- 14 月見花見とゆるぎいで
- 15 よく／＼御覽候いければ
- 16 こくをう長者にあれば何の爲と候いは
- 17 あれかやあれば木を食うて上りて
- 18 家と定めて十二のかひこを産み育て

- 19 十二がはうへとまいらせ給ふと候いは
- 20 北の御前はきこし召し
- 21 鳥ばら鳥類さいこたねと言ふてか候に
- 22 汝に與へるみたまごは
- 23 一人なくては如何すむべきすべきかと候いは
- 24 こくをう長者きこし召されて
- 25 くらがねの一尺二寸の木履が二寸になる迄
- 26 くらがねの三尺二寸の杖が一尺二寸になる迄
- 27 唐土天竺日本外ヶ濱まで
- 28 廣しせばしとたづね申
- 29 汝に與へるみたまごさうらはん
- 30 さらば申子候と
- 31 所は當所氏大神のおんまへに
- 32 湯垢離七度水垢離七度

- 33 鹽垢離七度二十一度の垢離をとつて
- 34 一七日の夜ごもりまゐらせ候が
- 35 まんだみたまご候はず
- 36 二七日の夜ごもりまゐらせ候いば
- 37 三七日のあくあしたの夜半の頃
- 38 六十ばかりのおん僧が
- 39 枕上にとおん立より
- 40 はちすの花のつぼんだ所を與へ申
- 41 こくをう長者は受よろこんで
- 42 花の館へ持てかへりて
- 43 北の御前の左の袂へ移させ給ふ
- 44 七月のくるしみ九月のはづらひ
- 45 十月なかばと申にご産の紐をひらかせ給ふ
- 46 十二人のきさき達

- 47 きぬのした、れを御座と直させ給ふ
- 48 こくをう長者は男子か女子かと
- 49 とりやげおがみ奉れば
- 50 男子を抱いても候はず女子を抱いても候はず
- 51 はちすの花のつぼんだところを
- 52 儲けさうよくつかまつれば
- 53 なんぢははちすの花とは請ひ申さん
- 54 みたまご一人請ひ申
- 55 前の御池へ押沈めべきやと候いば
- 56 明くあしたの夜半のころ
- 57 御池にたき三尺の蓮華が莖立ち
- 58 はちすの花の八ツのしめくち開かせ給へば
- 59 五人のかぐらをのこがにこと出させ給ふ
- 60 その時こくをう長者は

- 61 嬉しき事は千歳なりやと取やげ拜み奉り
- 62 地神五代のはじめをば天照大神
- 63 國を守つてせんなしとて
- 64 日月をうばひ取て天の岩戸へ引籠り給へしが
- 65 其間一百四十九億九萬二千四百八十年なり
- 66 あん／＼たる時久しきによつて
- 67 諸神けんだいをなされ
- 68 天の岩戸の前に集りて
- 69 七日七夜の神樂をなされ
- 70 五人のかぐらをのこは五智の如來をまなべし
- 71 八人の花のやをとめと申は
- 72 はちえうれんげのすがたなり
- 73 十二人のみようと達は白裝束にて
- 74 七日七夜の打つはやいつ神樂をなし候いば

- 75 打つ太鼓はじやうじのねむりをさますが如くなり
- 76 ふる鈴の響は御すいさんふつさますが如くなり
- 77 吹く笛には神もやらおもしろと思召して
- 78 岩戸細目に明けてほがらかに
- 79 ごらんなされ候いば
- 80 その時よりおもしろきといふこと
- 81 おもてしろしといふことなり
- 82 大力と申明神岩戸に飛より
- 83 石の戸を引むしりて投げさせ給へば
- 84 伊勢の國へと落付たまへて
- 85 鳥羽大明神とゆは、れたもふ
- 86 かのおんゆはれで候
- 87 片戸は信濃の國に川中島
- 88 戸隱權現とゆは、れたもふ

- 89 岩戸の御前には
- 90 尊きすしやうの拜みものいできておなだれ候と
- 91 家内山神土公神三寶節神
- 92 おん立よりてごちやうもんなされ候
- 93 これ程すしやうなおがみものを
- 94 おがみたしるしに白きまつ毛を
- 95 三筋抜いては投げさせ給へば
- 96 大和の國にと落付たまへて
- 97 三本の櫛とへんげ申て
- 98 今夜こよひの櫛と申も
- 99 かのおんゆはれで候
- 100 山をばのおん立よりてごちやうもんなされ候いて
- 101 これ程すしやうなおがみものを
- 102 おがみたしるしに白きしらかを

- 103 三筋抜いては投げさせ給へば
- 104 伊勢の國にとおちつきたまへ
- 105 麻からむしとへんげ申て
- 106 今宵今夜のみようと共の著たる
- 107 ゆはぎもかのおんゆはれで候

若子のしめ 古真立口傳書

- 1 そもノ昔は長者も
- 2 七人長者とよばはれをなだれ候いければ
- 3 七人の長者の内でも國王長者が
- 4 うとくな長者でをなだれ候いければ
- 5 國王長者の前には田が千町に
- 6 川が千町に御池が千町に三千町
- 7 のをきの表にいで、をなだれ候いければ

- 8 國王長者の御前には大きな榎一本
- 9 そみえてをなだれ候いければ
- 10 春三月になり申せば鳥原鳥類とらばら
- 11 木をくひてあがりて家とさだめて
- 12 十二がかいこをもうけそだて、
- 13 十二が方へとまわせたまえば
- 14 きさきのひめがゆるといでさせ給へて御らんまします
- 15 國王長者にあればや何の爲ぞととはれ給へば
- 16 あれかよあればや鳥原鳥類とらばら
- 17 木をくひてあがりて家とさだめて
- 18 十二がかいこ儲けそだて、
- 19 十二が方へとまわせたまえば
- 20 鳥原鳥類さあへも子種とゆうじが候ぞ
- 21 なんじもみたまが一人なくては

- 22 いかがすむまい事と候ぞ
- 23 國王長者きこしめしさらば申子仕らんと
- 24 一尺二寸くろ金の木履二寸になる迄
- 25 六尺二寸くろ金の杖三尺二寸になる迄
- 26 唐土天竺日本そとが濱迄
- 27 ひろしせましと尋まはるも
- 28 なんじにあたへるみたまも候はず
- 29 所は當所の氏大神の御前にて
- 30 湯ごり七度に水ごり七度に鹽ごり七度に
- 31 三七二十一度のこりを取つて
- 32 一七日のこもりいたしてをなだれ候いければ
- 33 なんじにあたへるみたまも候はず
- 34 二七日のこもりいたしてをなだれ候いければ
- 35 又もなんじにあたへるみたまも候はず

- 36 三七日のあくるあしたの夜はんのころに
- 37 六十ばかりの老僧がまくら神に御立たまへて
- 38 はちすの花のつぼみしところをなんじにあたへ申候ぞ
- 39 國王長者請よろこびて花のやかたへもちてかへりて
- 40 きさきのひめの左の袂へうつさせ給へば
- 41 花の中に白き露がとまりて
- 42 七月半のわづらひ九月のくるしみ
- 43 十月半と申にごさんの紐を開かせ給へば
- 44 男子女子かと十二人のこないの女房達が
- 45 にしきのしたゝれこざとなをして取上げ申候ぞ
- 46 男子を抱いても候はず女子を抱いても候はず
- 47 はちすの花のつぼみし所を儲けそだで、候ぞ
- 48 我等ははちすの花とは請ひ申さぬ
- 49 みたまご一人請ひ申した

- 50 前なる御池いしづめ申べしやとをうせ候いければ
- 51 はちすの花の八ツのしめ口開いてまいらせ候いければ
- 52 花の中より花の若子一人
- 53 儲けそだてゝをなだれ候いければ
- 54 うれしき事はせんざいなり
- 55 十二人のみやうど七人の神樂男只一時に集め申して
- 56 七日七夜打つはやしつ舞はせ給へ候いければ
- 57 國王長者の御前にたつとき
- 58 すじやうな禮物がいできてをなだれ
- 59 所は當所氏大神おんたち寄つて
- 60 御らん申めされて候いければ
- 61 又も打つはやいつ舞はせ給へ候也
- 62 伊勢天照皇大神宮神樂目出度

附記 古真立の口傳書にある「若子のしめ」の祭文は、之又他の土地に傳へたものとは幾分異つて居て、一方神樂申付の祭文との關係が考へられぬではないが、之は兎も角も別個のものとなつて居たのである。

神樂申付 古真立口傳書

- 1 そもく神樂と申者地神五代の初に
- 2 天照大神國を守つてせんなきことゝて
- 3 日月うばひとりて天の岩戸へひきこもらせたまふ
- 4 そは一百四拾九億九萬二千四百八十年なり
- 5 あんが<sup>ん</sup>たることゝてひさしいこと
- 6 寄て諸神けんたいして岩戸前にて集り
- 7 御神樂あそばせさるによりて
- 8 見子<sup>みこ</sup>の前けるさんみんえんまんのかたちなり
- 9 五人の神樂男はごちのによらいをまなびたれ
- 10 八人の花のやをとめと申は

- 11 八<sup>はち</sup>ゑんどうのすがたなり
- 12 打太鼓の音は常夜のねむりをさます義也
- 13 とをびやうしのさゝつの聲も
- 14 常夜のねむりをさます義なり
- 15 振る鈴のひゞきは御すいさんのねつをさます義なり
- 16 吹く笛の音は神々たちがあらをもしろと思召
- 17 岩戸をほそめにあけてほがらかに御覽ある時
- 18 せんみやう役にみるゆるゑにをもしろと有
- 19 さるによりて面白とゆうことは
- 20 此時始て申事有なり
- 21 諸神岩戸の口へ集り
- 22 たちからをうの明神が岩戸へとび入
- 23 片戸を取てなげさせたまへば
- 24 信濃國にてをち付たもふ



- 25 とがくし明神御子とならせたもを
- 26 片戸は伊勢の國にてをち付たもを
- 27 とば大明神とゆわ、れたもを
- 28 其時こそは岩戸前にたつ時
- 29 すじやうな禮事ちがひものが候出きて候とをうせ有からには
- 30 ぼんてん帝釋御聽間をめされて候いければ
- 31 山王じや山うば御立給て御聽間をめうされ候いければ
- 32 彼程なたつときすじやうな禮事がみた印に
- 33 白き白髪を三筋ぬいてなげさせたまへば
- 34 大和の國にて落付たまへば神となすらい
- 35 こよひ今夜の神と申もかの御ゆはれに候ぞ
- 36 山うば白きまつ毛を三筋ぬいてはなげさせ給へば
- 37 伊勢の國にて落付たまへて
- 38 あさからむしとなづけ申して

- 39 こよひ今夜のみやうどの著たる
- 40 麻のゆはぎもかの御ゆはれにて候ぞ

附記 神樂申付祭文は他の口傳書にあるものは、總て「わかこのしめ」の祭文の前又は後半となつて居たが、古眞立の口傳書では全然別個のものとなつて居る。然し別の一本には、この後に「若子のしめ」の次第が記されてある。

子種こたねひろひ 古眞立口傳書

- 1 そもくむかしは長者が七人
- 2 七人の長者の中にも
- 3 千明長者せんみんちやうと申は
- 4 有徳な長者でおなだれさうろいければ
- 5 名馬めうまの駒を七匹揃へて
- 6 金の馬舟で寵愛召されさうろいければ
- 7 中にも足毛のめう馬と申に

- 8 玉世の姫と申が心をなびかせ給へ
- 9 その時姫も七日七夜湯水を絶やいて惱ませ給へば
- 10 名馬の駒も草水たやいて惱ませ給へ
- 11 かくの如くにさうろうぞ
- 12 千明長者もふしぎな事とて
- 13 博士に占へ申させさうろいければ
- 14 名馬の駒に玉世の姫と心をなびかせ給へと
- 15 申されさうろいければ
- 16 千明長者もきこし召し
- 17 馬畜生にみいられては
- 18 如何すむべき事かと
- 19 足毛の名馬のそらくびはないて
- 20 皮はぎとらせまうして
- 21 前なる桑の木の東の方へと

- 22 差たる枝へはらせまうして
- 23 晒させ給へば姫を同座に行なへ給へば
- 24 一七日が過ぎさせ給へば
- 25 天よりつもし風が吹下つて
- 26 足毛の名馬の皮を
- 27 天へ捲上げさうろいければ
- 28 らい三月は蠶種こたねと變化まうして
- 29 此くにうへ天下らせ給へて
- 30 前なる桑の木に宿らせ給へて
- 31 桑の若葉を食ませ給へば
- 32 千明長者もふしぎな事とて
- 33 博士に占へ申させさうろいければ
- 34 足毛の名馬と玉世の姫と
- 35 蠶種と變化まうして

- 36 日本の寶となりまうして
- 37 天下らせ給へさうろいければ
- 38 さるによりて桑の若葉を食みたる時を  
父子ていことまうすなり
- 39 たかみでかひたる時をたかごとまうすなり
- 40 ふねでかひたる時をふなごとまうすなり
- 41 庭でかひたる時を庭ごとまうすなり
- 42 しゆくでかひたる時をしゆくごとまうすなり
- 43 その時千明長者もごらうじまします
- 44 頭の黒きは吾子の末なり
- 45 むくろの白きは名馬の末ぞと仰ある
- 46 四度の起伏辯なく難なく
- 47 絲にて千分綿にて萬々分
- 48 徳をかいとらせ申て

- 50 神前ではおみすと掛けて
- 51 拜ませ給へさうろいければ
- 52 佛前では九丈お袈裟とかけて
- 53 拜ませ給へさうろいければ
- 54 子種と申もかの御ゆはれにてさうろうぞ
- 55 天より蠶種を此くにうへ招き給へ
- 56 此くにうの蠶種を此當所へ招かせ給へ
- 57 此當所の蠶種をこれのやかたへ招かせ給へ
- 58 此やかたの蠶種をこれのお部屋へ招かせ給へ
- 59 此お部屋の蠶種を亭主の左袂へ招給へ候ぞ

次に部屋入りのことなり

歌 蠶種招きをあそばする間に夜がほげて。あけてつとめて福をたまはる  
蠶種招きのかへりあそびに夜がほげて。あけてつとめて福を給はる

木魂招の事 (註こだままねきの事)

下津具口傳書

- 1 こそもくこだまの濫觴を尋ねるに
- 2 長者も數多ありけるその中に
- 3 善明長者と申すは有徳な長者で
- 4 七間馬屋に七匹揃へて
- 5 白金の馬舟をもつておん飼ひ召されさうろうぞ
- 6 善明長者の一人娘に玉世の姫と申して
- 7 明け七歳にて大美人のおはし給ひ候が
- 8 ある時七日七夜なにかなによ しちにしちやも七日七夜も
- 9 湯水を絶してなやませ給ひ候なり
- 10 同じ月日と申すに馬屋一番の蘆毛の駒が秣を絶やいて
- 11 七日七夜も七日七夜も伏沈み候ひければ
- 12 姫の惱みに馬の惱み月日も變らず候を

- 13 親なる長者は之ぞ不思議と思召されて
- 14 博士をよんで占ひ給ひ候ひば
- 15 馬屋なる駒に戀せられ
- 16 それ故姫も惱ませ給ふと占はれ候ひければ
- 17 その時善明長者宣ひけるは
- 18 如何なる前世の報いたりとも
- 19 長者の娘とも言はるゝ者が馬畜生に魅入られては
- 20 人間界へ生せし奇特もあらじと
- 21 怒り罵り蘆毛の駒を引起させ
- 22 ひらくびてうとはぬ落し皮を剥いで戌亥の方に
- 23 晒させ給ひ候ひければ
- 24 不思議や其皮頻りに動いて大地へ揺り落ち
- 25 玉世の姫の寢間へ飛び
- 26 くるくると姫を捲きしめ給へば

- 27 折節まき風しきりに起りて
- 28 虚空へ捲上げ行方知れず候ひければ
- 29 これこそ希代の珍事と
- 30 又もや博士を呼んで占なひ召され候ひければ
- 31 今は天にて生を變じて
- 32 こだまとなつて桑の縁に集り候が
- 33 招けば此國へも降ると占ひ給ひ候ひば
- 34 さらば招いて見んと
- 35 國々に名を得し行者を呼んで招かせ給ひ候なり
- 36 天竺のこだまを此國へまねいた
- 37 招いたよ招いたよするり招きこんだ
- 38 此國のこだまを此村へまねいた
- 39 招いたよ招いたよするりと招きこんだ
- 40 此村のこだまを此家へまねいた

- 41 招いたよ招いたよするりと招きこんだ
- 42 此家のこだまを此家の北の方の左の袂へまねいた
- 43 招いたよ招いたよするりと招きこんだ
- 44 左の袂に三日三夜右りの袂に三日三夜
- 45 兩方合せて六日六夜
- 46 三日に水引四日にせいきが増して
- 47 五日にいづれば鷹の羽がひをもつて
- 48 紙一枚へ掃き集め桑の若葉で飼はせ給ひ候が
- 49 天より降りて初めて紙にて育てしゆはれをもつて
- 50 かみごと名づけ候なり
- 51 紙にあまればたかみへ移し候ひける
- 52 ゆはれをもつてたかごと名づけ候なり
- 53 其後たかみにあまり舟にて飼ひしをふなごと名づけ
- 54 又々舟にもあまればひろ庭にて飼ひ初め候

- 55 ゆはれをもつてにはごと名附け候なり
- 56 其時善明長者も
- 57 よく／＼御覽なされ候ひば
- 58 あたまの黒きは我子のかたち
- 59 からだの白きは馬のかたち
- 60 これぞ不思議の宿縁がなと
- 61 よく／＼因果の道理を悟らせ給ひ候なり

橋の拜見 古戸口傳書

- 1 そも／＼しやばとめいどの境には
- 2 さんどの大川と申て大きな川かな
- 3 廣さは八萬由旬川の深さも八萬由旬
- 4 波のはやさは三ツ羽のそやを射る如く
- 5 此川と申は上の瀬中の瀬下の瀬とて

- 6 三ツの瀬より他は候はぬ
- 7 上の瀬こすと思へば
- 8 青き鬼赤き鬼白き鬼黒き鬼黄なる鬼
- 9 五色の鬼共とりふくせんと仕る
- 10 更に越えつべしとも候はぬ
- 11 中の瀬に思ひかゝり越えんと仕れば
- 12 浮つるぎ沈つるぎに岩流れ
- 13 はた尋ばかりの毒蛇紅の舌を巻上げ
- 14 日月のようなる眼を見ひらき
- 15 とりふくせんと仕れば
- 16 更に越えつべしとも候はぬ
- 17 下の瀬を越えんと思ひかゝれば
- 18 千羽ばかりの鳶鳥萬羽ばかりの鳶鳥
- 19 身の毛を抜いてとりふくせんと仕れば

- 20 更に越えつべしとも候はぬ
- 21 是より五町ばかり上の瀬を見てあれば
- 22 天竺より閻魔たいしやく聖仁の掛たる橋の候
- 23 さもけつかうなる橋にて候
- 24 くろがねのなき柱
- 25 黄金のゆり桁白金の敷板
- 26 らんかんぎぼうしなどは
- 27 黄金を伸べたる如くにて候
- 28 この橋越えんと思ひかゝれば
- 29 閻魔たいしやく聖仁なほもひなるさうが
- 30 しやば世界はしありし時
- 31 善根もしたる事が候か
- 32 高き所に堂寺建たる事が候か
- 33 ひくき所に塔をも組だる事が候か

- 34 大川に船を浮べたる事が候か
- 35 寒げな者に麻のゑんしやの一枚も著せたる事が候か
- 36 錢施行酒施行飯施行
- 37 旅施行ざうり施行沓施行でも
- 38 ひきたる事が候か
- 39 その時さうかの答へて曰く
- 40 高き所に堂寺立たる事も候はぬ
- 41 低き所に塔をも組だる事も候はぬ
- 42 大川に船をも浮べた事も候はぬ
- 43 小川に橋をもかけたる事も候はぬ
- 44 おしげな者に物をもくれたる事も候はぬ
- 45 寒げな者に麻のゑんしやの一枚も著せたる事も候はぬ
- 46 錢施行酒施行飯施行
- 47 旅施行ざうり施行沓施行

- 48 ひいたる事も候はぬ
- 49 昔は千石千貫文中程百石百貫文
- 50 今當代は十石十貫文
- 51 入させ申て神樂をいたし
- 52 日に千人の供養を仕ると申せば
- 53 その時閻魔たいしやく聖仁は證據を出せと仰ける
- 54 十六花の花べら始として
- 55 二十六花の花べら三十六花の花べら
- 56 四十六花の花べら五十六花の花べら
- 57 六十六花の花べら七曜八げん
- 58 九品の淨土の花べら
- 59 肌の守りに認めこれ迄参りて候
- 60 その時閻魔たいしやく聖仁
- 61 淨玻璃の鏡に引向ひ心に疑ひ候はぬ

歌白鷺がはしとはしとを喰ちがひ  
更に疑ふしきは無きぞよ

附記 橋の拜見祭文は下津具を初め古真立山内の口傳書にもあるが殆ど同一のものであるから他は略す事とした。

四目之本戒之次第 古真立口傳書

- 1 抑天神七代地神五代之御神名情之事
- 2 第一國常立尊第二國授樋尊第三豐樹尊
- 3 第四塗煮尊第五沙土煮尊第六大戸之土尊
- 4 第七大若勺輩尊女面足尊男惶根ノ尊女ト申也
- 5 並ニ地神五代之神之御名者
- 6 第一大日靈尊第二正哉天勝土速尊
- 7 第三天之忍穗耳尊第四天津土彦彦瓊杵尊
- 8 第四彦火々出見尊第五彦波瀲武



- 9 卯<sup>ウ</sup>之羽<sup>ノ</sup>之葺<sup>フキ</sup>合<sup>アヒ</sup>尊<sup>ミコ</sup>月<sup>ツキ</sup>弓<sup>ユミ</sup>尊<sup>ミコ</sup>男<sup>ヲ</sup>姪<sup>シ</sup>兒<sup>コ</sup>王子<sup>ノ</sup>
- 10 男<sup>ヲ</sup>孫<sup>マコ</sup>盡<sup>ツクシ</sup>鳴<sup>ナリ</sup>尊<sup>ミコ</sup>合<sup>アヒ</sup>拾<sup>シウ</sup>二<sup>ニ</sup>代<sup>ダイ</sup>之<sup>ノ</sup>御<sup>ミコト</sup>神<sup>カミ</sup>
- 11 奉<sup>ホウ</sup>請<sup>シユ</sup>敬<sup>ケイ</sup>白<sup>ハク</sup>灌<sup>カン</sup>頂<sup>テイ</sup>申<sup>シユ</sup>並<sup>ナリ</sup>ニ<sup>ニ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>之<sup>ノ</sup>本<sup>ホン</sup>戒<sup>ケイ</sup>也<sup>也</sup>
- 12 謹<sup>キン</sup>敬<sup>ケイ</sup>白<sup>ハク</sup>抑<sup>ヨク</sup>神<sup>カミ</sup>ノ道<sup>ミチ</sup>三<sup>サン</sup>開<sup>カイ</sup>給<sup>キタマフ</sup>テ始<sup>ハジ</sup>メ<sup>メ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 13 一<sup>イツ</sup>度<sup>タク</sup>切<sup>キ</sup>給<sup>キタマフ</sup>バ手<sup>テ</sup>ヲ洗<sup>アラウ</sup>ガ如<sup>ニ</sup>ク也<sup>也</sup>
- 14 二<sup>ニ</sup>度<sup>タク</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>神<sup>カミ</sup>之<sup>ノ</sup>位<sup>イ</sup>ヲ得<sup>エ</sup>テ神<sup>カミ</sup>座<sup>ザ</sup>ニ附<sup>ツキ</sup>給<sup>キタマフ</sup>也<sup>也</sup>
- 15 瀧<sup>タキ</sup>ニ而<sup>ニ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>瀧<sup>タキ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>ト申<sup>シユ</sup>也<sup>也</sup>
- 16 宮<sup>ミヤ</sup>ニ而<sup>ニ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>ト申<sup>シユ</sup>也<sup>也</sup>
- 17 竈<sup>カマド</sup>御<sup>ミコト</sup>前<sup>マエ</sup>ニ而<sup>ニ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>釜<sup>カマ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>ト申<sup>シユ</sup>也<sup>也</sup>
- 18 庭<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>庭<sup>ニ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>ト申<sup>シユ</sup>也<sup>也</sup>
- 19 竹<sup>タケ</sup>紳<sup>シ</sup>ヲ拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>拾<sup>シウ</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 20 下<sup>ゲ</sup>品<sup>ヒン</sup>下<sup>ゲ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>キ參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>也<sup>也</sup>
- 21 二<sup>ニ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>二<sup>ニ</sup>十<sup>ジュウ</sup>六<sup>ロク</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 22 下<sup>ゲ</sup>品<sup>ヒン</sup>中<sup>チュウ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>キ參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>

- 23 三<sup>サン</sup>十<sup>ジュウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>三<sup>サン</sup>十<sup>ジュウ</sup>六<sup>ロク</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 24 下<sup>ゲ</sup>品<sup>ヒン</sup>上<sup>ジョウ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>キ參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>
- 25 四<sup>シ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>四<sup>シ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 26 中<sup>チュウ</sup>品<sup>ヒン</sup>下<sup>ゲ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>
- 27 五<sup>ゴ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>五<sup>ゴ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 28 中<sup>チュウ</sup>品<sup>ヒン</sup>中<sup>チュウ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>
- 29 六<sup>ロク</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>六<sup>ロク</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 30 中<sup>チュウ</sup>品<sup>ヒン</sup>上<sup>ジョウ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>
- 31 七<sup>シチ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>七<sup>シチ</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>眼<sup>ガン</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 32 上<sup>ジョウ</sup>品<sup>ヒン</sup>下<sup>ゲ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>
- 33 八<sup>ハチ</sup>拾<sup>シウ</sup>八<sup>ハチ</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>八<sup>ハチ</sup>拾<sup>シウ</sup>八<sup>ハチ</sup>葉<sup>エフ</sup>之<sup>ノ</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>切<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>者<sup>ナリ</sup>
- 34 上<sup>ジョウ</sup>品<sup>ヒン</sup>中<sup>チュウ</sup>生<sup>シユ</sup>ト切<sup>キ</sup>開<sup>カイ</sup>參<sup>サン</sup>スル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>
- 35 九<sup>ク</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>本<sup>ホン</sup>立<sup>タテ</sup>九<sup>ク</sup>拾<sup>シウ</sup>六<sup>ロク</sup>葉<sup>エフ</sup>之<sup>ノ</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>ト申<sup>シユ</sup>也<sup>也</sup>
- 36 百<sup>ヒャク</sup>舞<sup>マヒ</sup>臺<sup>ダイ</sup>之<sup>ノ</sup>御<sup>ミコト</sup>身<sup>ミミ</sup>四<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>ト申<sup>シユ</sup>也<sup>也</sup>

- 37 九品之淨土之御身四目ト申テ切時者
- 38 上品上生ト切開參スル也
- 39 凡此御四目ト申者釋尊之御父上品大王之御爲ニ拾二度
- 40 御母摩耶夫人之爲ニ拾二度
- 41 御身之爲ニ拾二度合三拾六度切給也
- 42 一百三拾六地獄之苦患ヲノガレンガ爲ニ
- 43 切始メ給ヨリ以來奉切所也
- 44 日本之衆生ヲ拾二之身四目切開キ難キニ依テ
- 45 九度之御身四目切テ九品之淨土ト當テ切開參スル也
- 46 夫九品之淨土ト申ワ上品上生上品中生上品下生
- 47 中品上生中品中生中品下生
- 48 下品上生下品中生下品下生ト申
- 49 是ヲ合テ則九品之淨土トワ申也
- 50 下品下生ト申ワ神樂之事

- 51 中品中生ト申化元之事
- 52 上品上生ト申ワサンゲ滅罪之事也
- 53 故ニ熊野ニ而ワ本宮神樂新宮神樂
- 54 化元那智センボウ是法情眞如之都エ參ル御身四目ト申也
- 55 サレバ是ニオイテ釋迦牟尼大覺尊之
- 56 淨土須彌頂之御前ニマイラントスレバ九山八海有リ
- 57 サレバ曰ク第一地獄山第二字軸山第三旦比山
- 58 第四善見山第五馬耳山第六毘那怛山
- 59 第七尼民羅山第八牛智位山第九須彌山也
- 60 又曰ク内海外海ニタダユル水有
- 61 第一甘水第二冷水第三粟水第四輕水
- 62 第五清水第六不臭第七飲時不損喉水
- 63 第八飲己不福水ト申也
- 64 第九之外海ヲソ甘水盈滿水共申

- 65 又西方無量壽佛淨土エ參ラントスレバ
- 66 三拾六萬億國土有濁惡世之衆生イカガ參ルベキヤ
- 67 故ニ七寶莊シヤウコン口善修奉佛法僧歸依五戒拾善ヲ持チ
- 68 ナカンツク今日今夜此御身神樂
- 69 法樂申シテ申サク諸神諸佛日本國中
- 70 大小神祇武神鎮守村ノ御神等ニ至ル迄
- 71 勸請申奉ル被之御神リキニ依テ
- 72 白體シラタヘ之寶物タシコフ且穀之盛物百味御食
- 73 御酒御領リヤウヲ捧萬々九セン之寶ヲソ
- 74 白牛之車ニ乗セテ九山八海之波高ヲソ
- 75 般若之御船ニ乗テ石橋セキキヤウ之難凌シノゴカタキヲソ
- 76 實相真如之一念コユレバ
- 77 彌陀如來向之引正ムカイイシヤイ之御手ミナヲ清テ
- 78 彼ノ神力リキニ依テ淨土エ參バ

- 79 諸天才女七寶カンエリツクノ冠附頂カキテ
- 80 九品蓮臺レンダイニ向イ取リ給バ
- 81 五智五佛勸請社水ヲス、ギ
- 82 惡業煩惱ノアカヲ除テ
- 83 三身ノ月ホガラカニ照シセ清海實智ノ水清クスミ玉イフ也
- 84 南無日本國中小神祇當所ノ鎮守村ノ御神
- 85 三神之内土公荒神宇賀神
- 86 將七曜九曜二拾八宿三拾六金キン
- 87 三聞神玉女神今日ノ大旦那小旦那
- 88 諸モロモロ之施主等氏神見女ミメノ王子等
- 89 謹敬白再拜々々急急如律令

二  
御  
神  
樂